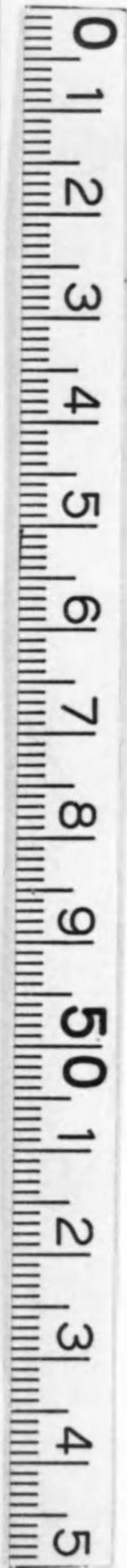


910.23-Sa85ㄗ



1200500754334

91023
A85



始



26.12.7

910.23
SA85

佐藤仁之助著



平安文學史

東京

敬文堂刊



自序

余は小心、常に頗る吾が研究に係る著書の公刊を憚るのである。余は、我が國學界の事物に對しては、吾が力の許す限りの考證に據つて得た所のものでなくては、決して研究を發表しないことゝしてゐる。故にたとひ、先賢の説で、世上一般に襲用してゐる説でも、其の考證の確實でないもの、若しくは、全く考證のないものに對しては、其の説を墨守することを避けて、余が新に考へ定めた説を發表する例である。されば、突然余が研究に係る著書を打見た人は、余が新説を目して異端邪説のごとく思惟することもあらうと思ふ。然しながら皆考證の結果であるから、強ひて異説を好んで、自から快とするのではない。

我が國學の中に於て、平安文學は、遙に上古の跡を承けて、更に空前の文學を大成して、其の模範を永遠に遺したものであるから、誠に我が文學の中樞と稱すべきものである。故に若しも、此の文學の研究に瑕瑾があつたら、其の影響亦實に測るべからざるものがあるのである。吾が友敬文堂主竹内君、嘗て屢々吾が研究に成れる平安文學史の公刊を促したけれども、思ふ仔細があるといつて、既に數年を経過した。されど、早稻田學園では、余も亦文學史を

講ずること、此に十有五年に垂んとし、其の教案も、年々に改修せられて、新説も愈々多くなつた。此の時に當つて、學園の學生大衆の注文が出た。即ち、余の文學史は他に参考書がないので、筆記に困ることが多い。一同の希望であるから、成るべく早く公刊して其の便を圖りたいといふことであつた。願へば、多年竹内君の勧誘もあり、今又學生の熱望もある。著書公刊を憚る本意も、斯學の爲めには、斷然之を翻して、快く其の請求に應ずるのが當然であらうと覺悟した。因つて先づ平安文學史の公刊に著手したが、草卒の事として、固より遺漏もあるかも知れぬ。來るべき機會に改修して、完全を期する所信である。蓋し學問は本より世界的の事業で、一人一己の私事ではない。切に博雅の大教を仰ぐものである。

昭和十年元始祭の朝日の豊榮昇りに

佐藤仁之助記

凡例

- 一、本書に收めた平安朝文學の作品は、思想感情を中心として見た代表作のみで、従つて全部を網羅してはゐない。
- 一、本書は、初めに平安朝初期に隆盛を極めた漢詩漢文と、其の教育の本源たる大學私學を説き、尋いで、國史律令の撰定に就いて漢文の應用を示し、更に中期の漢文に依つて、漢學の變遷を明かにした。
- 一、假字の發達は、和歌和文興隆の源泉であることを本として、和歌復興の功勞者として、興福寺の大法師と六歌仙とを詳説した。
- 一、和歌復興に伴つて和魂漢才を論じ、古今和歌集勅撰に由つて和文が始めて奏覽に入つたことに就いて紀貫之の功績を明かにした。
- 一、神樂歌、催馬樂、和讃、今様及び朗詠に依つて當時の社會相を討ね、且つ神樂歌の本義を釋いた。
- 一、物語は我が平安文學の中樞神經である。因つて最も其の性質、原因、變遷を考證し、殊に其の分類に力を用ひて、初めに教訓物語の由來を論じ、歌物語を説き、新に情操物語の一目を設けて、伊勢物語、源氏物語を收めたのは、哲學、心理學、社會學等の見地から考定したものである。
- 一、源氏物語の解説は第一節から第十節に涉つて、すべて新しい研究を發表した。之に據つて作者紫式部が

時代相、女子教育、文學觀、倫理觀、審美觀、及び神佛の信仰に就いて、自然と人生とを觀察して社會改良策を論じ、次に來るべき理性的時代を豫言したること等を論述した。

一、歴史物語の代表作、榮華物語と大鏡とに就いて、從來の物語との關係を明かにし、殊に大鏡の作者が大和魂を本として、國體の尊嚴を説き、大義名分を明かにして、不知不識の裡に、國民精神の活動を説いた大々的史論たることを證明した。

一、日記・紀行の代表作として、土佐日記と、紫式部日記とを採つたが、土佐日記では、旅中の諧謔、航海の困難、風物の鑑賞、國守の善政、時事の評論、和歌の奨勵を舉げて、從來の解説を改めた。

一、紫式部日記中から、中宮御産、皇子御誕生、中宮と齋院、女子の修養、作者の韜晦を詳説した。

一、枕草子に就いては、作者の特長、枕草子の由來、文體の新研究、作者の機鋒、敘事の熱烈、歌枕の資料、跋文の眞意等を力説した。

一、本朝文粹と明衡往來を以て、本書の巻軸としたのは、次期に來るべき鎌倉の新文學の根柢を窺知せしめる微意の存するが爲めである。

一、代表作として舉げた書類は、唯其の本文を引證するに止めたから、其の異本類本其の他の古書文までを網羅しない。聊か物足らぬ憾があらう。蓋し本文に據つて作者の心境を明かにするのを主眼としたからである。

一、本書の公刊は、至急を要した爲めに、索引を作る暇がなかつた。姑らく讀者の寛容を願つて置く。

一、本書の公刊に就いては、學生諸君の熱心な希望と、敬文堂主人の盡力とに對して謹んで謝意を表する次第である。

昭和十年一月

著者自記

凡國學所要雖無論
 涉古今究天人其自
 非和魂漢才不能闕
 其闕與矣
 (菅家遺誠)

平安文學史 (目次)

總論

第一章 漢文學

一 弘仁前後の詩文……………二三
嵯峨天皇文教振興—唐風影響—性靈派詩豪—平城嵯峨淳和三帝宸藻—勅撰詩集の始—凌雲集—文華秀麗集—經國集—遍照發揮性靈集

二 大學と私學……………二〇
京都の大學—職員教官—學生資格—定員—文章院—大學衰微—諸國の國學—教官—定員—太宰府學業院—私學—弘文院—勸學院—學館院—淳和院—獎學院—綜藝種智院—綜藝種智院式

三 延喜時代の詩文……………二六
漢文學の代表者—菅原道眞—菅家文章—菅家後集

四 國史律令の撰定……………二九
續日本紀—日本後紀—續日本後紀—文德實錄—三代實錄—六國史—日本書紀と五國史との讀法—

目

次

一

類聚國史—皇大神宮儀式帳—止由氣宮儀式帳

五 天曆時代の詩文……………三三

天德詩合—大江氏—菅原氏—大江朝綱(後江相公)—菅原文時(菅三品)—兼明親王(前中書王)—橘直幹—朝綱の名句—文時の秀句—前中書王の對句—直幹の申文

六 寛弘時代の詩文……………三七

一條天皇と中宮定子—四納言及び其の他の文人—藤原氏の擡權—具平親王—藤原道長—藤原爲時

第二章 草假字の發達……………四〇

一 草假字の大成……………四〇

草假字—女文字—女手—草—いろは歌—假字手本—女子最初の習字本—「なにはづ」の歌—「あさかやま」の歌—三階—三筆

二 片假字の統一……………四三

片假字の始—經文の傍訓—「傍訓假字」—悉曇章—五十音圖—吉備大臣—「ン」の假字—固有國語の音韻研究の要具—漢字古音研究の要具—動詞活用研究の最大標準

第三章 和歌の隆興……………四五

和歌衰微—桓武平城嵯峨三天皇の御製—皇族重臣の作歌—日本紀御前講筈—日本紀寬宴和歌

一 興福寺大法師の長歌……………四六

仁明天皇滿四十御賀—興福寺大法師の奉賀—興福寺大法師の長歌内容—續日本後紀の意見

二 六歌仙の功績……………五〇

六歌仙—古今和歌集序の六歌仙評—僧正遍照—在原業平—小野小町—文屋康秀—喜撰法師—大伴黑主

第四章 和歌と漢詩……………六一

一 和魂漢才……………六一

菅家遺誠—和魂漢才—「ヤマトダマシヒ」—「ヤマトゴコロ」—日本紀寬宴和歌—「日本紀私記」—「やまところある人」—「やまとだましひかしこき人」—「ヤマトウタ」—「カラウタ」—「古今和歌集」勅撰の原因

二 古今和歌集勅撰……………六四

古今和歌集勅撰—國文の序奏覽—後世の模範—部立と歌數—撰者—貫之の歌風—貫之の修辭法—紀友則—凡河内躬恒—壬生忠岑—よみ人知らずの歌—「君が代」の歌—雜體—總括

三 後撰和歌集勅撰……………七二

和歌所—梨壺の五人—後撰集—體裁内容の不備—宸筆奉行文—廣幡女御の發議

四 拾遺集……………七三

花山天皇御撰—藤原公任の拾遺抄—人口膾炙の歌

五 歌合……………七四

歌合—歌合の沿革—天徳歌合—歌合の弊

第五章 神樂と催馬樂……………七六

總説

一 神樂歌……………七六

神樂歌—神遊の歌—天岩屋戸の故事—神樂の始—古語拾遺の神樂の詞—庭燎—採物歌—大前張—

小前張—星—雜歌—内侍所の御神樂—樂器—神樂次第—公事根源の本文—證歌

二 催馬樂……………八三

諸國の民謡—樂器—律呂—催馬樂の名義—催馬樂譜—源家流—藤家流證歌—上流人譚席の餘興

第六章 和讃と今様……………八七

今様の意義—讚歌(漢讚)—和讃—漢讚・和讃・今様の關係

一 和讃……………八七

和讃の魁—いろは歌—假名手本—草假字—和讃の種類

二 今様歌……………八九

今様歌—今様の出典—今様合—今様の例

第七章 朗詠……………九七

倭漢朗詠集—篇目—朗詠の詠法—朗詠集中の詩句—朗詠の例

第八章 物語……………九六

物語—語部—古事記—風土記—日本書記—天日矛—伊豆志賀登賣—夢野の鹿—水江浦島子—上古物語と平安朝の物語との性質の相違

一 物語の性質……………九七

物語の性質—國分寺國分尼寺の説經—過去現在因果經—繪卷物—繪卷物の圖様—曼荼羅の圖様—

物語と挿繪—日本國現報靈異記

第九章 教訓物語……………一〇三

教訓物語の系統—物語の始祖竹取物語—觀音力を骨子とする宇津保物語

一 竹取物語……………一〇三

物語の始祖—竹取翁の大主眼—餘興の秀句—竹取物語の典故—人物の名の出典—作者と年代—源

氏物語繪合—竹取物語の書畫—宇津保物語の書畫

二 宇津保物語……………一〇八

俊蔭の生立—一篇の主意—觀音力の靈驗—觀音の本誓—作者—句法—篇目次第—古物語の名

四 落窪物語……………一二二

儒教影響—落窪物語の大意—孝行物語—内容の検討—源氏物語の粉本

第十章 歌 語 大和物語……………一三八

歌物語の由來—大和物語—作者—年代—大和物語の名—内容の不統一

第十一章 情 操 物 語……………一三八

和歌の衰退—古今集序の和歌論—和歌復興の威力—「あはれを知れ」—情操物語の光顯

② 一 伊 勢 物 語……………一三四

情操物語の模型—在五中將物語—業平の性行—放縱の辯—體貌閑麗—略無才學善作和歌—渤海客

訪問—殿上の角力—忠節—孝養—友愛—審美眼—信仰

③ 二 源 氏 物 語……………一三三

日本の至寶—源氏外傳の文—源氏物語に見えたる物語の本領

第一節 一 部 の 梗 概……………一三六

源氏物語五十四帖—雲隱—宇治十帖

一 前編の名目及び源氏の君の年譜……………一四〇

二 宇治十帖の名目及び薫君年譜……………一四一

第二節 一 部 の 本 旨……………一四三

社會改良の大論文—社會の風潮—作者の人格—女子の模範—作者の生活—平安朝極盛時代の大曼

茶羅

第三節 作 者 の 時 代 觀……………一四四

作者時代觀の検討—攝政關白の素質—作者の道長觀—道長の懸想—女子の人格論—典型的女性—

「サアラヒ」の奉公

第四節 物 語 の 準 據……………一四九

「拙堂文話」の説—「源氏物語之音樂」の説—物語の因據二條—著作年代考證

第五節 作 者 の 傳……………一五七

、 禁式部の家系—「大日本史」禁式部の傳—資性敏慧—閨宮精妙—婉順淑嫻—物語中に表はれたる婦

徳の譬喩

第六節 女 子 の 教 育……………一六〇

物語に表はれたる女子教育論—女子教育の難—女子教育の標準
 第七節 草假字全盛……………一六三

假字文學—假字全盛—草假字—葦手書

第八節 倫理觀……………一六六

倫理上の非難—作者の深意—先哲の評言—あはれを知る—帯木の發端—全篇の大綱—上層階級の描寫—不用意の過失—源氏對藤月夜内侍—柏木の心境—柏木自責の詞—物のまぎれ

第九節 審美觀……………一七三

四季の敘述—音樂の鑑賞—南御殿の春遊—童の雪まろばし—源氏が琴の感想—音樂家の弊

第十節 神佛の信仰……………一七九

兩部神道—源氏の顯文—神佛と佛神—古神道の名残—天台眞言—顯密二教—修驗道—宿命論—紫上の法華供養—女三宮の持佛供養—驗者の祈禱—八宮の失意—八宮の道才—八宮の態度—浮舟の落飾—悟道の眞諦—夢の浮橋の因據—情操物語の本旨

第十二章 歴史物語……………一九三

六國史—榮華物語—大鏡の出現—大鏡の紀傳體—史論の祖大鏡—榮華物語の挿繪

第一節 榮華物語……………一九六

榮華物語—又名世繼—四十一卷—(一)書名の由來—(二)上下篇の區別—上篇目次—下篇目次—(三)作者—(四)著作年代—(五)文體と特色

第二節 大鏡……………二〇九

大鏡—一名世繼物語—第一編述の主眼—第二帝紀敘述の理由—第三國體闡明—第四大和魂—第五佛教本位—第六史記中の「書」に倣ふ

第十三章 日記紀行……………二二三

第一節 土佐日記……………二三四

第一 旅中の諧謔……………二二六

第二 亡女の哀悼……………二二八

第三 航海中の困難……………二三二

第四 風物の鑑賞……………二三四

第五 國守の善政……………二三七

第六 時事の評論……………二四〇

第七 和歌の奨勵……………二四一

第二節 紫式部日記……………二四五

缺本説抄本説脱漏説源氏物語との優劣論榮華物語との關係

第一 中宮御産 皇子御誕生……………二四七

第二 中宮と齋院……………二五〇

第三 女子の修養……………二五二

第四 作者の韜晦……………二五四

第十四章 枕草子……………二五六

第一 清少納言……………二五七

第二 枕草子の由來……………二五八

第三 文體……………二五九

第四 清少納言の機鋒……………二六三

第五 敘事の熱烈……………二六六

第六 歌枕の資料……………二六八

第七 跋文の眞意……………二六八

第十五章 本朝文粹……………二七〇

本朝文粹續本朝文粹本朝文粹目次續本朝文粹目次本邦創作の願文及び表白

第十六章 明衡往來……………二七二

明衡往來雲州消息萬葉集の尺牘本朝文粹の尺牘明衡往來の消息

はかなくも、おもひけるかな。
 ちもなくて、はかせのいへの。
 めのとせむとは
 大江匡衡朝臣

さもあらばあれ、やまとごころし
 赤染衛門

かしこくば、ほそちにつけて
 あらすばかりぞ

平安文學史

總論

「青丹昔奈良の都は、咲く花の、にほふがごとく、今さかりなり。」と稱へ、「御民吾、生けるしるしあり、天地の、さかゆる時に、あへらく思へば。」と雄叫した渾厚跌宕なる奈良七代七十年の大陸的文化の後を受けて、山紫水明なる平安京の日本的新文學が發生した。この平安文學こそは、實に我が日本文學の標準を大成したものであり、海外諸國にも未だ嘗て見聞せざる純文學をさへ貽したるものであり、その偉觀は、我が日本民族の絶大なる矜と謂ふても過言ではあるまい。

今此に平安遷都皇紀一四五四年桓武天皇延暦元年以來、源賴朝が諸國總追捕使に補せられた皇紀一八四六年後鳥羽天皇文治元年に至るまで、前後約四百年の星霜を重ねた平安文學の特色を叙述するに當つて、これを四時に比して譬へる時、上古を冬とすれば、中古は春と謂ふべきである。一陽來復の春を待つて野に山に咲き誇るべく冬籠せる草木のごとく、我が



上古文學は勃々たる日本精神を深く堅く其の胸底に秘めて機を待つ姿であつた。而して、一朝この機に恵まれるや、春風春水一時に來つて、花鳥の色音なつかしく、光彩燦爛人目を眩耀するばかりの盛觀を以て、展開せられたものこそは、洵に平安文學であつた。

然らば、この時代が斯のごとき文學を生み出したのは、抑何に起因したであらう。不世出の英主桓武天皇は、つらく宇内の形勢を察せられ、此に大陸的文化の殿堂奈良を去つて、新日本建設の第一歩として、山水明媚の平安京を經始せられた。是は、遂に皇祖神武天皇の洪謨に則り、又中興の明主天智天皇の芳躅を紹がせられたのである。而して先づ東北蝦夷を征伐して徐に内治を整へ、更に唐國と交通して其の制度文物を輸入し、廣く智識を世界に求めて天下の耳目を一新し、以て國家萬世の基礎を鞏固にすることを誓め給うた。次いで嵯峨天皇は更に克く其の鴻緒を繼いで外交を盛にし、内には文學を興し、佛教を獎勵して専ら社會の進歩と文運の隆昌とを企畫せられた。是に於て、京都の官立大學、諸國の國學の外に私立の大學が續々起つた。中でも弘法大師の綜藝種智院のごときは、佛道の傍ら儒道をも教へ又藏書も多く、頗る文教の開發に貢獻した。併し當時の思想界は反つて佛道を主として儒道は振はず、大學には明經、紀傳、明法、算の四道を別ち各博士の官があり教授に當つたとは

云へ、明經算道の學は進まず、反つて文學の一方にのみ偏して詩文に長ずるもの多く輩出し其の作品の漸く佳境に入つたことは、嵯峨、淳和兩帝の勅撰なる凌雲集、文華秀麗集、經國集に就いて知ることが出来る。加之、白氏文集は白樂天在世の時に舶來し、人々が競つて之を學んだので、益々其の體裁を失はず、遂に白氏の眞に逼るものすら出現した。

然るに舊都奈良では過去七十年間培養せられ發育し來つた日本精神は嚙勃としてある機會を待つてゐたが、偶然にも和歌となつて出現した。仁明天皇嘉祥二年寶算四十の御賀に興福寺の大法師等が長歌を人形に添へて献上して慶賀の意を述べた。而も其の長歌は堂々數百言、此に由つて我が固有の和歌は言靈の幸ふ國と言ひ傳へて來た言語の美術で、到底漢文の博士等の手で出来るものではないと云ふ大氣饒萬丈當るべからざる概があるのは今にして想ふも實に痛快な至りである。是の大法師の獅子吼がやがて和歌復興の先鞭を着けたものであることは果して何の因縁であらう。

「徳孤ならず必ず隣あり」とか。外國文化の輸入と模倣とのみに是日も足らぬ狀況である新都平安京、而も同じ仁明天皇の御諒闇の果ての日、出家入道した僧正遍昭と文徳天皇の長皇子惟喬親王の遜位に逢つて青雲の志を抱きつゝも徒に風流に畢生を捧げた在原業平は共に身

皇孫の位置にありながら、時代と逆行して率先和歌を唱導して能く其の胸臆より流出する赤誠を吐露して、我が固有の誠の道を振興するに力めたことは、詢に興味深い對照ではないか。之と前後して起りて同じく力を致した文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主も亦和歌に托して其の言はうと思ふ限りを述べたが、其の詠みと詠む和歌には、各自に獨特の格調を具へて天晴後世に模範を示してゐる。世に「六歌仙」と仰ぐものは以上の六人の事である。蓋し上古の歌聖、人麿、赤人に亞ぐ和歌の大先達と崇め尊んだものである。

光孝天皇は潜龍の御時から、頗る和歌が我が邦の長技たることを主張あらせられた。順徳院の禁秘抄に「和歌は光孝天皇より未だ絶えず、綺語たりと雖へども我が國の習俗なり棄て置くべからざる事か」(原漢文)と記されてゐるのに據つても明瞭である。宇多天皇登極あるや亦和歌堪能の才人を寵用せられたことも、和歌勃興の氣運を促進したことは疑もないことである。

醍醐天皇の御代に至つて、我が文學上の標準とすべき和歌、和文が、公然天覽に供せらるる空前の盛事が起つた。天皇即位の六年、延喜五年、皇紀一五六五年、天皇は、當時に於ける和歌和文の代表的權威者、御書所預紀貫之以下四人に勅して、萬葉集に漏れたる名歌と、

欠

欠

弘仁前後の
詩文

嵯峨天皇と
漢文學

第一章 漢文學

一 弘仁前後の詩文

嵯峨天皇文教振興—唐風影響—性靈派詩豪—平城嵯峨淳和三帝宸藻
—勅撰詩集の始—凌雲集—文華秀麗集—經國集—遍照發揮性靈集

嵯峨天皇は天資好文、經史を博覽し、文を善くし、又書に妙を得給ふあまりに、愈々唐風を慕はれ、朝會の禮、衣服の制、拜跪の等差まで一に唐儀に準ぜしめられ、又大に文教を獎勵あらせられた結果、學事盛に起つて、文學は益々進歩した。時に唐は憲宗の元和、穆宗の長慶の頃に當り白樂天、韓退之の全盛時代であり、尙ほ白氏在世の際かの「白氏長慶集」が舶來して彼此の詩文界に密接なる交渉の深かつた時代である。従つて我が邦では「白氏長慶集」を愛讀し、其の詩風に倣ふものが漸く多くなつて其の壘を摩するものも起つた。而して當時我が邦の詩を學ぶものは「白氏文集」を喜んで、其の風に倣うたから、白氏文集の貴重せられたことは、奈良朝から廣く讀まれてゐた「文選」と相並んで、全く文學上の寶典と仰がれた。

切取
5.25.6.19
5-12頁
關五

嵯峨天皇の御世、平城天皇は讓皇を以て西院にまし／＼、淳和天皇は皇太弟として東宮にまし／＼て、御兄弟の御間柄極めて融睦に渡らせられたから、花晨月夕の讌樂に宸章の往復幾ど虚日なく、而も群臣を召して詩賦を唱和せしめられた。上の好む所下是より甚しきものあつて、下も自から詞藻を巧みにするもの多く、遂に詩賦は其の威力を専らにするに至り、此に勅撰の詩集を出す盛運となつた。奈良朝の「懷風藻」は奈良朝以前の詩賦を網羅してあるが、其の詩風は全く支那六朝の法に倣ふもののみであつた。今や六朝風と初唐の風とに據つた詩賦が始めて勅撰集で現はれて來た。其の最初に現はれたのは、嵯峨天皇の弘仁五年の頃に成つた「凌雲集」である。

「凌雲新集」(又凌雲集と云ふ)は嵯峨天皇の勅を奉じて、小野岑守が菅原清公、勇山文繼と再三討議し、尙ほ當時の大詩人賀陽カヤ豊年の閏を歴て成つたものである。桓武天皇の延暦元年から、弘仁五年までの作者二十三人、作詩九十首を撰むと云ふことが、卷頭に載せたる小野岑守の序に見えてゐる。其の内容は、詩が太上天皇平城天皇、今上天皇嵯峨天皇、皇太弟淳和天皇の御製令製を始として、臣下では藤原冬嗣以下、無位の巨勢志貴人に至るまでを、位階順に配列してある。詩の最も多いのは嵯峨天皇の二十二首で、次いで賀陽豊年、小野岑守の各十三首、皇太

弟の五首、菅原清公の四首、其他諸家のもの一二首づつである。

凌雲集が成つて後、數年を経て弘仁八九年の頃、勅命に依つて、更に文華秀麗集三卷が現はれた。藤原冬嗣が、嵯峨天皇の勅を奉じて、仲雄王、菅原清公、勇山文繼、滋野貞主、桑原腹赤等と共に撰進したものであると、序文に見えてゐる。撰進の方針は、凌雲集に漏れたものを撰ぶにあつて、作者二十六人、作詩百四十八首を收めてある。其の詩の多いのは、嵯峨天皇の三十四首、中でも姫大伴氏の作一篇は萬綠叢中紅一點の觀がある。此の撰集には其の部類を別けて

遊覽、宴集、餞別、贈答、詠史、述懷、艶情、樂府、梵門、哀傷、雜詠

としてある。而も作者の名を唐風に擬して野岑守、勇文繼、滋貞主といふやうにしてあるなど、前集の凌雲集よりすべて更新の特色が開かれてゐる。

文華秀麗集が成つて後十餘年を経て、淳和天皇の天長四年頃「經國集」が勅撰になつた。桓武天皇の皇子良岑安世が、淳和天皇の勅を奉じて、滋野貞主、南淵弘真、菅原清公、安野文繼、安部吉人等と共に撰進したものである。收めてある詩は奈良朝に溯つて文武天皇慶雲四年皇紀一三六七年、以後天長四年皇紀一四八七年に至るまでの作者、百七十八人の賦十七

首、詩九百十七首、序五十一首、對策三十八首、以上を二十卷に編述したものであると、滋野貞主の序文に見えてゐる。而も全部二十卷と云ふ大部なものであつたのが、今は散逸して僅に卷一賦、卷十樂府、卷十一雜咏、十三雜咏、卷十四雜咏、卷二十對策の六卷だけであるのは、惜しむべきことである。惟ふに此の集は、其の質に於ても、量に於いても、遙かに前二集に勝り、又其の時代も、現代のみでなく、更に上古に溯つてゐる事も一大進歩を見せたものである。而して其の類別や作者の名を唐風に擬したことは、前の集と同じであるが此の集には詩賦の外に、序や對策などを收めた所が特色である。此の體は恐らくは「文選」に倣つたものであらう。後の「本朝文粹」も此の體である。嵯峨天皇の御製は例に依つて頗多くく、又皇女有智子内親王及び宮女惟氏のごとき非凡な閨秀作家が表はれて來たことも、當時上流社會に漢文學が隆盛となつた證據と認めらるゝものである。特に空海の作詩が始めて此の集に見えてゐる。

空海と漢文學

我が佛敎界の偉人で而も文學上に大功勞ある此の沙門空海の詩文集で「遍照發揮性靈集」と稱する十卷の書がある。世に略して「性靈集」とも云ふ。其の高弟高雄の眞濟が編纂する所であることは、其の序文に詳である。其の集中、第一、第三は詩で、第二、第四、第五、

第六、第七、第八、第九は文で、第十には文と詩とを併せて載せてある。第十にある「十喻詩」と「九相詩」とは世に名高く聞えてゐる。又儒、佛、老、三教を論じた「三教指歸」三卷は、二十四歳の時の著述である。又「文鏡祕府論」六卷は六朝及び唐代に行はれた詩文論を述べたものである。東洋に於ける漢文修辭學の最古のもので、皆今に存してゐる。尙ほ之を要約したもので「文筆心眼抄」がある。當時極めて文學上の裨益となつたものであらう。以上列擧した勅撰集の詩及び性靈集から、若干の詩文の例を示す。

▼凌雲集

太上天皇 御製 (平城天皇)

賦 櫻花

昔 在 幽 巖 下。	光 華 照 四 方。
忽 逢 攀 折 客。	含 笑 亘 三 陽。
送 氣 時 多 少。	乘 陰 復 短 長。
如 何 此 一 物。	擅 美 九 春 場。

弘仁十四年の春、嵯峨天皇が、賀茂の齋院の花の宴に行幸あらせられ、文人を召して、春

日山莊の詩を賦せしめられた時に、皇女有智子内親王は、韻を探つて「塘、光、行、蒼」を得給うて、次のごとき七言律詩を作り、天皇に上られた。天皇は叡威の餘り、三品に敍せられた。皇女は時に御年僅に十七でおはしたと、續日本後紀に見えてゐる。

寂寂幽莊山樹裏。

仙輿一降一池塘。

栖林孤鳥識春澤。

隱澗寒花見日光。

泉聲近報初雷響。

山色高晴暮雨行。

從此更知恩願渥。

生涯何以答穹蒼。

又次に掲げる御作の結句は「初唐の遺響あり」と江村北海が評し奉つた名句である。

▼經國集

奉和巫山高

巫山高且峻。瞻望幾岩岩。
積翠臨蒼海。飛泉落紫霄。
陰雲朝掩曖。宿雨夕飄飄。
別有曉猿叫。寒聲古木條。

▼性靈集

蘿皮函詞 七言

南峰獨立幾千年。松柏爲隣銀漢前。
戴日蘿衣物外久。函書今向相公邊。

納涼房望雲雷 五言

雲蒸壑似淺。雷渡空如地。颯颯風滿房。祁祁雨伴颺。
天光暗無色。樓月待難至。魑魅媚殺人。夜深不能寐。

書劉希夷集獻納表一首

右伏奉小内記大伴氏上宣書取奉進。但恐久韞揮翰筆不勝意。不免強書空汗。珍紙。王昌齡詩格一卷。此是在唐之日、於作者邊、偶得此書。古詩格等、雖有數家、近代才子、切愛此格。當今堯日麗天、薰風通地、垂拱無爲、頌德溢街。不任手足。敢以奉進。庶令屬文士知見之矣。還恐招恥遼豕。貞元英傑六言詩三卷。元是一卷。綠書樣大、卷則隨大。今分三卷。文是秀逸之文。書則褚臨王之遺體也。比屬臨池之次、寫得奉上。飛白書一卷。亦是

在唐之日、一見此體、試書之。虎變爲犬、雖未成功、夫比之獻芹、伏願
 天慈曲垂、一覽不任、葵藿之至、謹遣弟子僧實慧、謹隨狀奉進、輕贖宸嚴、
 伏深戰汗、謹進。弘仁二年六月二十七日、沙門空海進。

二 大學と私學

京都の大學—職員教官—學生資格—定員—文章院—大學衰微—諸國の
 國學—教官—學生—定員—太宰府學業院
 私學—弘文院—勸學院—學館院—淳和院—獎學院—綜藝種智院—綜藝
 種智院式

平安朝當初の大學は京都二條大路の南神泉苑の西にあつた。其の内に「本寮」があり、「又
 「都堂院」がある。「都堂院」は一に「北堂」と云つた。紀傳道の學舎である。又「明經道院」が
 あり、一に「南堂」と云つた。その他「算道院」、「明法道院」がある。又「廟堂」、「廟倉院」
 等がある。「廟堂」では釋奠を行ひ、「廟倉院」は、其の器具並に、孔子の畫像等を藏めてある。

大學の長官を頭と云ふ。後に頭の上に「別當」を置いた。別當は中世多く親王大臣を以て
 任じ、甚だ之を重んじた。教官には諸道の博士があり、外に助教直講等があるが、當時の「明

經博士」、「明法博士」など云ふのは皆官名である。

學生は五位以上の子孫並に東西史部の子、若くは八位以上の子で請願するもの、及び諸
 國の國學から貢學したものを取るのは大寶以來の制であつたが、延喜式が定まつてから、庶
 人も一經に通ずるものは試験を経て入學することが出来るやうになつた。又學生は大學の藏
 書を讀閱することを聽され、三年に一度づゝ曝書するには學生を用ゐた。大寶の制には學生
 の定員は四百人であつた。

大學寮中にある「文章院」は大江音人、菅原清公の奏請に依つて置かれた所で、之を東西
 二曹に分ち、東曹は江家の學舎、西曹は菅家の學舎としてあつた。其の入學式のごときも甚
 だ具備してゐた。

大學の制は平安朝當初から頗る整頓してゐたが、次第に衰微して、七十五代崇徳天皇の頃
 に至つては疊舎も頽廢して見る影もない有様になつた。

京都以外の諸國に置かれた「國學」は大寶の制では部内の者を博士即ち教官とし、郡司の
 子弟を教育したが、若し郡司の子弟で其の定員に満たない時には、庶民の子を取つて補ふ例
 であつた。平安朝になつてから、博士の外に權任博士があり、又非受業博士があり之を「非

學業院

業博士」とも云つた。試験合格でないものを素讀ばかり試験し、式部省で採用して、諸國に用ゐたものである。故に學事には關涉せず常に俗務に従事した。學生の定員は大寶の制では大國が五十人、上國は四十人、中國は三十人、下國は二十人であるから平安朝も大差あるまい。太宰府の「學業院」は兩筑、兩豐、兩肥の學政を司る學校である。國學は朝政の衰微に及んで一般に廢絶して其の跡も留めない狀況であるが、學業院の址は觀世音寺村の西端、南に向つた地で其の西に小川が流れてゐると筑前國續風土記に見えてゐる。

私學

平安遷都の後、大學國學の制大寶の制を踏襲してゐたが、時勢の推移と文運の進歩とは亦之に満足すべきでない。殊に門地高さものは、皆自己の優越なる地位を向上させる爲には、更に學校を起さぬを得ぬ狀況に立至つた。私學の最も初に起つたものは和氣氏の「弘文院」である。是が我が邦私學の始である。

弘文院

「弘文院」は和氣清麻呂の子廣世、父の志を繼ぎ、其の私宅に置いた學校である。内外の典籍數千卷を藏した。墾田四十町を以て永く學料に充てた。延暦十八年頃の建設であらう。廣世は大學の別當であつた時に墾田二十町大學寮に納めて、勸學料とした程の教育に熱心なる人であつた。

勸學院

「勸學院」は弘仁年中に左大臣藤原冬嗣の創立する所で、大學寮の南曹となし、自家の食封を割いて其の資とした。此の院の學生も亦學業優長なるものには學問料を給し、又文章博士及び當學學頭の推舉に由り、文章得業生に補し、獻策を請うた。藤原氏の盛なるに至つては、其の昇進のごときも、却つて大學出身の學生に優る狀況であつた。又藤原氏の人關白となり、又皇后となり、其の皇后が皇子生誕があるやうな時や、藤原氏に關した大慶事がある時には、此の院の學生が連歩して拜禮を行ふことが例であつた。之を「勸學院の歩」と稱して饗祿を賜ふことがあつた。世に「勸學院の雀が蒙求を囀る」と云ふ諺がある。如何に盛況であつたことが窺はれるのである。

學館院

「學館院」は嵯峨天皇の皇后橘嘉智子が、其の弟右大臣氏公と議して設立した所である。村上天皇の康保元年に、參議橘好古の奏狀に依つて大學寮の別當とした。別當は最初氏の長たる人が之に補した。後に橘氏の衰へてからも、猶ほ氏の人が長者號を存し、院の學問料の田園を知行したやうである。而して藤原氏の人が橘氏は定となつて之を總督してゐた。

淳和院

「淳和院」は本來淳和天皇の離宮で「西院」と稱してゐた。後に王氏の學問所となつたが、其の年代は詳かでない。元慶五年に永く公卿の別當を置いた。別當は後世、獎學院と同じく

獎學院

源氏長者の兼補する所であつた。

「獎學院」は元慶五年に、在原行平の設立した所であつて、當時は位田、封戸を割いて其の費用とした。昌泰三年大學寮の南曹とした。學生を推舉することは勸學院と同一である。後に源氏の長者たる人が、此の院と淳和院とを兼ねて別當となるので之を「兩院別當」と云つた。

綜藝種智院

「綜藝種智院」は淳和天皇天長五年、佛教界の偉人沙門空海が建立した所で、儒佛の二教を教授する制であつたが、殊に他に異なる所は、此の院では入學者の資格に制限がなく、一般民衆に儒佛二教を混一した新教育を施すのを理想としたことである。空海入唐留學中、唐には每坊に閭塾を置いて童稚を教へ、每縣に鄉學を開いて、廣く青年を導いてゐるのを見て、教育の普及を實見したのである。然るに當時我が邦の官私の學校は、皆所謂特權階級の子弟のみを收容して、一般民衆に教育を施す設がなかつたので、之を慨き、こゝに此の院の建立を考へた。會々右大臣藤原三守が、東寺の傍なる邸宅二町四方の地に、五間の家があるのを寄附したので、之を「綜藝種智院」と名づけて學校とし、主として佛道を教へ、傍ら儒道等を教へた。其の綜藝と名づけた所以は、衆藝を兼ね綜ぶるの義である。故に教師には道人あ

り、俗博士があり、藏書には佛書あり、儒書があつた。其の開院式は天長五年十二月十五日であつた。其の建立の由來一切を空海の自筆で書いた「綜藝種智院式並序」は堂々たる大文章で、其の眞筆が今日に存してゐる。其の「俗博士教授」の章に

右九經、九流、三玄、三史、七略、七代若文若筆等書中若音、若訓、或句讀或通義、一部一帙、堪發瞳矇者住。若道人、意樂外典者、茂士孝廉隨宜傳授。若有青衿黃口、志學文書、絳帳先生、心住慈悲、心存忠孝、不論貴賤、不看貧富、隨宜提撕、誨人不倦、三界吾子、大覺師吼、四海兄弟、將聖美談、不可不仰。

と見えてゐる。又「道人傳授」の章には

右顯密二教、僧意樂兼通外書、任住俗士有意樂學、內經論者、法師心住、四量四攝、不辭勞倦、莫看貴賤、隨宜指授。

と見えてゐるが、更に學生に必要な經費問題には「師資糧食事」の章に

夫人非懸瓠、孔丘格言、皆依食住、釋尊所談、然則欲弘其道、必須飯其入。若道若俗、或師、或資、有心道學者、並皆須給。雖然、道人素事清貧、

未^タ辨^セ資^シ費^フ且^ニ入^ル若^ク干^ノ物^ヲ若^シ有^リ意^ニ益^シ國^ヲ利^ス人^ヲ志^ニ求^ム出^テ迷^レ證^シ覺^ス者^ハ同^シ捨^テ涓^ニ塵^ヲ相^シ濟^ス此^レ願^シ生^シ世^ニ同^シ駕^ニ佛^ヲ乘^ル共^ニ利^シ群^ニ生^ヲ

と見えてゐる。每章皆新教育の表現でないものはない。惜いかな此の庶民の新教育は二十二年で絶えて繼ぐものがなくなつた。

三 延喜時代の詩文

漢文學の代表者—菅原道真—菅家文章—菅家後集

醍醐天皇の御在位三十四年間に於て延喜は二十二年の久しきに及んでゐる。此の間は實に漢文學隆盛の時である。而して漢文學を代表する人は菅原道真である。菅原道真の家は代々漢學世襲の門閥家であつたが、道真は文章生から出身して、五朝に歴事して、遂に右大臣の顯職に昇つた、我が邦古今未曾有の大政治家であり、亦不世出の大詩人で又書を巧にしたのみならず、傍ら和歌にも秀でてゐたから實に和漢兼備の大文豪であつた。道真は其の人格極めて高く、而も權臣の讒奏に依つて太宰府に貶せられて、晩年は頗る不遇で畢つた同情から其の學徳を尊崇せられて遂に文學の神とさへ仰がるゝに至つたことは今更言ふまでもない。

「菅家文章」十二卷は菅原道真が左遷以前の詩文集であり「菅家後集」一卷は太宰府謫居中の作を収めたものである。尙ほ別に「菅贈太政大臣歌集」一卷がある。

「菅家文章」は、第一卷乃至六卷は詩、第七卷以下は文章を収めてある。後集は殊に謫居三年間の愁苦を詠じたもので、其の悲痛の情、切々人に逼り、卒讀に堪へぬものが多い。道真は白樂天の詩風に私淑したとは云へ、往々樂天の眞に逼るものがあると稱せられてゐる。次の詩は其の十一歳の時の作として有名である。

月夜見^ニ梅花^一 齊衡三年乙亥、于^レ時年十一、嚴君令^ニ田進士^一試^シ之、予始^シ言^シ詩、故載^ニ此篇^一菅家承和十二年乙丑生(菅家文章一)

月^ハ耀^ク如^ク晴^ク雪^ノ 梅花^ハ似^ク照^ル星^ノ

可^シ憐^ム金^ノ鏡^ヲ轉^ス 庭上^ニ玉^ノ房^ノ馨^ク

寛平七年暮春二十六日、予侍^ニ東宮^一。○醍^{有^レ令^曰}。開^ニ大唐^一有^一日^ニ應^ニ百首^一之詩^ト。今試^シ汝^{以下}一時應^ニ十首^一之作^ト。即賜^ニ十事^一題目^一。限^ニ七言^一絶句^一。予採^レ筆成^レ之。二刻成畢。雖^レ云^ニ凡鄙^一。不^レ能^レ燒却^一。故存^レ之。

送^ニ春^一 扶三(菅家文章、四)

送^ル春^ヲ不^レ用^ニ動^ニ舟^一車^ヲ 唯別^ニ殘^ニ鶯^ト與^ニ落花^一

若使韶光知我意

今宵旅宿在詩家

九日後朝同賦秋思應制

丞相度年幾樂只

今朝觸物自然悲

聲寒絡緯風吹處

葉落梧桐雨打時

君富春秋臣漸老

恩無涯岸報猶遲

不知此意何安慰

飲酒聽琴又詠詩

又菅家後集にある詩の中から若干を示す。

不出門

一從謫落就柴荆

萬死兢兢跼踖情

都府樓纔看瓦色

觀音寺只聽鐘聲

中懷好逐孤雲去

外物相逢滿月迎

此地雖身無檢繫

何爲寸步出門行

九月十日

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持每日拜餘香

秋夜 九月十五日

黃萎顔色白霜頭

況復千餘里外投

昔被榮華簪組縛

今爲敗謫草萊囚

月光似鏡無明罪

風氣如刀不破愁

隨見隨聞皆慘慄

此秋獨作我身秋

讀家書 七言

消息寂寥三月餘

便風吹着一封書

西門樹被人移去

北地園教客寄居

紙裏生薑稱藥種

竹籠昆布記齋儲

不言妻子飢寒苦

爲是還愁懊惱余

四 國史律令の撰定

續日本紀—日本後紀—續日本後紀—文德實錄—三代實錄—六國史—日本書紀と五國史との讀法—類聚國史—皇大神宮儀式帳—止由氣宮儀式

國史の撰定

帳―尾張國熱田大神宮縁起―古語拾遺―令義解―類聚國史―延喜式

平安初期は詩文隆盛、紀傳道の人材が輩出した。従つて國史律令の撰定が續々行はれて、遂に六國史律令格式が整頓した。奈良朝に「日本書紀」が勅撰せられたのが勅撰正史の始である。之に次いで延暦年間から延喜に至るまでの勅撰正史を擧げると、

『續日本紀』四十卷 シヨクニホンキ 文武天皇以後桓武天皇延暦十年迄、九代九十五年間の歴史、菅野眞道等の撰、延暦十六年に成る。

『日本後紀』四十卷 桓武天皇延暦十一年以後淳和天皇天長十年迄、四代四十二年間の歴史、現存するものは、卷五以下の十卷に止まる。藤原緒繼等の撰と云ふ。此の書は中古以來亡失してゐたのを、寛政の頃檢校塙保己一が殘篇を京都から獲て、刊行したものである。

『續日本後紀』二十卷 淳和天皇天長十年以後嘉祥三年迄、仁明天皇御一代十八年間の歴史、藤原良房等の撰、貞觀十一年に成る。

『文德實錄』十卷 文德天皇御一代九年間の歴史、藤原基經、菅原是善、都良香等の撰、元慶三年に成る。

六國史

『日本書紀』と五國史との讀法

『三代實錄』五十卷 清和、陽成、光孝三天皇御三代三十年間の歴史、藤原時平、菅原道眞、大藏善行の撰、延喜元年に成る。
以上五國史に日本書紀を加へて世に「六國史」と云ふ。六國史に據つて上は文武天皇より下は光孝天皇に至るまで、前後百九十餘年間の歴史を通覧することが出来る。純粹の漢文を以て、編年體に記してあるのは、支那の編年體の歴史に倣つたものである。

續日本紀以下三代實錄までの五國史の資料は、皆外記局などの御日記を拔萃したものであるから、初に出來た「日本書紀」とは性質の大に異なるものである。「日本書紀」は、博く内外の史書舊記を網羅して、務めて公平に敘述し、少しも編者の私意を以て取捨せぬものであるから、其の編纂を「修撰」と記してある。五國史は根柢から御日記類を拔萃したもので、編者の思ふまゝに記述してある。故に五國史には民間の記事は極めて稀である。六國史と云へども、「日本書紀」と五國史とでは、其の讀法に非常な相違があることを忘れてはならぬ。

又寛平の頃、宇多天皇の勅命に依つて、菅原道眞が撰上した「類聚國史」二百卷は、今は殘闕して六十一卷ある。六國史中の記事を類聚したものである。又「皇大神宮儀式帳」一卷、「止由氣宮儀式帳」一卷は延喜二十年勅命に依つて大神宮から撰上したもので、内外宮鎮座の

類聚國史

皇大神宮儀式帳
止由氣宮儀式帳

尾張國熱田
大神宮緣起
古語拾遺

由來諸儀式の研究に缺くべからざるものである。又「尾張國熱田大神宮緣起」一卷がある。此の他、嵯峨天皇の弘仁三年に齋部廣成が其の家の古傳を記して、「古語拾遺」一卷を上つた。「日本書紀」、「舊事記」、「古事記」などと對照して、大に發明すべきことも少なくないから、珍重すべき古書である。

合義解

律令方面では「大寶令」の義解として『合義解』十卷は、淳和天皇天長十年に清原夏野等に勅して、法家の諸説の區々なるものに疑義なからしむる爲に、勅撰せしめられたものである。

類聚三代格

「類聚三代格」ルキジユク三十卷（現存は十五卷）は弘仁貞觀延喜三代の格キヤクを分類して、一部としたものである。「格」は律令發布の後、詔勅官符を以て律令の定法を改め、或は臨時の新制を設けたるものである。故に此の三代格は當時實際に行はれた法制の、時勢に従つて變革したる狀況を知るに無上のものである。

「延喜式」五十卷は醍醐天皇延喜年中左大臣藤原時平に勅して撰上の命があつたが、半途で時平が薨じたる爲に、其の弟忠平相續いで諸儒と合力して、十餘年を経て撰上したものである。式は官中の事務細則を記したもので、現時の事務章程のごときものである。故に令格と

對照して、詳に當時に於ける諸官の職掌を知るに最も必要なるものである。

五 天曆時代の詩文

天德詩合—大江氏—菅原氏—大江朝綱（後江相公）—菅原文時（菅三品）
—兼明親王（前中書王）—橘直幹—朝綱の名句—文時の秀句—前中書王の對句—直幹の申文

村上天皇の
詩文御獎勵

村上天皇は天資詩文に長じ給ひ、又屢々才人を召して詩賦の唱和を試みしめ給うたが、遂に「内裏詩合」を始められたなど寔に空前なる詩文の獎勵であつたから、曩に遣唐使を停められてから漢文は漸く和臭を帯びて來た所を、此に再び興隆した。當時は文柄を執るものは大江氏菅原氏の二家であつたが、大江氏には朝綱、菅原氏には文時があつて相對峙した。又皇族で最も文筆に長ぜられてあつたのは醍醐天皇の皇子兼明親王である。又橘氏では直幹が優れてゐて殊に帝寵を蒙つた。然れども當時は大江、菅原二氏が家學を傳へて勢力を有したが、詩文共に専ら美辭麗句を競ふ傾向となり、「詩合」が起つた。天德の詩合と云ふのは村上天皇の天德三年八月に天皇の御前で行はれた最も晴れの行事であつた。此の頃の詩文は「扶桑集」、「本朝麗藻」、「本朝文粹」モンズキ、「朝野群載」等に數多收めてある。又其の作者の詩文に關

天德詩合

する逸話も多く世に聞えてゐる。

大江朝綱

大江朝綱は音人の孫である。音人は世に「江相公」と呼ばれたので之に對して朝綱は「後江相公」と呼ばれた。朝綱が勃海の使節を送つた詩序の中に

前途程遠、馳思於雁山之暮雲

後會期遙、霑纓於鴻臚之曉淚

と云ふ對句は勃海の使節をして歎賞せしめたことと云ふことがあり、又平忠度が「期遙」とあるを「期無」と改めて、其の歌の師藤原俊成を感激せしめたことも、世に名高く聞えてゐる。尙ほ朝綱の詩で秀逸なものは多く倭漢朗詠集に載せてある。天徳元年七十二に歿した。

菅原文時
(菅三品)

菅原文時は道眞の孫で、文章博士となり、從三位に敘せられたので、世に「菅三品」と呼ばれた。詩文共に優れてゐたから、朝綱と共に逸話が多く世に傳はつてゐる。其の秀逸なものは倭漢朗詠集に少なからず載せてある。村上天皇が嘗て冷泉院に行幸あり、「花光水上浮」と云ふ題を以て、文時に命じて序を作らせられた。文時は熟思すれども成らなかつたので、天皇は之を促されたが屢々促がされてから出來たと云ふ。其の文中に

誰謂水無心。濃艶臨兮波變色。

誰謂花不語。輕漾激兮影動唇。

とあつた。時に天皇は將に還幸にならうとしてあつたにも拘はらず、之を見そなはして、大に御感賞があつて、再び盛宴を開かれて天明に至つたと云ふ。文時は圓融天皇の天元四年八十四で歿した。

兼明親王
(前中書王)

兼明親王は醍醐天皇の皇子で、當時の皇族中で最も博學多才文筆に長じて、又書の巧なることは小野道風と名を齊しうせられた。官は中務卿であつたので、世に「前中書王」と申した。前の中書王と申したのは村上天皇の皇子具平親王が「後中書王」と仰せられたのに對したのである。初は左大臣であらせられたのを藤原兼通が權力を専らにして、從兄賴忠を左大臣とする爲に、中務卿に左遷したから、親王は憤悶の餘りに菟裘賦を作つて、京都の洛外龜山に隱遁せられた。菟裘賦の中の

扶桑豈無影乎。浮雲掩而忽昏。

叢蘭豈不芳乎。秋風吹而先敗。

と云ふ句は名句として世に有名である。又詩では「憶龜山」の御作が本朝文粹に載せてある。

憶龜山二首

效江南曲體

憶龜山。龜山久往還。南溪夜雨花開後。西嶺秋風葉落間。豈不憶龜山。

憶龜山。龜山日月閑。衝山清景棧關遠。要路紅塵毀譽斑。豈不憶龜山。

橋直幹

橋直幹は文章博士で冷泉天皇の侍讀となつたが、四六駢儷文に最も長じてゐた。先例として文章博士は他官を兼ねることであつたのを、直幹は之を兼ねることを得なかつたので、民部大輔を兼任したいと、「申文」を自身で作つて村上天皇に上つた。天皇は其の不平不満を敍してあるのを悦ばれなかつた所が、

箏瓢屢空。草滋顏澗之巷。

藜藿深鎖。雨濕原憲之樞。

とある一節に至つて『一世の文士窮して此に至れるか。是朕が過なり』と仰せられて、即ち民部大輔に任ぜられた。後に禁裏炎上で天皇は冷泉院に避幸あらせられたが、他物は問はせ給はないで、直幹の申文は善いかと御懸念あらせられたと云ふ。

當時此のごとく詩文は再び隆盛に赴いたが、浮華輕薄に流れて、人心の墮落したことは、隋の李諤が文帝に上つて文章の輕薄に流れるを論じた文に、

競一韻之奇。爭一字之功。連篇累牘、不出日露之形。積案盈箱、唯是風雲之狀。世俗以此相尙。朝廷據茲擢士。

とあると全く同一轍に陥つたから、漢學の本領は失はれて甚しく實用に遠ざかつて來た。

六 寛弘時代の詩文

一條天皇と中宮定子―四納言及び其他の文人―藤原氏の擅權―具平親王―藤原道長―藤原爲時

一條天皇は村上天皇の御孫圓融天皇の皇子を以て天位に即き給ふたが天皇は天資學を好み文を崇ひ給うた。中宮藤原定子も亦、最も和漢の學を好み給うた爲に、諸道盛に興り、人材一時に輩出した。詩文に秀でた人々には、村上天皇の皇子具平親王(後中書王)、源俊賢藤原齊信、藤原公任、藤原行成があり、世に四納言と稱せられ、又大江匡衡、大江以言、紀齊名、藤原爲時のごとき文士があつた。又御堂關白道長も詩に長じてゐたが、絶えて權貴の相がなかつたのは奇とするに足る。

天皇は「朕の人を得たることは、延喜天曆の世に勝る。」と宣はせられたと云ふ。蓋し當

時世上恬熙で人材が輩出したからである。然しながら藤原氏の擅權の爲に朝綱頗る振はず、藤原氏は亦自己の威福を恣にすることを務めて學事を獎勵することがなく、其の學者を用ゐるのは、上表や敬白文を作らしめるに止まつてゐたから、當時の學者は權臣の爪牙となるのみである。故に毎に不遇を憤つてゐた。

具平親王の御作は本朝麗藻に數多見えてゐる。其の中で世に有名な一二を示す。

題故工部橘郎中詩卷

君詩一帙淚盈巾。 潘謝末流原憲身。

黃卷鎮携疎牖月。 青衿長帶古叢春。

文華留作荆山玉。 風骨消爲蒿里塵。

未會茫茫天道理。 滿朝朱紫彼何人。

未會云々の結句は藤原氏に對する不平の發露である。

世に云ふ御堂關白藤原道長の宇治別業の七言律は世に名高く聞えてゐる。

暮秋於左相府宇治別業卽事一首

別業嘗傳宇治名。 暮雲路僻隔華京。

藤原道長

藤原爲時

藤原爲時は越前守で詩を能くした。實に紫式部の父である。

題玉井山莊

在和泉國云々

玉井佳名被世稱。 松楹半接碧巖稜。

山雲繞屋應寒慢。 湖月臨窓欲代燈。

梅吐寒花朝見雪。 水收幽響夜知冰。

池邊何物相尋到。 雁爲來賓鶴爲朋。

柴門月靜眠霜色。

旅店風寒宿浪聲。

排戶遙看漁艇去。

捲簾斜望雁橋橫。

勝遊此地猶難老。

秋興將移潘令情。

第二章 假字の發達

一 草假字の大成

草假字—女文字—女手—草—いろは歌—假字手本—女子最初の習字本
「なにはづ」の歌—「あさかやま」の歌—三蹟—三筆

上古から行はれてゐた「眞假字」一名「萬葉假字」は漢字の眞書體を用ゐるので、不便である所から漸次に工夫を凝らして、遂に草假字の發明が出来た。漢字を草書體で書くのを更に崩して例へば「以」の字を草體で「𠄎」と書くのを更に崩して「い」と書くがごとき類である。後世は「い」を「い」と左の方を大きく書くが、古くは右の方が大きいのである。此のごとく容易に書くことが出来るので之を「平假字」と云ふことになつて「草假字」の稱は普通には云はぬことゝなつた。草假字はかく容易に書くことが出来る爲に専ら女子が習ふことゝなつたので一名「女文字」と呼び、漢字を「男文字」と呼んだ。男子は一般に漢字で漢文を書くのが例であり、女子は草假字で消息文を書くのが例であつたからである。又「女手」とも云つたのは當時は字のことを「手」と云つた「字かき」を「手かき」と云ふ類である。

草假名の發
明

平假名

女文字

女手

「草假字」を略して「草」とのみも云ひ、又汎く草假字を「かな」とも稱した「な」とは「字」の意味である。

草假字の書體は當初は多種多様で一定してゐない。例へば「は」を「𠄎」「𠄏」とも書き、「に」の字を「𠄎」とも「𠄏」とも書く類で頗る面倒であつた。涅槃經の偈を、同音の假字を用ゐないで和讀の體裁に譯した世に名高い「いろは歌」が出来てから大體書體も一定した所を、空海が能書であり、又此の歌を信徒に教へる便宜の爲に、最も運筆の簡單なるものだけを集めて書いたのが、今日に行はれてゐる「いろは歌」であると云はれてゐる。現今の國定教科書では「ん」の字が副へてあるが、是は昔はないのである。「いろは歌」は傳へて空海之作であると云ふが、異説もある。

「いろは歌」と云ふのは近世の俗稱で古代には「假字手本」と云つた。女子が最初草假字を習ふ手本には

なにはづに、さくやこのはな、ふゆごもり、

いまははるべと、さくやこのはな

と云ふ歌、又は

「いろは歌」と草假名の統一

最初の假名手本

あさかやま、かげさへみゆる、やまのゐの

あさくはひとを、わがおもはなくに

と云ふ歌を用いたのである。然しながら右の歌は皆同音の假字が雜つてゐるが「いろは歌」は固より當時に發音の區別が出来る限りの假字ばかりで詠んであつて、同音の字がなく字體が一つ一つ違つてゐて、誠に便利な假字であるから、忽に天下に普及した。是が我が文學の發達に致した貢獻は實に偉大なものである。

三蹟

此處に今又一つ最大の便宜を得たことは、小野道風、藤原佐理、藤原行成の三蹟が輩出して各々獨特の書風を創めて、書道の最高權威者となつたことは世に聞えたことであるが、其の中でも行成は所謂世尊寺流の一派を起して、最も草假字を得意としたから草假字は益々世に重用せらるゝやうになつた。曩に弘仁時代に能書を以て天下に鳴られた嵯峨天皇、空海及び橘逸成は世に「三筆」と稱せられてゐるが皆主として漢風を尙べられた「唐様書」の名人であつたが、此の「三蹟」は漢風を離れて、新に一機軸を出した和様の大家である。いづれも我が文學上に貢獻したことは莫大であるが、三蹟は特に和歌和文の上に最高の機關を据ゑ附けたものである。彼の「古今和歌集」の假字序を書いた紀貫之も亦和様を以て別に一家を成

三筆

した空前の大家である。三筆も三蹟も其の肉筆のものが現存してゐるのを見て當時の狀況が窺ひ知られるであらう。要するに我が和歌和文の上に切り離すことの出来ないものは實に「草假字の偉大な勢力である。」

二 片假字の統一

片假字の始—經文の傍訓—「傍訓假字」—「悉曇章—五十音圖—吉備大臣」
「ン」の假字—固有國語の音韻研究の要具—漢字古音研究の要具—動詞活用研究の最大標準

片假字は漸く平安朝に入つて整頓した。奈良朝の文獻には僅に琵琶の譜に見えてゐる位のものである。平安朝になつて佛教の弘まるに従ひ僧徒が佛經を讀む手段として、經文の傍に各自が經の文字の發音を忘れない便宜として眞假字を記し、又は其の略字を記して備忘とした。是が片假字の始である。故に「片假字」は「傍訓假字」の意味である。從來「片假字」は漢字の偏傍點畫を省いて漢字の一片を用いたから「片假字」と云ふと説くのは本末の相違がある。故に未だ「タ」は「タ」「ホ」は「ホ」と一定した書體はなかつたのである。然るに梵文學が傳はつてから、彼の悉曇章に倣つて我が邦の聲音を網羅した所謂五十音圖が作られて

片假字の發達
片假字の起原

五十音圖と片假字の統一

後、遂に片假字の字體は大體統一せらるゝやうになつた。世に傳へて、奈良朝に唐國の文物を多く輸入した吉備眞吉備、所謂吉備大臣が五十音圖を作つたと云ふのは、確證のない説である。現行の五十音圖には「ン」の字が副へてあるのは國定教科書の定めで、古くはないものである。五十音圖は我が邦に固有する言語の音韻研究、又漢字の古音研究には、標準とすべき唯一無二の聲音圖である。殊に我が邦の動詞の活用研究には缺くべからざることは何人も知る所であらう。

五十音圖と
音韻研究

第三章 和歌の興隆

和歌衰微—桓武平城嵯峨三天皇の御製—皇族重臣の作歌—日本紀御前
講筈—日本紀竟宴和歌

平安朝の初期、漢詩漢文が行はれて漢學隆盛の世となつてから、固有の和歌は埋木のごとく埋もれ果て、復顧みるものもなく、奈良朝の終までさばかり國粹美を誇つた形跡すら認められぬ程になつた。時代の趣味と風潮とは實に人力を以て争ふことの出来ないものである。唯僅に桓武、平城、嵯峨、三天皇の御製を始め、皇族重臣達の作歌が「日本後紀」「類聚國史」「日本紀略」などに散見してゐるものが稀にあるが、主として短歌で奈良時代のやうな長歌はない。蓋し遊獵肆宴等で、偶然に詠み出でられたものであるから、別に意を用ゐて詠んだものではあるまい。但し奈良には七十年間蘊蓄した純日本精神が沈黙して、復興の時機を待つてゐた。

仁明天皇は嵯峨天皇第二皇子で淳和天皇に繼いで天位に即かせられた。天皇は文學を好み最も音律に精通せられてあつた。其の前の數代に異なることは、天皇は屢々博士を召して「日

本紀」を御前に講ぜしめられ、其の會の竟るや必ず竟宴を行はせられたが、陽成天皇元慶六年の竟宴に諸臣が詠んだ和歌は集めて「日本紀竟宴和歌」と稱して現存してゐる。然れども一代に數度御前講義の行はれたのは仁明天皇の御世に及ぶものはない。かく國史の研究の進むに従つて、漸次に固有の和歌の道も復興の機運に向つて來たのであらう。殊に奈良で上古の遺風を傳へてゐたのは奈良大寺の僧徒であつた。所詮平安遷都の後一般人心は、悉く漢風に化し去つて、固有の風尚を喜ばなくなつたからである。

一 興福寺大法師の長歌

仁明天皇滿四十御賀—興福寺大法師の奉賀—興福寺大法師の長歌内容
—續日本後紀の意見—日本精神の自覺

天皇即位の後十六年嘉祥二年三月天皇の寶算四十の御賀が行はれた。時に奈良興福寺の大法師等が聖壽奉賀の爲に、聖像卅軀を造り、金剛壽命陀羅尼經三十卷を寫し、四萬八千卷を轉讀し、竟つて更に天人芥を拾はず、天女羅を以て石を拂ひ、翻つて御藥を擧げて、俱に來つて祇候し、及び浦島が子が暫く雲漢に昇つて長生を得、吉野の女が、渺かに上天に通うて來りて且つ去る等の像を作つて、之に「長歌」を副へて奉獻した。從來宣命を除く外の文書

仁明天皇四十御賀
興福寺大法師の奉賀

奉賀の長歌
の大意

は一切漢文を以て公式としてゐたのである。然るに、今や大法師等は堂々と、和歌而も長篇の長歌を献上して、賀意を表するに至つたことは刮目して看るべき我が文學上の奇觀であつた。漢文全盛の世に當つて、奈良の大法師等が臆面もなく古風な長歌を献上したのは、如何なる理由であらう。其の長歌の内容を吟味すると、先づ我が日本國家肇造以來の歴史から説き起して、「萬世一系の天皇が現人神アラヒトカミとましく、此の國を知ろし召すことは、他國の王とは異つて尊嚴である。而して佛法を興隆し億兆を撫愛し給へば其の大御代の長久を祝ふ爲に目出たい人形を作つて賀意を表するのであるが、興福寺の佛が大御代を萬代と祈り奉る詞は日本固有の言葉で申し上ぐるのであるから漢文を用ゐず、漢學者の力を假らず、古昔から我が邦を言靈の幸ふ國と言ひ繼ぎ語り傳へて來てある故に神に祈り佛に祈るにも固有の風に従つて古語で申し來つてゐる。その熱誠は神佛も御嘉納あらせられてあるから、今回の賀詞も謹んで古語を陳ねて御前に達する次第である。」と云ふのが内容の大意である。此の長歌は仁明天皇御紀として勅撰になつてゐる「續日本後記」に載せてある上に、撰者が漢文の正史中に特に此の長歌を載せた主意を記して左のごとく述べてゐる。

夫倭歌之體、比興爲先。感動人情、最在茲矣。季世陵遲、斯道已墜。今至僧中、

續日本後紀
中の意見

頗存^ル古語^ヲ可^レ謂^フ、禮失^フ則^レ求^ニ之^ヲ於^ニ野^ニ故^ニ採^リ而^レ載^ス之^ヲ

右の文中に「季世陵遲、斯道已墜」と云つてゐるのは、倭歌の衰頹を歎息したものである。本來漢文の正史中に長歌など載せることは日本紀にはあるが其の他に多く例のないことである。今や一人として公然倭歌を口に上すものもない時に、斷乎として天皇の御賀の節、長歌に詠んで献上した大法師等の勇氣は、偏に我が古語愛重にあることを看破した撰者の大見識であらう。「續日本後紀」の撰者の筆頭は太政大臣藤原良房である。漢文萬能の世界に「禮失則求^ニ之^ヲ於^ニ野^ニ」と云つて、正史に載せるに就ては尙ほ深い理由があると思ふ。日本紀御前講義は、紀傳道の學者が漢史を研究するに對して起つたものと見れば、國粹の自覺を促進したことは、蓋し當然の結果と云はなくてはならぬ。其の國粹の自覺に率先したものは、舊都として顧みられなかつた奈良で、而も全く専門外なる沙門達の間から崛起したことは、寔に奇異の觀に堪へない。然しながら、當時の奈良大衆には、上古以來深く厚く培はれて來た純日本精神が潜在してゐたのであることは、此の長歌の起首に我が日本國家肇造以來の歴史を述べた所が、萬葉時代の人麻呂赤人の長歌と符合するのが證據である。若し是は只古風に倣つたのであると反對するものがあるかも知れぬが、たとひ古風の模倣でも之を信じないものに

日本精神の自覺

いかでか模倣の出来る筈があらうか。此の長歌は此の時代と前後して起つた六歌仙と共に我が固有の和歌復興の根柢となつたことは疑ひないものである。

興福寺大法師等奉^レ賀^ニ天皇寶算滿四十一長歌

日本乃野馬臺能國遠賀美侶伎能宿那毘古那加葦菅遺殖生志津津國固米造介牟與理瀛津波起每^レ年
爾春波有禮度今年之春波每^レ物爾滋榮江天地乃神毛悅比海山毛色聲變志梅柳常與理殊爾敷榮咲萬
比開天鶯毛聲改^レ丑八千種爾奇事波茜刺志天照國乃日宮能聖之御子曾^レ瓠葛天能梯建踐步美天
降利坐志志大八洲日嗣能高御座萬世鎮布五八能春爾有氣利我國之聖乃皇波尊毛御坐加日宮能
聖之御子能天下爾御坐天御世爾相承襲每^レ皇爾現人神止成給御坐世波四方之國隣皇波百
爾爾繼云止毛何豆加等久有牟所以爾神毛順比佛左部^レ敬給布益益爾今我帝波往爾毛不^レ御坐志將
來毛何^レ申牟、○中略^ノ大御世乎萬代祈利佛爾毛申^ノ上流事之詞波此國乃本詞爾遂^レ倚天唐乃
詞遠不^レ假良須書記須博士不^レ履須此國乃云傳布良牟日本乃倭之國波言玉乃當國度曾古語爾流來
禮留神語爾傳來禮留傳來事任萬爾本世乃事尋者歌語爾詠反志天神事爾用來利本乃世爾依^レ遵^レ爾佛
爾毛神爾毛舉^レ陳^レ豆禱里志誠波^レ丁寧度聞許志食豆牟嬰兒乃咳語仁析箸乃本末不知^レ亂絲乃亂天有禮度
九重能御垣之下爾常世雁牽連天狹牡鹿乃膝折反志候^レ聞曾止言須。○下略

此の長歌は上古の歌格と異なる所はあるが、蓋し上古の長歌の最終を飾る文獻として又次期の和歌興隆の前驅といへよう。

二 六歌仙の功績

六歌仙—古今和歌集序の六歌仙評—僧正遍昭—在原業平—小野小町

「古今和歌集」に先だつて、和歌復興に力を致したものは、世に所謂「六歌仙」即ち僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主の六人である。上古の柿本人麻呂と山部赤人とを「歌聖」と呼ぶに對した稱であるが、此の六人を並べ擧げて和歌復興の先達としたのは、紀貫之の古今和歌集の序である。而して六人の各特色と長短とを論じてゐるのが、大體後世の標準となつてゐる。但し若し強ひて其の巧拙を論じたら、六人中傑出のものは遍昭、業平、小町の三人である。喜撰も、百人一首にも出てゐて有名な「我が庵は都のたつみ云々」の一首の外にないとは云へ、和歌衰微の時に當つて、獨り和歌を以て其の懷を述べたものは、亦決して捨つべきものではない。

さて貫之が古今和歌集の序に論じた六人の評は

六歌仙

古今和歌集

評の六歌仙

ちかきよにその名きこえたる人はすなはち僧正遍昭は歌のさまはえたれどもまことすくなし。たとへば繪にかけるをうなをみていたづらに心をうごかすがごとし。

あさみどりいとよりかけて白露を

玉にもぬけるはるの柳か

はちすばのにごりにしまぬ心もて

などかはつゆを玉とあざむく

ありはらのなりひらはその心あまりてことばたらずしほめる花の色なくてにほひのこれるがごとし。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

おほかたは月をもめでしこれこれぞこの

つもれば人のおいとなるもの

ふんやのやすひではことばたくみにてそのさまは身におはず、いはゝあき人のよききぬきたらむがごとし。

吹くからにあきの草木のしごるれば

むべ山風をあらしといふらむ

うぢ山の僧喜撰はことばかすかにして、はじめをはりたしかならずいはゞ秋の月をみるに曉の雲にあへるがごとし。

わが庵はみやこのたつみしかぞすむ

よをうぢ山と人はいふなり

よめる歌おほくきこえねば、かれこれをかよはしてよく知らず。

小野小町はいにしへの衣通姫の流なり、あはれなるやうにてつよからずいはゞよきをうなのなやめる所あるに似たり。つよからぬはをうなのうたなればなるべし。

おもひつゝぬればや人のみえつらむ

ゆめとしりせばさめざらましを

いろみえでうつろふものはよの中の

ひとの心の花にぞありける

大伴の黒主はそのさまいやしいはゞたきとあへる山人の花のかけにやすめるがごとし。

おもひいでてこひしき時ははつかりの

なきてわたると人はしらずや

かゞみ山いざたちよりてみてゆかむ

年へぬる身はおいやしぬると

このほかの人々その名きこゆる野べにおふるかづらのはひひろごり、林にしけき木の葉のごとくに多かれど歌とのみ思ひて、そのさま知らぬなるべし。

僧正遍昭は桓武天皇の皇子、良峰安世の子、俗名宗貞と云ふ。仁明天皇の寵遇を受けて、藏人頭左近衛少将であつたが、嘉祥三年天皇の崩御に遭ひ、年三十五で出家し、比叡山に登つた、後に山科の花山に元慶寺を創建して、座主となつたので、世に「花山僧正」と呼んだ。仁明天皇御諒闇の果ての日に、

皆人は、花の衣に、なりぬなり

苔の袂よ、乾きだにせよ

垂乳根はかゝれとてしもぬは玉の

わが黒髪をなですやありけむ

のごときは親を慕ふの情、古今に挺んでゐる。彼の

天津風雲のかよひぢ吹きとぢよ

をとめのすがたしばしとぢめむ

の歌はまだ在俗の時の歌で、古今集には五節の舞妓を見てよめる良峰宗貞とあるのを、百人一首に遍昭と云ふ名のあるのと對照して怪しむものもあるのは、此の事情を詳にせぬ爲である。畢竟遍昭は在俗の時、藏人頭と左近衛少將を兼ねて、文武兼備の才人であつたが、出家の後は只管風流を主としたから、其の歌に飄逸な格調のあるのは、固より其の本領ではない。

名にめでてをれるばかりぞ女郎花

われおちにきと人にかたるな

などは古今集に「題しらず」とあるから即興であらうが、擬人法を用ゐて奇警な歌であるがよそに見てかへらむ人に藤の花

はひまつはれよ、枝はをるとも

と同巧異曲の作である。遍昭は宇多天皇の寛平二年七十五歳で入寂した。

在原業平は平城天皇の皇子阿保親王アボウの第五子、母は嵯峨天皇の皇女伊都内親王イトで全く皇孫

在原業平

である。異母兄行平と共に在原姓を賜つて、臣籍に下つたので、在原業平と云つた。陽成天皇の元慶四年に五十六歳で歿したから、遍昭よりも二十歳程の後輩である。父母共に皇族である。而して文徳天皇の長皇子惟喬親王は、御母は紀名虎の女で藤原氏の出でない上に、賢明の聞き高く、朝野望を屬してあつたので、業平は此の皇子を戴いて、外戚の權を抑へようと企畫してゐた。然るに異母の御弟惟仁親王は、藤原良房の女の生む所なるを以て、俄に惟仁親王を帝位に即け奉り、惟喬親王に代へた。此に於て親王は剃髮して比叡山の麓なる小野に退かれた。業平は文武兼備而も勇力人に勝れてゐたから、藏人頭右近衛權中將まで昇つてゐたが、此の時から斷然望みを官途に絶つて、悠遊自適、風流を旨として世事に拘はらず身を和歌に托して、藤原氏の忌諱に觸れないことを努めた。されば世に名高い「東下り」のごときも、此の間に起つた逸話である。然るを世に「業平は生涯不遇であつた」とのみ看做すは當つてゐない。此のごとく文武に優れてゐたから、其の和歌に表はれた所も自から豪放なものもあれば、情緒纏綿たるものもあつて、一樣に論斷し難い。貫之が「其の心あまりて言葉足らず」と論じたのは蓋し其の豪放な率直な所の半面を評したものである。彼の

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして
などは全く心あまりて言葉足らぬ例にならうが、

世の中にたえて櫻のさかざらば

人の心はのとげからまし

忘れてはゆめかとぞおもふおもひきや

雲ふみわけて、君をみむとは

世の中にさらぬわかれのなくもがな

ちよもといのる人の子のため

などのごときは、世に希なる秀歌である。又、

からごろもきつゝなれにしつゝしあれば

はるばるきぬるたびをしぞおもふ

名にしおはゞいざことゝはむみやこどり

わがおもふ人は、ありやなしやと

などの情緒の豊富なる、又

ちはやぶるかみよもきかずたつたがは

からくれなゐに、みづくゝるとは

ぬきみだる人こそあるらし、白玉の

まなくもちるか、袖のせはきに

の譬喩の巧妙なるは業平でなくては、企て及ぶものもあるまい。

小野小町は出羽の郡司の女で、仁明天皇の御世に采女として仕へたものであると傳へてあるが、歿年は詳でない。但し小町は絶世の美人であつたと云ふ所から、種々の方面に傳説化せられてゐるので、一概に其の傳記を述べる事が困難である。和歌の風は貫之の評では「あはれなるやうにてつよからず云々」と云つてゐるのは

花のいろはうつりにけりないたづらに

わが身世にふるながめせしまに

わびぬれば身をうき草の根をたえて

さそふ水あらば、いなむとぞおもふ

のごときは全く失意落魄の時の作であるから強くないのは當然であらう。然しながら才色兼

備を以て宮中で時めいた歌が、見當らないやうであるのは何故か。古今集に擧げてある歌に「夢」の歌が多く、又人心の變り易いことを歎いた歌などである所に就いて察すると、傳説には、一生寡獨生活を通したと云ふ説があるし、又『玉造小町子壯衰書』に據ると小町は「倡家の子で、壯時は嬌慢最も甚しく、衰へたる日は愁歎猶ほ深し、齡二八に及ばざるに名は三千の列を兼ね、華悵の裏に寵せられたり、十七歳にして母を喪ひ、十九歳にして父に別れ二十一歳にして兄を亡ひ、二十三歳にして弟に死なれて後貧困の極に達して、後に尼となり、放浪生活を以て一生を畢る」と見えてゐる。此等から因つて按へば、全盛時代は所謂嬌慢で過し、別に歌に托して懷抱を述べる暇もなかつたので、得意な花々しい歌がないのであらう。然るに齡と共に容色も衰へ、別に顧みるものもない所から夜も物思ひで安眠も叶はない状態となつたので、始めて和歌に托して感懷を述べた故に古今集には夢の歌が多いのではなからうか。「題知らず」として

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ

人目をもるとみるがわびしさ

かぎりなきおもひのまゝに夜もこむ

ゆめぢをさへに人はとかめじ

ゆめぢにはあしもやすめずかよへども

うつゝにひとめみしことはあらず

おもひつゝぬればや人のみえつらむ

ゆめと知りせばさめざらましを

うたゝねにこひしき人をみてしより

ゆめてふものはたのみそめてき

いとせめてこひしき時はぬばたまの

夜のころもをかへしてぞぬる

此のごとく夢の歌、もしくは戀しさに衣を反して寝るとまで深く思ひ入つた寡獨生活の時に當つて、文屋康秀が三河掾になつて下る際、同行を勧めた返歌に

わびぬれば身を浮草の根をたえて

さそふ水あらばいなむとぞ思ふ

と詠んだと古今集に擧げてあるのを見ると、さこそと首肯せらるゝのである。又ある時には

折角頼み切つた人に捨てられたのでもあるか、

色みえでうつろふものは世の中の

人のこゝろの花にぞありける

と云ふ歌が古今集に載つてゐるなどを総合すると、小町は世に云ふごとく、其の才色を恃んで、晩年は頗る零落したと云ふのは、或は事實かも知れぬ。

花の色はうつりにけりないたづらに

わが身世にふるながめせしまに

は事實であらう。

みるめなきわが身をうらと知らねばや

かれなであまのあしたゆくくる

は、熱情をこめて通つて來た男があつたが、其の意には従はなかつたと云ふのか。

第四章 和歌と漢詩

一 和漢漢才

菅家遺誠―和魂漢才―「ヤマトダマシヒ」―「ヤマトゴコロ」―日本紀竟
宴和歌―「日本紀私記」―「やまとごころある人」―「やまとだましひか
しこき人」―「ヤマトウタ」―「カラウタ」―「古今和歌集」勅撰の原因

世に傳へて菅原道眞の作と稱する「菅家遺誠」と云ふものが一卷ある。其の中に

凡 國學所^ソ要^{ハトスル}、雖^{ヘドモ}無^シ論^シ、涉^リ古^ノ今^ニ、究^ム天^ノ人^ヲ、其^レ自^レ非^ニ和^魂漢^才、不^レ能^ハ關^ニ其^ノ闕^ヲ、
奥^ヲ矣。

と見えてゐる。此の遺誠は、後世に出來たもので、道眞の作ではないと云ふ説もあるが、其の中にある「和魂」と云ふ言葉の意味が、道眞在世時代の用法に叶つてゐると云ふので、學者が典據とするものであるから、之に據つて「和魂」と云ふ言葉の起つた時代の思想界の現象を説いて、古今和歌集勅撰の由來を明かにしたいと思ふ。

「ヤマトダマシヒ」又「ヤマトゴコロ」と云ふ言葉は、漢文學隆盛の反動で起つた言葉であ

菅家遺誠

和魂漢才

ヤマトダマシヒ

ヤマトゴ
ロ

日本紀私記

日本紀
和歌

たがとの
ほりてみ
れば

る。嵯峨天皇は、特に漢文學を盛にして、社會一切の改革を斷行あらせられた。かくて、六代を経て清和天皇、陽成天皇の御世に至ると、漢文學が其の頂點に達した反動で、いつしか國粹自覺の機運を促して來た。奈良朝の頃から、博士を召して日本書紀を天皇の御前に於て講義せしめらるゝことが始まつて、其の講義を記した「日本紀私記」なども出來たが、漢文學の隆盛に壓倒せられて一旦中止の姿であつた。然るに陽成天皇の御世には、屢々此の御會が行はれ、而も其の元慶六年の御會には、講了の時に開かるゝ竟宴の歌集さへ出來て、之を『日本紀竟宴和歌』と名づけて、今に傳はつてゐる程盛大であつた。新古今集に、仁徳天皇の御製として收められてゐる「高き屋にのぼりてみれば云々」の御製は、實は此の竟宴和歌に、得_二大鷦鷯天皇_一の題で、左大臣藤原時平が詠んだ

たかどのに、のぼりてみれば、あめのした

よもにけぶりて、いまだとみぬる

を誤り傳へたものであると云ふのが、今は定説になつてゐるのに徴しても、當時御前講義の盛大であつたことが察せらるゝのである。

此のごとく我が國家の根柢を研究する學問が進むに従つて、自から我が邦現時の狀勢を考

へて、之に善所する心が油然と起つて來た。然るに、嵯峨天皇以來、清和天皇の頃まで約六十年ばかりの間は、漢文學ばかりに没頭して、少しも我が邦現在の事情などは考へず、段々世事に疎くなつて、實用にならないものが出來て仕舞つた。かくて光孝、宇多兩天皇を経て醍醐天皇の御世に當つて、我が古典に通じて、審に現在の社界相の解つたものを「ヤマトゴコロある人」又「ヤマトダマシヒかしこき人」と稱した。「大鏡」卷二時平傳に、左大臣は「やまとだをしひいみじくおはしける」と見え、又「愚管抄」卷三一條天皇の條に、内大臣伊周を「からざえはよくて、やまとこころばへわろかりける人」などと見えてゐるのが、其の例である。後拾遺集や今昔物語などに見えてゐる「ヤマトゴコロ」は、全く「常識に富んでゐる心」と云ふ程に用ゐられてゐる。後世の「愛國心」若しくは「日本人特有の心」と云ふやうな意味に用ゐられてゐる習慣から考へたら、殆ど意味が解らなくなる。本居宣長の「師木島の大和心云々」の歌のごときは、遙に後世に轉用した意味に據つて詠んだ歌であるから古義には合致してゐない。

然らば「漢才^{カウザイ}」とは何かと云ふと「漢文學で修養した才智」と云ふ意味である。又略して「才^チ」とのみも云ふことは、近古まで用ゐられてゐた。「菅家遺誠」の文意は要するに、「當

漢才

時の我が邦の學問は、現時の事情に通じて、而も漢學で修養した才智がなくてはたとへ天地間の事物を研究し盡しても、役に立たぬ」と云ふ天晴の名言である。

此のごとく寢我が日本精神の自覺が喚起せられて、我が邦と外國と云ふ觀念が判然として來た結果、我が固有の歌を「和歌」と稱し、漢土の詩を「漢詩」と呼んで、之を「ヤマトウタ」「カラウタ」と區別するやうになつた。此に於て、天下翕然として、我が邦固有の何物でも、之を明かにする風潮が勃發したから、從來韻文と云へば漢詩のみと心得てゐたものが我が邦に固有の歌があると心附いて、彼の勅撰の『凌雲集』や『文華秀麗集』に對して「古今和歌集」の勅撰が出現する時代となつたのである。外國文明を吸収し盡すと之を資料として更に新しい文明を建設するのが我が祖先の遺風である。

一 古今和歌集勅撰

古今和歌集勅撰—國文の序奏覽—後世の模範—部立と歌數—撰者—貫之の歌風—貫之の修辭法—紀友則—凡河内躬恒—壬生忠岑—よみ人知らずの歌—「君が代」の歌—雜體—總括

醍醐天皇延喜五年皇紀一五六五年四月十八日、天皇は勅して、御書所預紀貫之以下四人に

和歌
ヤマトウタ
漢詩
カラウタ

古今和歌集

勅撰

國文の序奏覽

和歌國文章
假字の模範

古今和歌集
の部立及び
歌數

命じて「古今和歌集」を撰進せしめられた。是は實に和歌勅撰集の始である。此の時、貫之は一部二十卷を淨書し、又卷頭に國文を以て書いた序文を掲げて奏覽に供し奉つた。嵯峨天皇以來我が文學界の風潮は、漢詩漢文のみを以て文學とし、和歌と國文とは個人が私に翫ぶもので、之を世間に公表すべきものではないと考へてゐたのである。然るに、光孝天皇以來和歌は復興しつゝあつたが、此に至つて一朝にして勅撰集が出来、又國文の序が其の卷頭に掲げられて奏覽に供せらるゝこととなつた。此は實に青天の霹靂で、いかばかり天下の耳目を聳動せしめたことであつたらう。「古今和歌集」の勅撰は、實に我が和歌、國文、草假字の模範を萬世に公示せられたものと云ふべきである。されば後の勅撰集は皆此の體裁に倣つて遂に二十一代集の多數に上つてゐるのも偶然ではない。

「古今和歌集」は一部二十卷。其の部門を別つて春、夏、秋、冬、賀、離別、羈旅、物名、哀傷、雜歌、大歌所御歌の十一部として、雜體の内容は更に長歌、旋頭歌、誹諧歌と區別してある。之を「部立」と云ふ。其の收めてある歌の數は、大凡一千一百首、中にも短歌が大半を占めて「長歌」と「旋頭歌」とは幾許もない。畢竟當時の和歌は短歌を中心とする傾向であつたからである。

『古今和歌集』撰進の主任は、紀貫之で、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の三人が同じく撰進した。いづれも當代に優れた和歌の名人である中にも、貫之は和歌に秀でてゐるのみならず、國文を能くし、又極めて書道の達人であつたから、所謂三拍子揃つた人で當時の代表的歌人の最高權威者と尊敬せられたのである。而も貫之は能く歌道に精通して、堂々たる歌學者であつたから、今や序文を作るに當つては、其の蘊蓄を傾けて、和歌の起原、沿革、功德研究法等を敘し、又歌體を論じ、歌仙を評するときには、實に空前の歌學史と云ふとも過言ではあるまい。過去百年間を回顧しても、漢文學者で未だ貫之のごとく漢文學史を草したものは無いのに比較すれば、當代に於ける貫之の威信の厚いことは、蓋し天下に比儔がなかつたであらう。貫之は此の時年齒僅に二十四歳であつた。此の後二年を経て延喜七年に二十六歳で『大井河行幸和歌序』を作り、又承平五年に五十三歳で『土佐日記』を公にしたことを思へば、貫之は亦實に不世出の文章家でもあつたと云ふことが出来るのである。されば『古今和歌集』の假字序は、文體は異なれど、奈良朝に傑出した太安萬侶の『古事記』の序と壁と稱せられてゐる。流布本の『古今和歌集』の卷尾に「眞名序」と稱して漢文の序が副であるのは紀淑望が後に貫之の序を漢譯したもので之を奏覽に供したのではない。

貫之が寔に當時の歌界を代表する最高權威者であり、又俱に撰進に與つた三人も同じく當代の代表的歌人であるからは、大體此の四人の歌風は研究する必要があるであらう。

貫之が撰進の時の官は御書所預であつたから、固より歌を専門とする歌人ではない。然るに斯のごとき前代未聞の勅撰集清撰の主任となつたからであらうか、古今集の中に收められてゐる貫之の作歌は九十八首の多きに上つてゐる。然して、延喜の御世は後の天曆の御世と相並んで我が邦の最も太平の時代と稱せられてゐるが、此の時は、社會一切の事物が極めて進歩發達して、優美艷麗を競ふ世の中であるから、人々の喜ぶ歌は、頗る流麗なる聲調を尙ぶと共に、極めて精緻なる技巧を盡すを以て上乘とした。貫之は能く此の呼吸を呑み込んで、巧に自己の特色を發揮したので、遂に當時第一の權威者と仰がるゝに至つたのである。聲調の流麗で技巧の精緻なる歌の二三を集の中から擧げると、

見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける (素性法師)

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ (紀友則)

櫻花散りぬる風の名残には水なき空に波ぞたちける (紀貫之)

貫之の修辭法

貫之の作歌で古今和歌集中に收められてゐるものに就いて其の特色を吟味すると、大體次のごとくである。

- 第一 譬 喩 法
- 第二 對 照 法
- 第三 緣 語 應 用

譬喩法は貫之の慣用法で、最も多く集中に見えてゐる。例へば花を雪に、雪を花に譬へ、或は花を浪に譬へるやうな意匠である。

櫻花咲きにけらしも足曳の山のかひより見ゆる白雲

冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける

櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける

對照法は「黒」と「白」、「逢ふ」と「別る」など云ふがごとき反對の語を錯綜して興を深くする法である。

梅の花匂ふ春邊は暗部山關に越ゆれどしるくぞありける

かつ越えて別れも行くかあふ坂は人だのめなる名にこそありけれ

春の夜の暗はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるゝ

緣語の應用は緣故ある言葉を織り込んで優雅にする法である。

青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける

川風の涼しくもあるか打よする波とともにや秋はたつらむ

宿りせし人の形見か藤袴わすれがたきかにはほひつゝ

紀友則は大内記とあるから、中務省の官人で、身分は低い人である。貫之の歌風に似たものが多い。

三吉野の山邊に咲ける櫻花雪かとのみぞあやまたれける

雪降れば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきてをらまし

凡河内躬恒は前甲斐少目とあるから、貫之よりも官位の遙に低い人である。緣語を用ゐて

詠んだ歌が多い。

憂きことを思ひつらねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋の夜な夜な

秋萩のふる枝にさける花見ればもとの心は忘れざりける

壬生忠岑は左衛門府生とあるから、武人で、官位の低い人である。率直で一氣呵成の中に

紀友則

凡河内躬恒

壬生忠岑

自から優雅な詞づかひがある。忠岑は隨身出身であるが、隨身には概して藝能の達人が多くあつた。

久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ

三吉野の山の白雪ふみ分けて入りにし人のおとづれもせぬ

「古今和歌集」の中に「題知らず」「よみ人しらず」と云ふ歌が割合に多い。是は萬葉集に漏れた爲に、後世に歌だけ傳はつてゐても、其の詠んだ時の事情も、作者も分明でないものが其の一部である。又當代の人の作である事實が分つてゐて、詠んだ歌が優れてゐる時は、無位無官の人が詠んだものは、勅撰中に其の名を顯はすことが出来ぬと云ふ慣例になつてゐたので、此も「よみ人しらず」となつてゐるのである。有官有位の人の子、又遊女などもあつたのは此の例外である。以上二種類の區別は一々理由は掲げてない。折角の秀歌でも作者が無位無官の爲に其の名が傳はらないのは實に惜しむべきことである。今や我が邦の國歌として海外諸國までも知られてゐる「君が代」の歌は卷七の「賀」の部の卷頭に「題しらず」「よみ人知らず」として載せてあるのは、右の兩種のいづれにか屬するものであるが、遺憾なことではないか。

「題知らず」
「よみ人知らず」の歌

「君が代」の歌

雜體

「雜體」の中に、長歌、旋頭歌があるのは、其の歌體が普通の短歌と異なる爲である。又「俳諧歌」と云ふのがあるのは「をかしき狂歌めきたる歌」である。唐の杜甫の詩に「俳諧體」と云ふのがあるが、必ずしも我が邦の俳諧體とは合はぬやうである。

梅の花見にこそ來たれ鶯の人く人くといとひしもをる

と云ふのが卷頭にあるが全部五十餘首載せてある後世の俳諧も此に其の源を發してゐる。又「大歌所御歌」がある。「大歌所」は「神樂歌」、「催馬樂」、「風俗歌」、「東歌」などのごとき朝廷の儀式に用ゐらるゝ歌を教習する所で、内裏の圖書寮の東にあつた。「大歌」とは公儀に用ゐらるゝ歌の意で、世間で歌ふものを「小歌」と云ふに對した稱である。卷頭には「おほなほびのうた」次には「古きやまとまひのうた」と云ふやうに擧げてある。此等の歌はいづれも音樂に合せて謠ふ歌である。

要するに「古今和歌集」の勅撰は始めて、和歌國文章假字の威徳を天下に公表して萬世の龜鑑を遺す大理想の上に置かれたのである。従つて其の撰者には、古今獨歩の才人紀貫之が其の主任となつて敏腕を揮ひ、又飽くまでも自信を以て事に當つたのである。故に秀歌は秀逸なる上にも秀逸なるものを厳選し、又自身の作歌をば、より多く収録して何等憚る所もな

古今第一の
歌集

いのは、蓋し天下に許された人々であつたからである。其の撰修の體裁も完全であり、又収録せられたる撰歌も皆金聲玉振のものばかりである。「古今和歌集」は實に古今第一の勅撰集と謂ふべきものであると信ずる。

三 後撰和歌集勅撰

和歌所—梨壺の五人—後撰集—體裁内容の不備—宸筆奉行文—廣幡女御の發議

第六十二代村上天皇は最も和歌を好ませ給ひ、御即位の五年即ち天曆五年に内裏の五舎の一なる昭陽舎所謂梨壺に和歌所を置かれた。和歌所は和歌の事ある時置かるゝもので、曩に醍醐天皇の延喜五年に内御書所を置かれたのが始である。天皇は和歌所に、藏人左近衛少將藤原伊尹を別當とし、讃岐大掾大中臣能宣、河内掾清原元輔、學生源順、近江少掾紀時文、御書所預坂上望城を寄人として「萬葉集」の訓釋に従事せしめらるゝと共に、「古今和歌集」に漏れたる歌と、其の後の作歌とを撰進せしめられた。此の五人を後に「梨壺の五人」と稱した。

和歌所

梨壺の五人

後撰集

古今集との比較

和歌所の五人が撰進した「後撰和歌集」は、略して「後撰集」と呼び慣れてゐる。「後撰」と云ふ名は「古今集」に次ぐ勅撰集の意であるが、其の體裁も内容も極めて不完全で昔から種々の非難がある。第一には假字の序文もなく、奏覽の明徴もない。其の選歌の拙いのは、古今集の遺漏を採つた爲であるとも、選者が各意見があつて一致せぬ爲もあつたらうとも云はれてゐる。畢竟古今集は中興の熱誠が溢れてゐたから、其の成績も亦古今に冠絶してゐた。然るに今や舊套を墨守して、更に新進の銳氣に乏しい憾がある。撰者の作歌は一つも載つてゐない。殊に撰進の宣旨を源順が漢文に作つたのを宸筆で下されたのを誇としてゐるがごときも「古今集」の撰進に比して遜色がある。其の原因を糾せば村上天皇の女御廣幡の御息所の發議に依るものであると十訓抄に見えてゐる。

四 拾遺和歌集

花山天皇御撰—藤原公任の拾遺抄—人口膾炙の歌

「拾遺和歌集」は傳へて花山天皇の御撰と云ふ。「古今集」「後撰集」に漏れたる歌を拾ひ集めたので「拾遺集」と名づくると云ふ。後に藤原公任が其の中から五百八十六首を抄出して

花山天皇御撰
拾遺抄

三代集
世に名高き
歌

『拾遺抄』と號して二卷として世に行はれたと云ふ説もある。さて此の集の出來たのは長保寛和以前であると傳へてある。古今、後撰の兩集に此の書を加へて世に『三代集』と稱してあるから此に擧げて置くが、格別に價值のあるものではない。但し世に名高い菅原道真が元服の時母が詠んだ

久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな

又源順が藤原誠信が元服の夜に詠んだ

老いぬれば同じことこそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ

又鶯宿梅の故事の

勅なればいともかこし鶯の宿はと問はゞいかゞ答へむ

の歌などの擧げてあるのは大に見るべきものであらう。

五 歌 合

歌合—歌合の沿革—天徳歌合—歌合の弊

「歌合」は歌を左右に分ち、兩々相對せしめて、之を一番となし其の優劣を判じて勝負を定

歌合

歌合の沿革

めるものである。此の事は和歌が復興してから漸次に行はれて來た。最初は五番六番程であつたが後には更に多いのも起つた。

「歌合」の最も古いのは「在民部卿家歌合」で、在原行平の家の歌合で光孝天皇の仁和の頃は「仁和中將御息所歌合」又「陽成院歌合」などがあつた。宇多天皇の御世には「后宮歌合」があり、醍醐天皇の御時には「有心無心歌合」及び「亭子院歌合」あつて、宮中の歌合が續々行はれてゐたが、一旦中絶した所、村上天皇の天徳四年三月に、清涼殿で行はれたのが最も盛大であつたので「歌合」と云ふと「天徳歌合」と云ふやうになつた。是から公私共に益盛に行はれて、良辰佳節毎には大抵歌合があつた。歌合の流行から根合、菊合、扇合、艶書合などの事も愈行はれたので、歌合も亦其の物に託して歌を闘はしめることも起つて、其の類が更に多端になつた。

天徳歌合

今「歌合」の代表として「天徳歌合」を云へば、天徳四年の「内裏歌合」は三月三十日で清涼殿と後涼殿との間の廂ヒヤシで行はれたのである。天徳の歌合は極めて盛大に行はれ、其の法式も定まり、又一番毎の判詞も詳細に記録せられたので、此の歌合が長く後世の典型と仰がるゝやうになつた。

歌合には初から題を定めて詠むのであるが、所謂題詠で詠むと云ふよりは、作ると云ふ方法であるから、自から技巧のみに傾いて來たので其の餘弊は遂に生氣のない形式的のものと墮落して仕舞ふやうになつたのは蓋し自然の數であらう。故に當時の歌人で、一朝歌合に負けた爲に、病を得て世を去るやうなものもあるやうになつたと云ふ傳説もある。

第五章 神樂と催馬樂

一 總 說

神樂傳記

起原

神樂と催馬樂とは、共に平安朝以來内侍所の神前に於て奏せらるゝのから併せて云ふが、實は元來民間の俗樂で、始めから朝廷の式樂ではないのである。其の起原は太古神代の天岩屋戸の故事に因るもので、其の時神樂を奏して群神が大聲を發して笑つたのに本づいてゐる。然しながら太古に起つたとは云へ神を祭る毎に必ず神樂を奏したのではない。内侍所の御神樂と云ふものは平安朝より以來のことである。而して其の舞ふことは歌によつて舞ふのであるから神樂と云ふ。「カグラ」とは「歌カマヒ」である。此の「歌カマヒ」と云ふことは古くは「歌垣」と云つた。多數の男女が入り雜つて歌を謠ひ合ふのである。故に「カマ」とは大勢の騒ぐ聲を云ふ。但し其の民間で謠つた歌は、皆古風の歌が多いから、其の中から最も優れたものを選んで、朝廷の式樂と定められたのであるが、其の主旨は諸國の風俗を示される爲である。因つて之を總べて「神樂歌」と云ふ。然るに神樂、催馬樂と二種に別けて

云ひ來つたことは、神樂歌と催馬樂歌と稱して傳へ來つたものとあるに由るのであるが、いづれも神樂の時に謠はるゝ歌なるが故である。

さて「カグラ」と云ふ名義は「カガグラ」と云ふことで、カガは大聲を發して騒ぐ聲「クラ」とは場處と云ふ意である。場處とは里人が謠ひ遊ぶ場とする處である。京都の神樂が岡と云ふのも元は此の意に取つたものであらう。此のごとく多人數聚まつて而も男女が打群れて、謠ひ遊ぶことは、無上の楽しみである故に、其の樂しみを神に奉る義で神樂と云ふ。而も都會人が此等の風俗歌を聞く時は、聞き慣れぬことが多いので面白く感じたことであらう。後には貴人の宴會の席上でも、其の折に適當なものは、謠つて興を添へることも多くなつた。

一 神樂歌

神樂歌—神遊の歌—天岩屋戸の故事—神樂の始—古語拾遺の神樂の詞
—庭燎—採物歌—大前張—小前張—星—雜歌—内侍所の御神樂—樂器
—神樂次第—公事根源の本文—證歌

神樂歌は内侍所の御神樂に歌ふ歌である。又「神遊の歌」とも云ふ。神樂は太古神代に天

神樂歌の沿革

神樂の語原

岩屋戸の前で天鈿女命が神憑して舞踏したことに始まると傳へてあるが、上古までは、其の所作も歌も別に定まつたものもなかつたのである。然るに醍醐天皇の延喜年間に、上古から諸國で語り傳へた歌で最も神事に關係の深い歌や、又は極めて興味ある民謠の類を選抜して之を樂器に合せて歌はしむることゝ定められてから、今日に及んだのである。古語拾遺に、天岩屋戸の前で奏した神樂歌と云つて載せてあるものは、信すべきものではない。

神樂歌は約五十首もあるが、大體「庭燎」「採物歌」「大前張」「小前張」「星」等の六部に分けてある。奈良朝では、豐樂院の中なる清著堂で臨時神宴の時には御神樂があつたが「内侍所の御神樂」と云つて、内侍所の庭上で行はせらるゝのは、一條天皇の御世から隔年に行はるゝことが始まつた。毎年十二月に行はるゝことゝなつたのは、白河天皇の御世からである。其の樂器は我が邦固有の笛と倭琴とであつたのを、後に外國傳來の篳篥を加へられたが、其の拍子は笏拍子である。

神樂を奏する次第は、天皇の行幸がある。内侍所の前に本末の座が二行に設けられて樂人即ち神樂を奏する人々が其の席に着く。本方は神座に向つて左、末方は神座に向つて右である。神樂歌には、本の歌末の歌と二首あるのを、左右の樂人が歌ふからの名である。人長は

神樂歌の部別

樂器

神樂次第

武官から選ばれて一切の指揮を掌るものである。庭燎の歌を最初にしてあるのは、神樂の始に庭燎を焚き此の時に歌ふからである。次に採物歌は、人長が執る物に因つた歌で此の名がある。即ち榊、幣、杖、弓、劍、梓の類の歌である。歌は主として短歌で歌ふ時に折り返す句もある。此が済むと次に「大前張」「小前張」などの類を歌ふ。此等は民謠を選抜したもので面白く人事を詠んだもので歌は長短不定である。是は森嚴な採物歌の後に餘興に歌はるるもので、畢竟神意を慰め奉る意に因るものである。「前張」は「さいばりに衣はすらむ云々」と云ふ歌があるのを取つて名としたもので「前張」は當字である。之を大小に區別してあるのは舊くからあつたのを「大」とし、新に加へられたのを「小」として別けたものである。又「小前張」の終に「早歌」と云ふのがあるのは前の歌は詞に節をつけて歌ふのに、此の以下は詞を早めて歌ふからの名である。「星」以下は雜歌であるが、星の歌は夜の明け方のさまを歌つたものである。

『公事根源』に、内侍所御神樂主上行幸あり、先づ典侍掌侍まゐる典侍はわらは二人に木丁をさゝす、内侍所に行幸なりぬれば、御拜、刀自祝詞など申す。此間所作人南殿の西の方にて物の音あはす。内侍所の前に主殿寮幔を引て官人庭燎をたく、本末の座二行に

樂神歌の例

設けたり。近衛の官人後にあり、人長末に横座なり、次第に座につく、人長進みて膝突などしかせ鳴高しといましむ。次第に召す。笛筆築本末の歌和琴次第に膝突きてつかうまつる。人長仰するに従ひて笛和琴拍子本に侍ふ。末の拍子筆築は末に着く。和琴は位によらず。本の座の上に着す。鈴鹿を給ふ故とかや、よりあひ庭燎本末はて、人長かへり入る、採物はて、韓神の拍子あけて後、人長立ちて奏づる。其後勸盃あり。韓神果て、又進みて才のをのこ召す。各座の末より進みて跪きてかへりつゝ、薦枕より千歳早歌など果てぬれば星仰せらる。笛筆築音取りて、星三首果て、朝倉、其駒を歌ふ常のごとし。祿を賜ふ。

庭燎

本末一首

み山には霰降るらし 外山なるまさきのかづら色づきにけり 色づきにけり

採物歌

本

榊葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまとのせりける

八十氏人ぞまとゐせりける

末

神垣の三室の山の榊葉は神の御前に茂りあひにけり 茂りあひにけり

大前張

前張

本

さいばりにころもはそめむ雨ふれど 雨ふれど

末

雨ふれどうつろひがたし ふかくそめてば 深くそめてば

小前張

湊田

本

みなと田にくとひやつをりや ところちなや ところちなや

やつながらとろちなや

八十氏人ぞまとゐせりける

末

神垣の三室の山の榊葉は神の御前に茂りあひにけり 茂りあひにけり

大前張

前張

本

さいばりにころもはそめむ雨ふれど 雨ふれど

末

雨ふれどうつろひがたし ふかくそめてば 深くそめてば

小前張

湊田

本

みなと田にくとひやつをりや ところちなや ところちなや

やつながらとろちなや

諸國の民謡—樂器—律呂—催馬樂の名義—催馬樂譜—源家流—藤家流
證歌—上流人譚席の餘興

二 催馬樂

末

やつながらもものはずをりや ところちなや やつながらとろちなや
ところちなや

催馬樂の起

樂器

律呂

催馬樂の名

催馬樂は神樂歌と同じく平安朝から朝廷の式樂となつたが、元は諸國の民謡であるから、其の中には往々極端な人事を詠んだものもある。今に傳はる歌は、すべて六十一首である。其の樂器は固有の笛、倭琴、笏拍子の外に、唐土傳來の笙、篳篥、箏、琵琶も雜へて用ゐらるゝから、其の譜も亦龍吟譜の中に一樣に記してある。故に律と呂とに別けて最初の「我駒」から「隱名」までを律とし「安名尊」から最終の「我家」までを呂としてある。其の「催馬樂」と云ふ名義は最初の「我駒」の歌の「いでわがこま、早くゆきこせ云々」と云ふ歌の首の句に取つた名であると云ふ説が最も穩當であらう。此の歌は萬葉集十二に

「いで我が駒早くゆきこせ、まつち山、まつらむいもをゆきてはや見む」とある歌を謠ひ傳へたもので、催馬樂では句が所々繰り返しになつてゐる。

催馬樂譜には源家流と藤家流と二流があつて、其の相傳を重んじた。源家流は宇多天皇の皇子敦實親王に起り、藤家流は源雅信に始まると傳へてある。

催馬樂の二流

律

我駒 二段

いでわが駒、はやくゆきこせ

まつち山、あはれ、まつち山はれ、まつち山、まつらん人を

ゆきてはや、あはれゆきてはや見む

高砂 七段

一段 高砂のさいさごの高砂の

二段 尾の上に立てる白玉椿玉柳

三段 それもがと、さんましもがと、ましもがと

四段 ねりをさみをのみぞかけにせむ玉柳

五段 なにしかもさんなにしかもなにしかも

六段 こゝろもまたいけむ 百合花のさ百合花の

七段 今朝咲いたる初花にあはましものを さ百合花の

夏引

一段 夏引の 白絲 七量あり 狭衣に 織りても着せむ 汝妻離れよ

二段 かたくなに ものいふをみなかな 汝麻衣も 我が妻のごとく 袂よく 着よく

肩よく 小頭和らかに 縫ひ着せめかも

呂

安名尊

一段 あなたふと あなたふと けふのたふとさや いにしへもはれ

二段 いにしへも、かくやありけむや けふのたふとさ

三段 あはれそこよしや けふのたふとさ

我家

わいへんは とばりちやうをも垂れたるを 大君來ませ むこにせむ

御肴ミツカケなによけむ 鮑 さだをか かせよけむ 鮑 さだをか かせよけむ
 催馬樂が朝廷の式樂の一になつても、元來民謡であるから平安朝には宮廷又は貴族の讌席
 上で、餘興として屢誦はれたことは、中古以後の物語中に散見してゐる。

第六章 和讃と今様

今様の意義—讃歌(漢讃)—和讃—漢讃・和讃・今様の關係

今様の意義
 平安朝の中頃以後に行はれた「今様歌」は、略して「今様」とのみも云ふ。當世風の唱歌の
 意で、蓋し古風歌に對した稱である。古風歌の句法は大抵五七の調であるが、平安朝の初期
 から、漢詩が興隆し、殊に七言の絶句の調が多く行はれた爲に、古風の五七調は衰へて、七
 五の調を喜ぶやうになつた。時に亦佛教も盛に興つて來た所、佛教では七言四句の讃を音讀
 して、佛徳を讃することが行はれた。之を「讃歌」とも「漢讃」とも云つた。「阿彌陀佛身
 金色 相好端嚴無等倫 白毫宛轉五須彌 紺目澄清四大海」此は宋人の作であるが、此の調
 に倣つて作られたものが世に云ふ「いろは歌」である。此の調子に倣つて排列すれば

色イロは匂ニホへど 散チりぬるを 我ワが世ヨ誰タレぞ 常ツネならむ
 有ウ爲キの奥山オクヤマ 今日ケ越フえて 淺アサき夢ユメ見ミ爲シ 醉ヒビも爲セず

此のごとく國語で讃歌の調に作つたのは即ち「和讃」と云ふ。日本語の讃と云ふ意である。
 故に「今様歌」は、和讃の調子に移したものであると云ふことが出来る。即ち「今様歌」の

漢讃と和讃
と今様との
關係

上の七字は漢文の讚の四字に當り、下の五字は漢文の讚の三字に當るのである。尙ほ漢詩の七言絶句を音讀したら「いろは歌」と同じ調子なることが知れるであらう。

一 和 讚

和讚の魁—いろは歌—假名手本—草假字—和讚の種類

「和讚」の古いものでは世に沙門空海の作と稱する「いろは歌」がある。而も此の和讚は草假字の習字本として廣く世に行はれて「假名手本」とさへ呼んだので、草假字も頗る發達し又此の調子に倣つた歌を以て、僧徒は法門の意を述べて「和讚」と云つた。比叡山の源信は最も「いろは歌」の禮讚家であつたが、ある時、大和の金峰山に非凡なる巫女があると聞いて、自身の所願の成否を占はしめた所、巫女は當時行はる、「和讚」を以て告げるには

十萬億の 國々は 海山隔て、 遠けれど

心の道だに直からば 力めて到る ところ聞け

と謠つたと「古事談」に見えてゐる。尙ほ源信には來迎讚がある。此の前後の沙門が作つた和讚には、千觀の「極樂讚」、天台大師の「和讚」、覺超の「阿彌陀和讚」、永觀の「迎接讚」

和讚の種類

和讚

等がある。

二 今 様 歌

今様歌—今様の出典—今様合—今様の例

「漢讚」流行の風を受けて、沙門は法門の意を述べたものを「和讚」と云ひ、俗人は亦之に倣つて喜怒哀樂の情を述べて、之を今様と云つた。其の「今様」と云ふ名稱は何時の頃に起つたかと云へば、大凡延喜以後であらうと思はれる。「明衡往來」は「雲州消息」と稱して藤原明衡の作であるが、此の書の中に

一日殿御供參_ニ宇治_ニ……遊女一兩船、於_ニ蘆葦間_ニ、發_ニ今様之曲_ニ、可_レ謂_ニ象外之遊_ニ

と見えてゐるのを始めとして、枕草子にも紫式部日記にも「今様」の事が見えてゐる。但し其の隆盛に赴いたのは高倉天皇の承安の頃、皇紀一八三一年である。時に「今様合_{アハセ}」と云つて、各競うて其の言辭の秀麗を争ふことゝなつた。百鍊抄卷八に、

承安四年九月一日於_ニ太上天皇_ニ（後白河法皇）御所_ニ有_ニ今様合事_ニ、撰_ニ定堪能輩卅人_ニ云云被_レ決_ニ雌雄_ニ、師長資賢卿等爲_ニ判者_ニ、十三日、仙洞今様合之次有_ニ御遊_ニ上皇_ニ（後白河）令_レ歌_ニ今

今様合

今様の出典

今様歌

様給、希代之美談也

と見えてゐる。

平家物語又源平盛衰記等に、祇王が平相國の西八條殿で唱うた今様、又徳大寺左大將の月見の今様などは、世に最も有名であるが、例として次に示す。

蓬萊山には千歳ふる

萬歳千秋かさなれり

松の枝には鶴集くひ

いはほの上には龜遊ぶ

君を始めて見る時は

千代も經ぬべし姫小松

御前の池なる龜岡に

鶴こそ郡れゐて遊ぶめれ

佛も昔は凡夫なり

我等も遂には佛なり

何れも佛性具せる身を

隔つるのみこそ悲しけれ

舊き都を來てみれば

淺茅が原とぞ荒れにける

月の光はくまなくて

秋風のみぞみにはしむ

又今も往々唱歌に歌はるゝ慈鎮和尚の今様は拾玉集にある。

春の彌生のあけぼのに

四方の山邊を見渡せば

花さかりかも白雲の

かゝらぬ峰こそなかりけれ

花桶もにほふなり

軒のあやめもかをるなり

夕ぐれさまの五月雨に

山ほととぎすなのるなり

秋の夜長になりぬれば

今年もなかば過ぎにけり

我がよ更け行く月影の

かたむくみることあはれなれ

冬の夜寒になりぬれば

契りし山路は雪深し

心のあとは知らねども

思ひやるこそあはれなれ

第七章 朗 詠

倭漢朗詠集—篇目—樂器—朗詠の詠法—朗詠集中の詩句—朗詠の例

樂器
朗詠の詠法

「朗詠」は和漢詩文の警句に曲節を附けて朗吟すること、最初は専ら貴族の間に行はれたものである。従つて別に定まつた書物もなかつたが、藤原公任が始めて『倭漢朗詠集』上下二卷を撰んだ。上卷は、春、夏、秋、冬、雜の五部門に別ち又此の四部門中を六十目に分つて春には立春、早春、春興、春夜、と云ふやうにしてある。下卷は全部雜で更に風雲、晴、曉等の四十八目に分つてある。又漢詩漢文の句に副へて和歌があるのを、後人の加筆であると云ふ説もあるが、傳へて藤原行成の書と云ふ朗詠集に和歌が書いてあるのを見ると、最初からあつたものと思はれる。要するに「朗詠」は詞章を主とする樂で、詩歌を朗詠するのであるから舞はない。樂器は笙、篳篥、横笛の三管を和するのみで絃類は用ゐない。今に存する朗詠の曲譜は七首ある。其の一曲「春過」を左に示す。

春過 夏 關
朝 南 暮 北

袁司徒之家雪應路達
鄭太尉之溪風被人知

朗詠中の詩句

右の一聯は菅原文時の作で、一條雅信が右大臣を辭する表中の語である。此に據つて詩句は訓讀したことが知られるが、其の訓に平安朝の風を窺ふことが出来る。さて朗詠集中で、詩の最も多く收められてゐるのは、白樂天の詩句で百三十五句、之に次ぐものは菅原文時の四十三句、菅原道眞の三十八句、源順の二十九句、大江朝綱の二十八句である。全部總べて百三十五句ある。又和歌は主として三代集中から採擇したから貫之、躬恒などの作が多數を占めてゐる。左に古今最も人口に膾炙してゐるものを示す。

朗詠の例

立 春

池凍東頭風度解 意梅北面雪封寒 菅原篤茂

子 日

倚松樹以摩腰習風霜之難犯也 和菜羹而啜口期氣味之克調也 菅原道眞

鶯

誰家碧樹鶯啼而羅帶猶垂 幾處華堂夢覺而珠簾未卷 謝觀

秋 興

林間煖酒燒紅葉 石上題詩拂綠苔 白樂天

第七章 朗 詠

八月十五夜

秦甸之一千餘里 凜々氷鋪 漢家之三十六宮 澄澄粉飾 公乘位

管絃

羅綺之爲重衣 妬無情於機婦

管絃之在長曲 怒不閱於位人

山水

山復山 何工削成青巖之形 江澄明

水復水 誰家染出碧潭之色

禁中

鷄人曉唱 聲驚明王之眠

鳧鐘夜鳴 響徹暗天之聽

故宮

強吳滅兮 有荆棘 姑蘇臺之露瀼瀼 白樂天

暴秦衰兮 無虎狼 咸陽宮之煙片片

山家

遺愛寺鐘敲枕聽 香爐峰雪撥簾看 白樂天

祝

長生殿裏春秋富 不老門前日月遲 慶保胤

第八章 物語

物語—語部—古事記—風土記—日本書紀—天日矛—伊豆志袁登賣—夢野の鹿—水江浦島子—上古物語と平安朝の物語との性質の相違

物語

語部

天日矛
伊豆志袁登賣
夢野の鹿
水江浦島子

平安朝約四百年間に最も傑出した文學は「物語」である。物語は本来過去の事を語ることで、物とは汎く事物を指して云ふのである。我が邦古來一切の事物は皆口々に語り継ぎ、言ひ継ぐることを以て學問とした。是は「語部」が代々語り傳へたものであることは、既に上古篇で述べた通りである。其の「語部」が傳へたものを筆録して、今に存するものが「古事記」「風土記」の類であり、又其の語り傳へを漢文で書いて家々で傳へたものが「日本書紀」の資料となつたものである。其の中に「古事記」ならば應神天皇の卷にある天日矛が美人を追つて我が邦に來たと云ふ物語、又同卷に伊豆志袁登賣と云ふ美人を秋山之下氷壯夫と春山之霞壯夫との兄弟が争うたと云ふ物語の類、又『日本書紀』では、仁德天皇紀の夢野の鹿の物語、雄略天皇紀の水江浦島子が大龜を獲た所、其の龜が化して女となつたのを浦島子が感じて夫婦となり、其の婦と俱に仙境へ往つたと云ふ物語などは、皆古い物語のまゝを捨てず

上古物語と平安朝物語との性質の相違

して記し留めたものである。故に之に據れば我が邦の古い物語と云ふものゝ一斑を窺ふことが出来る。然しながら、平安朝に起つた「物語」と、此等の「物語」とは全く性質の異なるもので、此等は只語り傳へたもので、故意に作つた物語ではないのである。平安朝に起つた「物語」は、別に意匠を用ゐて、ある目的を以て作つたものであるから、其の名は同じでも、内容に於いても性質に於いても大に異なるものであることを知らなくてはならぬ。

一 物語の性質

物語の性質—國分寺國分尼寺の説經—過去現在因果經—繪卷物—繪卷物の圖様—曼荼羅の圖様—物語と挿繪—日本靈異記

物語の性質

國分寺國分尼寺の説經

平安朝初期に起つた物語の本來の性質は、佛教の所謂因果應報の主意を容易に知らしめる爲に、地獄變相の圖、餓鬼道苦惱の圖等を畫いて勸善懲惡の具とすることに其の目的が存したのである。更に溯ると、聖武天皇の御世から諸國に國分寺國分尼寺を建て、其の講師をして「仁王經」「金光明經」「最勝王經」等を説かしめられたが、當時は専ら國民をして因果

過去現在因果經

應報の理を曉つて、惡行を改め善道を修めるやうにするのを、思想善導の最上機關とせられた爲に、説法ばかりでは容易に會得が出来ないと云ふ所に着眼したものが「過去現在因果經」のごとき經文中に簡素な挿畫を加へて世人に示すやうな工夫を凝らすやうになつたのである。

繪卷物

「物語」と並んで古く「繪卷物」が起つたが、現に國寶となつてゐる繪卷物の中で、佛教に關するものが大多數を占めてゐるのは、其の傳來した寺院の由緒に依ることも多からうが、其の實は其の寺の緣起、若しくは其の寺院開基の高僧等の傳記を畫圖したものである。此等は決して「物語」の起原と切離して見ることの出来ないものである。中古以來の殿舎を畫いた繪卷物の圖様を見ると、殿舎を鳥瞰すれば、幾間も續いてゐる所が悉く見える筈であるが、側面から見た時は、次の間は見る事が出来ない筈なのを、繪卷の圖様では、幾間でも次から次へと見えるやうに長押だけを殘して天井を省いて畫いてある。是は我が繪卷物の新意匠であると云はなくてはならぬ。其の因つて來る所は、佛教殊に眞言で尙ぶ「曼荼羅」の圖様で「曼荼羅」では胎藏界でも金剛界でも各、皆悉く一目に見えるやうに畫いてある。元來「曼荼羅」は佛教の要旨を一目瞭然たらしむるもので、唯繪卷物と異なる點は、其の圖に

繪卷物の圖様

曼荼羅の圖様

詞書フトバガキが入れてないことである。然らば、詞書もあり畫もあるのは何から始まつたのであらう。

物語と挿繪

「從來我が邦の「物語」は繪を挿入するのが本色である。故に今に傳はる古代の「物語」は皆立派な繪が挿入してある。是は「詞書」と對照して一々明瞭に其の趣を會得する便利の爲に工夫したものであるが、中にも軍記類は其の文に出て來る人物の行粧イテマシを仔細に繪で示してある。又「榮華物語」なども、宮殿の室禮や男女の服裝も明細に畫いてある。然しながら、中古の「物語」や「繪卷物」の例では、其の起原を示すことが出来ない。抑其の起原は上古に淵源してゐるが、其の過程として、平安朝初期に出來た「日本靈異記」は繪こそ入れてないが、所謂因果應報の物語の先鞭を着けたものである。其の所以は著者の自序に詳かに見えてゐる。「日本靈異記」は奈良の藥師寺の沙門景戒の撰録であるが、「日本國現報善惡靈異記」と云ふのが本名である。内容は雄略天皇の御世の事から始まつて、著者の在世當時までの事を記してある。「過去現在因果經」に繪が入れてあるのと「日本靈異記」の出現と對照したら、當時の沙門等が衆生濟度の目的で書畫を利用して奮闘した一端が窺はれるのである。故に我が邦の「物語」は最初に教訓の爲に出來たのも理由あることであらう。

「日本靈異記」

一一 物語の起原

繪卷物の起原—繪と詞書—繡帳—縁起—天壽國曼茶羅—法隆寺繡帳—
東院縁起資財帳—繡帳の圖様と製作—繡帳の作者—繡帳の銘文—天壽
國曼茶羅の意匠—曼茶羅の意義—春日曼茶羅

我が邦の「物語」は初め「繪卷物」で、繪と「詞書」と相具したものであつた。「詞書」と繪と相具した意匠は、遠く推古天皇の御世に起つてゐる。推古天皇が、聖德太子薨去の後、其の御一族の發願を御嘉納になつて、聖德太子が天壽國即ち極樂世界に往生あらせられた有様と、其の由來とを「繡帳」に造らせられたのが、後世の「縁起」や傳記の「繪卷物」に、繪と「詞書」とが必ず相伴つて出來た原因と考へられる。此の「繡帳」は世に「天壽國曼茶羅」と稱するもので、今は大和の中宮寺に其の残缺したものが存してゐて、或は「法隆寺繡帳」とも稱してゐる。さばかり残缺はしてゐても、幸に「法王帝説」に其の全文が載せてあるのと、残缺の「繡帳」の圖様とで、千有餘年前の真相が知られるのは誠に貴重なるものである。「東院縁起資財帳」に據ると「古曼茶羅、長壹丈六尺云々」と見えてゐるから、全體は随分廣大なものであつたらう。此の「繡帳」の色彩と刺繡との大體は、地は紫色の籠目紗の

繪卷物の起原

部分と、黄土色の薄綾の部分とがあつて、之に五色の綾ヨロイトで物形を繡ひ出してある。即ち滿月を象つた玉兔は、全體青色の絲を用ゐ、龜形の甲縁は綠絲を用ゐ、首尾四支は茶褐色で、紅絲で縁を取り、甲上の文字はすべて紅絲を用ゐてある。

「天壽國曼茶羅」は「法王帝説」に據ると、聖德太子薨去の後、其の妃橘タチバナ大郎皇女オホウラツメノミコが、太子の天壽國に往生の狀を圖像に因つて觀ることを得るやうにと、天皇に願はれたのを、天皇が聞き召して、諸の采女ウツメメに勅して「繡帳」二帳を造らしめ、又東漢、末賢、高麗、加西、漢、奴加己利をして畫かしめ、棕部クサバ秦久麻シムラをして、其の事を監督せしめられたと見えてゐる。而して、其の「繡帳」は上にも述べたごとく、今尙ほ大和法隆寺村の中宮寺に、其の殘片を藏してある。其の銘文は、全文四百字で、其の帳の四邊に着けた一百の龜形に、每龜各四字づゝを負はせてあるが、今は斷爛して、僅に「部間人公、于時多至」及び「皇前日啓」の三龜合せて十二字を存するのみである。但し、幸に「上宮聖德法王帝説」に全文が擧げてあるが爲に、明かに銘文は見る事が出來るのみならず、其の圖像の一端も亦知ることが出來て、而も後に出來る「繪卷物」「縁起」類の形式を、既に千有餘年の昔、所謂推古朝の文獻に發したことを知ることが出來る。其の銘文は長文であるから、此には省略する。

「天壽國曼荼羅」の意匠は、全部刺繡を以て造つてあることは、是より先に「繡佛」を造ることが「日本書紀」に見えてゐるから、其の技巧を應用して、遂に此の圖像を成したのであらう。又其の銘文は、各種の造像記、若しくは露盤の銘などと、同一の意匠と思はれて、一種和習の雜つた漢文である。而も、世に之を「天壽國曼荼羅」と稱し來つたことは、抑、所以あることである。梵語の「曼荼羅」Mandalaは譯して「輪圓具足」と云ひ、輪の圓滿にして缺けることなきがごとく、一具の法門を圖畫に示したものの意である。故に眞言の胎藏、金剛の二曼荼羅は固より、淨土の變相を圖畫したのも、世に「曼荼羅」と云ひ、今も往々存する「春日曼荼羅」のごときものすらあるのを見ると、之を「天壽國曼荼羅」と云つたのも一理あることである。殊に上に云つたやうに、後に出來た「物語」「繪卷物」の圖様の天井を取除け、長押で仕切つて、一面に各種の圖像の見られるやうにした畫法は、慥に「曼荼羅」から出たものと思はれる。因つて、中世以後に起つた「物語」「繪卷物」の形式は其の起原を上古の「繡帳」に發し、之に四曼、即ち「四種曼荼羅」の意匠を採つて圖様を案じ、「詞書」は彼の銘文を記したのに本づいたものと考へられる。此の間には、彼の「過去現在因果經」の畫を雜へたものなども、無論材料となつたのであらう。又内容に就いて云へば、因果應報

を主題とする「日本靈異記」のごときものを、除外することは出來ないのである。まして、平安朝に出來て所謂「物語のはじめのちや」と云はれる「竹取物語」が、主として佛經の翻案小説であることは、見逃すべからざる材料である。

第九章 教訓物語

教訓物語の系統—物語の始祖竹取物語—觀音力を骨子とする宇津保物語

「教訓物語」は本來佛敎者の創意に出でたものであるから、今に傳はつてゐる我が邦最初の物語も、亦佛敎を中心とした翻案小説である。其の物語は即ち我が邦物語の始祖と仰がる、「竹取物語」と觀音の大威神力を骨子とする「宇津保物語」との二種である。

一 竹取物語

物語の始祖—竹取翁の大眼目—餘興の秀句—竹取物語の典故—人物の名の出典—作者と年代—源氏物語繪合—竹取物語の書畫—同宇津保物語の書畫

教訓物語の系統
竹取物語
宇津保物語

『源氏物語』繪合の卷に

まづ物語のいときはじめのおやなるたけとりのおきな、うつぼのとしかげをあはせてあらそふ

物語の始祖

と見えてゐる。これは、我が邦で物語の開祖と稱せらるゝ「竹取物語」と、共に次いで世に賞翫せらるゝ「宇津保物語」を比較して優劣を争ふと云ふことである。いづれも性質の酷似してゐるものであるから、互に好敵手であるとして取出したのである。「竹取物語」は從來世間では一人の美人、其の名かくや姫に多數の男子が妻に欲しいと手段を凝らして言ひ寄つても、姫は難題ばかり言つて其の意に従はない中に、時の帝王から召されたので、餘儀なく其の言に従はうとする際、姫は本來天人であつたから天帝の御召に依つて帝王に記念の寶物を遺して昇天すると云ふ趣向のみを見て、是は當時の風習で女を尙ぶ狀況を寫したものでありと説いてゐる。が、「竹取物語」は其の卷の始に現はれてゐる竹取の翁即ち讚岐の造ミヤツクノロ 鷹と云ふ翁が極めて正直な人で其の業務を勉めて怠らないので、其の徳行に由つてかくや姫を子とすることゝなつて家富み榮えると云ふのが大眼目であつて、續々現はれて來る男は物語の興味を添へる例の説話の常套で、翁に附屬した話である。例へば翁が姫を子としてから富有

竹取翁の大眼目

になつたことを

竹取の翁、竹を取ること此の子をみつけて後に、竹取るにふしをへだて、よごとヨゴトに黄金ある竹をみつくることかさなりぬ。かくて翁やう／＼ゆたかになりゆく……………いつしかしづきやしなふほどに、このちごのかたちけそうなること世になく、やのうちはくらすところなくひかりみちたり、翁こゝちあしくくるしき時も、この子を見れば、くるしき事もやみぬ。腹だたしきこともなく、なぐさみけり。翁竹をとることひさしくなり、さかえにけり。

とあるを見よ。是は竹取翁が正直の賜物で富有となつたと云ふのが主眼である。此の後に現はれる許多の男の失戀は其の悉くが説話文學の常套手段の所謂「秀句」である。例へば第一石作の御子の賓頭ヒンツ盧の鉢を棄てたことの「秀句」は

餘興の秀句

かの鉢をすて、又いひけるよりぞ、おもなきことをばはちをすつるとはいひける
とある。又第二倉持の御子の、玉の枝の計畫が破れたのを恥ぢて、山へ逃げ入つて見えなくなつた「秀句」は

これをなむたまさかるとはいひはじめける

とあつて、第三の右大臣安倍の連の火鼠の皮が火で焼けて失敗したことの「秀句」は
とげなきものをばあへなしとはいひける

とおとしてある、第四の大納言大伴の御行が龍の頸の玉を取り得ずなつて、眼二つに李のや
うなる玉を持つて来て「あなたへがた」と云つたので

世にあはぬことをばあなたへがたとはいひはじめける

とある。又第五の中納言石上麻呂が燕の巢の古糞を掴んで子安貝を獲ないで、あなかひなと
云つたと云ふので

あなかひなのわざやとのたまひけるよりぞ思ふにたがふことをかひなしとはいひける

とあり、又中納言が燕の古糞を掴んだ時、誤つて籠の上に落ちて腰骨を折つたときいて、姫
が惘然に思つたのを

それよりなむすこしうれしきことをばかひありとはいひける

と見え、更に最後に記念の不死の薬の壺の蓋を開けた高山を不死の山即ち不盡の山と云ふこ
とを

そのよしうけたまはりて兵者もあまたくして山へのぼりけるよりなむその山をばふじの

竹取物語の
典故

人物の名の
出典

作者と年代

山とは名づけるそのけぶりいまだ雲の中へたちのほるとぞいひたつへたる

と、悉く結尾は「秀句」になつてゐるのは、古事記日本書紀等に多く見えてゐる「秀句」の
風を受けた名残であらう。畢竟興味を添へる爲の趣向である。此等の秀句の材料としては、
佛經又は支那の稗史野乘から資料を取つて、一部の小説としたことは確實であるが、其の主
として本づく所は、寶樓閣經奈女者婆經に據り、尙ほ我が邦傳來の古書に據つたことも疑ふ
べからざる事實である。又後漢書西南夷傳にも據る所あると云はれてゐる。又人物の名のか
くや姫は古事記垂仁天皇の段に又「娶^{オホツツナ}大筒木垂根王之女、迦^{カクヤヒ}具夜比賣」とあるのに據る名で
あらう。(世間で「かぐやひめ」と「く」を濁るのは誤である)又大伴大納言御行は文武天皇
の御世に「贈右大臣大伴宿禰御行」を思ひ合せて名としたのであらう。

然らば此の物語は何時の頃何人の手に依つて出來たかと云ふに、傳へて源順の作と云ふこ
とは確證がないと云はれてゐるが、此の物語の文體を推して考へると、光孝天皇宇多天皇の
頃の文體であると云はれてゐる。其の特徴の、一と切一と切、句を短く切つて、長く續けな
いで了解に易からしめたのは、國文の古體を窺ひ知るべき要點である。作者は、未だ詳か
ない。但し「繪合」の卷に「繪は巨勢相覽、書は紀貫之書けり」と見えてゐるので、當時の

物語に繪を挿入してゐることは確實である。又「繪合」の卷に竹取物語は左方で、其の右方に對したのは、「空穂物語」とあるが「空穂物語」の繪は飛鳥部常則、書は小野道風とあるのを見て文と繪と併せてあつたことが知られる。

二 宇津保物語

俊蔭の生立—一篇の主意—観音力の靈験—観音の本誓—作者—句法—
篇目次第—古物語の名

宇津保物語
俊蔭の生立

「宇津保物語」は二十巻で、近世の本は三十巻に綴ぢ分けてあるが、「竹取物語」の二巻であつたのに比較すると遂に大作である。而して其の内容も亦教訓で、卷一の俊蔭の生立ちを殺した所を見ると、

むかし式部大輔左大辨かけて清原の大きみありけり。みこばらに、をのこ子一人もたり。その子心さときことかぎりなし。ちゝはなれば、ちゝはゝおもへらく、いとあやしき子なり。おひたゝむやうをみむとて、ふみもよませず、いひをしふることもなくて、おほしたつるに、年にもあはず、たけたかく心かしこし。

とあるのを始として、俊蔭は年十六で遣唐副使となつて彼の國に向ふ途上、風浪の難に遭つて波斯國に漂流し、天人から琴の名器を授けられ、仙人に就いて祕曲を受け、年三十九で歸朝し、帝の寵遇を蒙り、一女に琴と祕曲とを傳へて歿した。其の女は藤原兼正と契つて一男仲忠を挙げたが、仲忠は六歳で母と共に北山の奥に移り、大木の空洞ウツボに棲んでゐた。かくて母から學んだ琴の妙音は野獸を感動せしめる程であつたので、様々な禽獸が食物を運んで母子を養うた。其の後十二歳に及んで母と共に京都に歸ると云ふが大要である。此の父子琴に妙を得て後々の幸運を開くと云ふのは、畢竟兼々信仰する観音の利益であると云ふのが主意であつて、其の後の登場人物は若干あるが主要人物は皆琴の名人で、一家擧つて琴曲の巧好なる爲に繁昌すると云ふことで筆を擱いたのも、皆観音力であると云ふに歸著する。故に幾多引續いて起つて來る戀愛問題などは悉く餘波で、眼目は信仰觀念の厚いものが家富み榮えて幸福であると云ふに止まる趣向である。此の大木の空洞に棲んでゐたと云ふのに本づいて「宇津保物語」の名は起つたのである。其の観音力に依つて神祕的な事蹟のあることは、一々擧げるのも煩はしいから、俊蔭の卷の最初の観音力のことを擧げよう。

もろこしにいたらむとする程に、あたの風吸きて三ある船二つはそこなはれぬ、多くの

観音力の靈験

觀音の本誓

人沈みぬる中に、俊蔭が船は波斯の國にはなたれぬ。其の國の渚にうちよせられて便なく悲しきに、涙を流して七歳より俊蔭がつかうまつる本尊あらはれたまへと觀音の本誓を念じ奉るに、鳥獸だに見えぬ渚に鞍置きたる青き馬出でてをどりありきて嘶く。俊蔭七度伏し拜むに、馬走り寄ると思ふ程に、ふと鞍に乗せて飛びに飛びて、清く涼しき林の旃檀の蔭に虎の皮敷きて、三人の人並び居て琴を弾き遊ぶ所に下し置きて、馬は消え失せぬ。と見えてゐる。「觀音の本誓」とは妙法蓮華經觀世音菩薩普門品に

若有百千萬億衆生、爲求金銀瑠璃砗磲碼瑙珊瑚琥珀眞珠等寶、入於大海、假使黑風、吹其船舫、飄墮羅刹鬼國、其中若有乃至一人稱觀世音菩薩名者、是諸人等皆得解脫羅刹之難、以是因緣名觀世音……有如是等大威神力、多所饒益、是故衆生常應心念

と見え、又同品の偈に

或漂流巨海 龍魚諸鬼難 念彼觀音力 波浪不能沒

作者

作者は未だ詳でない。古注釋書に源順の作と云つてあるが、賀茂眞淵は「その時代をあつること尙考ふべし」と云つて居る。竹取物語と比較して其の句法の能く似たる所から推して

宇多天皇頃の文體であると云ふ説もある。而して其の篇目の次第は異同が多いが、田中道麻呂が勘校したものには左のごとく定めてある。

第一	俊 蔭	第二	藤 原 君
第三	たゞこそ	第四	梅の花笠 <small>春日まうで</small>
第五	嵯峨の院	第六	吹上の上
第七	吹上の下	第八	祭の使
第九	菊の宴	第十	あて宮
第十一	初 秋 <small>一名とばかりの明月、一名すまひの節會</small>		
第十二	たづのむら鳥	第十三	藏 開 上
第十四	藏 開 中	第十五	藏 開 下
第十六	樓の上	第十七	樓の上の下
第十八	國 讓 上	第十九	國 讓 中
第二十	國 讓 下		

是等の物語が源氏物語以前に上流の人々に耽讀せられたことは、源氏物語の繪合の卷に、

古物語の名

「まづ物語のいできし初のちやなる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合せて争ふ」と見え、又枕草子に物語は「住吉」「宇津保のるい」「殿うつり」「月まつ女」「片野の少將」「梅壺の少將」「人め」「國ゆづり」「うもれ木」「道心すすむる松が枝」「こまの、物語」云々と見え、尙ほ源氏物語の螢の巻にも、此の物語の中の藤原の君の女の事が見えてゐるのに據つて大體其の流行したことが窺ひ知れるであらう。

然るに一旦源氏物語が出現してから、此の古風な教訓物語は衰へたから、後の文獻には此の物語の名が見えなくなつた。但し源氏物語が此の物語に本づく所が多くあることは、掩ふべからざる事實である。殊に枕草子に列擧せられてゐる物語が、殆ど散佚して傳はらないのに、唯此の物語が、たとひ編次に錯簡を生じ文章に誤脱を生じて、現行木版本のやうなものになつたとは云へ、散佚を免がれたことは、正に代表的作品の價値があつたからであらう。

三 落窪物語

儒教影響—落窪物語の大意—孝行物語—内容の検討—源氏物語の粉本

落窪物語

落窪物語四卷は繼子いぢめの物語で教訓物語の類であるが、竹取や宇津保とは、大に其の

儒教の影響

落窪の大意

趣を異にしてゐる。既に翻案や佛教信仰のみの範圍を脱して、頗る家庭的親子兄弟等の倫理問題を取扱つてゐる所は、儒教の影響を蒙つてゐることを窺ひ知ることが出来る。儒教では子たるものは孝を以て修身の第一義となし、親たるものは慈愛を以て主とすることゝなつてゐる。若し之に反すれば禽獸に近しとなす。彼の孔門十哲の一人、閔損が繼母に虐待せられたのを、能く子たる道を守つて父を諫めた爲に、繼母が後悔して慈母となつたと云ふことは世に名高い例である。今此の「落窪物語」は、昔し中納言なる人の先妻腹の姫君に、才徳兼備の人があつたのを、繼母が憎んで、我が生んだ女子ばかりを愛して、繼子は寢殿イナドの放出イナドの落窪に置いて虐待した。因つて落窪の君と呼ばれてゐて、あらゆる侮辱と迫害とに悩まされてゐた。蓋し物語の名は此の姫君の名から起つたのである。此の姫君に最も忠實な阿漕アウゴと云ふ侍女があつた。其の縁から姫君には左近少將と云ふ義侠的な夫が出来て後頗る順調に榮達した所、之に反して中納言夫妻は其の子女と俱に、かの左近少將から種々なる方法で復讐せられて途方に暮れた。が、かくて少將は中納言を落窪の君に對面せしめた所、中納言も始めて後妻の無慈悲なることを憤り、且又後悔した。是に於て少將は中納言及び其の子女に好意を盡して恩を施したのみならず、姫君も亦父母に孝養を致して老後を安定せしめたと云ふ筋

孝行物語

内容の検討

である。畢竟儒教から出た孝行物語と云ふべきである。

此の物語の内容を検討すれば、主として親子夫婦主従の義を先とし、殊に中納言の後妻、落窪の君阿漕及び左近少將等の個性に就いて其の心理を描き、又人々の信仰や態度や對話や消息等を以て、當時の社會相の一面を表はしたるがごときは、漸次に情操物語の興るべき前提をなしてゐると思はれる。故に若しも「源氏物語」が出なかつたら、或は當時の第一位を占むる物語であつたかも知れぬ。源氏物語粉本の一部となつたことは、例へば源氏物語の葵の巻の車争ひは、此の物語の中納言が繼母女房達と共に清水詣に三位中將夫妻に車を押除けられて片輪を損じたことに據つた所が多からうと思はれる。

正月つごもりに、よき日ありけるに、物詣する人ぞよかなるとて、三四の君、北の方なとして、車ひとつして忍びて清水にまうづ。をりしもこそあれ、三位中將殿の北の方[○]落男君もまうで給ふに、中納言殿の車は疾くまうで給ひければ、さきだちてゆく。忍びたりとてことに御前もなく、かいひすみたり。中將殿は男女おはしければ、御前いとおほくて、前おひちらして、いと猛にまうで給ふ。さきなる車は尻早に追はれて、人々わびたり。たいまつのすきかげに、人のあまた乗りたればにやあらむ、牛くるしげにて、え

のほらねば、後の御車どもせかれて、とゞまりがちなれば、雑色どもむつがる。中將殿人を喚びて、誰が車ぞと問はすれば、中納言殿の北の方の忍びてまうで給へるといふに、中將嬉しくまうであひにけりと、下にはをかくおぼして、男ども、さきなる車疾くやれといへ。さるまじうは道傍^{カキハラ}にひきやらせよと宣へば、御前の人々、牛弱げに侍れば、えさきにのぼり侍らじ、かたはらに引やりて、この御車を過せといへば、中將牛弱くば、おもしろの駒にかけ給へと宣ふ聲、いと愛敬づきて、よしあり。車にほのきゝてあなわびし、誰ならんとわびまどふ。猶ほさきに立ちてやれば、中將殿の人々、えひきやらぬはなぞと手礫^{タノイ}をなくれば、中納言殿の人々腹立ちて、ことゝい大將殿原のやうに、中納言殿の御車ぞ、はやうてかし、といふに、御供の雑色共、中納言殿にもおべる人あらんやとて手礫を雨のやうに、車に投げかけて、あらがへば、中將殿の人々、かたやうに集まりて、押やりて、御車どもさきだてつ。御前よりはじめて、人いと多くてうちあふべくもあらねば、片輪を堀におしつめられて、物もいはであり、なか／＼無徳なるわざかなと、いらへしたる男どもいふ、乗りたる北の方をはしめて、ねたがりまどひて、誰がまうで給ふぞ、と問へば、左大將殿の三位の中將殿のまうで給ふなり。只今

の一人にてあしくいらへたなりといふを聞きて、北の方、何のあたにてとにかくに恥を見せ給ふらん、この兵部少輔のことも、これがしたるぞかし、おいらかにいなといはましかば、さてもやみなまし、よそ人も、かくかたきのやうなる人こそありけれ、何物ならんとて、北の方、手をもみ給ふ。いと深き堀にて、とみにえ引上げで、とかくもてさわぐほどに輪少しをれぬ、いみじきわざかなとて、になひあげて繩もとめ来て、結ひなどしてかへらんやはとて、やう／＼のぼる。中將殿の御車どもは、梯殿にひきたて、無期に立ち給つるに、やゝ久しうありてからうじてよろぼひ來ぬ。いとたけかりつる輪折れにけりやとて又答ふ。

古物語の繼
子いぢめ

又此の物語と云つては引いてはないが、只何となく繼子いぢめの物語が古くからある例として源氏物語螢の卷に

すべてよからぬ人に、いかで人ほめさせじなど、たゞこの姫君○明石姫君のてんつかれ給ふまじくと、よろづにおぼしのためふ。まゝは、のはらぎたなき昔物語もおほかるを、心みえに心づきなしとおぼせば、いみしくえりてなん、かきとへのさせ、繪などにもかゝせ給ひける。

と見えてゐる。此の文意を以て察すれば、此の物語と同類の物語が當時多くあつたことも想像せられるのである。

第十章 歌物語 大和物語

歌物語の由來—大和物語—作者—年代—大和物語の名—内容の不統一

延喜天曆以後和歌の勃興に伴つて起つたのは「歌物語」である。抑和歌は人々の性情が言語に發して言語の美術を形成するものであるから、一旦和歌が復興の後公然世間に活躍する時代となつては、和歌を中心とする物語の出来るのは、蓋し當然の歸結と云はねばならぬ。而して古今集の勅撰に當つて其の中に收められたる戀歌はすべて五卷あるから、之を歌集全體の上から見れば實に四分の一を占めてゐる。是畢竟、人たるものは自然の美に對して發する感情よりも人と人との由つて起る感情が遙に多いからであらう。殊に和歌の本領は「物のあはれを知る」と云ふを其の第一義としてあつた當時には、人々の熱情から進み出でた言語美術に對して熱中することは、さながら後世の美術品嗜好家が寢食を忘れて愛玩するよりも勝つた狀況であつた。故に一度、人の記憶に残つた和歌は、人から人へと傳誦せられて後世にも存することゝなる。まして當時の婚姻の成否は、主として其の歌の巧拙に依つて定まる

歌物語の由來

風習であつた爲に、愈和歌は男女必須の藝能となつて一般に其の練習を勵むのを修養の一とした。是に於て和歌の教科書若しくは參考書とも云ふべきものゝ必要が生じて來た。能文の士は此に歌物語を作つて其の需要に應ずることゝなつた。さて其の歌物語の大體は一篇の物語となつてゐるものは其の儘収録するが、若し歌ばかりあつて其の題も端作ハシガキもないものは一篇の物語に作つて之に加へ、又或は其の事の眞偽を問はず興味ありと思ふものは亦之を収録する。此のごとく種々様々なものが入り雜つて來る。是が歌物語の通例である。殊に上代は皆寫本で各自に寫し取つて讀むのであるから、若し其の寫した人が、面白いと感じたことは又任意に書き加へることもある。かくて世に流布するに至れば、此に幾種の別本も出來て異説も從つて多くなる。歌物語を論ずるものは最も此に留意しなくてはならない。我が邦で始めて出來た歌物語は即ち「大和物語」である。

「大和物語」上下二卷、作者に就いては從來諸説區々一定しない。只嘉永年間井上文雄が研究に據れば、

「此の書花山院の御筆すさびとはいひ傳へたれどいかゞあらんより所なし（清輔袋草紙にも作者不詳とあれば今たづぬべきやうなし）。延喜帝を先帝、貞信公をおほいまうち

きみ、清慎公を今のおとぐなどいへるを思へばやう天曆の頃何人が書きさしおけるを、花山の院の寛和永延の頃の人また所々書き加へなどしたる物なるべし。文章のさまことばづかひの時代を思ふに必ず一人の手に出でたるものにあらず。

と論じたのは頗る新発見の説である。而して又書名の「大和物語」と云ふのは、舊説では大和の國の物語を書いてあるからだと云つてあるのを、井上文雄は之を駁して、

按に大和とは上古は大和一國をのみいへれど、はやう奈良のころよりは専ら日本の總名となれり。されば此書山城の都のことはさらなり。大和河内、つくし、みちのく、津の國、信濃など國々のことどもを書きたれば、日本の物語をいへる意にてしか名づけしなるべし。又淨土の傳奇小説にむかへていへるにもあるべし。

と新説を出したのは卓見である。然しながら未だ漠然たるを免がれない。當時は固有の歌を「和歌」と云つて「漢詩」に對せしめ、又「漢才」に對して「倭魂」と云つた。故に此の「大和物語」と云ふのは我が邦特有の歌を中心とした物語であるから「大和物語」と名づけたので、蓋し「古今和歌集」に對して「和歌の物語」と云ふ意見であつたらうと思ふ。後に出來た「唐物語」は亦此の「大和物語」に倣つて作られたものか。

上に述べたごとく、歌ばかり傳はつたものゝ中で之を材料とし一篇の物語に作つて此に収録した例は、古今集雜に「題しらず、よみ人知らず」わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て」とあるのを、ある男が若き時から養はれた姨を婦の意見に従つて捨てたのから、姨捨山と云ふのであると作り物語にしたごときものがある。又萬葉集十六に葛城王が陸奥國に遣はされた時「國司の待遇が不行届であつたので御不興なのを見て采女が詠んだあさか山かげさへみゆる山の井のあさくは人をわがおもはなくて」と云ふ歌の末を聊か變へて大納言の娘を内舎人が盗み出して陸奥へ逃げたが、娘は悲觀して自殺した物語となつてゐるものもある。又伊勢物語にある「筒井筒」の物語の風吹けばの歌は同じでも物語の筋が頗る相違してゐるものもある。要するに同一人の手ばかりで出來たものでないから、其の物語にも文章にも種々錯雜したものである。

第十一章 情操物語

和歌の衰退—古今集序の和歌論—和歌復興の威力—「あはれを知れ」—
情操物語の先驅

和歌の衰退

平安朝初期漢文學隆盛の際は、一般に漢詩漢文を尙んで、固有の歌は衰へ果てた爲に、其の本領を心得たものは絶無となつた。萬葉集の歌が奈良朝の終までにあれ程立派であつたものが、たとひ都が平安京に遷つて百般の文物が急變したとは云へ、掌を反すよりも甚しい變化は實に驚くべき限りである。古今集の序に紀貫之が平安遷都後百年に満たざる間に固有の歌の衰へたことを痛歎して、

今の世の中、いろにつき、人の心、花になりけるより、あだなる歌、はかなきことのみいでくれば、色好の家にのみ、埋木の人知れぬこととなりて、まめなるところには花すすき、ほにいだすべきことにもあらずなりたり。

と云つてゐる。貫之の意見には、漢詩漢文が流行して浮華輕佻に陥つて仕舞つた。唯此の歌の道ばかりは、純日本の産物で、美を愛し倫理を尙び、信仰を高調するが本領である。然る

古今集序の和歌論

和歌復興の威力

に此の特色ある歌を忘却して、歌は唯戀愛の情を詠むもので、戀愛を好む人々の範圍のみで内々翫ぶものだと考へてゐる。故に若し歌を詠むものがあつても公然世に示すものではないとするのが今日の状態であるが甚だしい誤である。神代から立派に獨立した韻文であることが、何人にも解らなくなつたのは遺憾千萬であると長大歎息したのが序文の大意である。かくまでに衰へ果てた固有の歌が、光孝宇多の兩朝を経て、醍醐天皇の御世に至つて『古今和歌集』の勅撰があつたから、天下の耳目を一新したことは洵に人力とは言ひ難いものであらう。此のごとく、旭日昇天の勢で復興した歌が、公然漢詩を壓倒する程の勢力を振ふやうになつてから、苟くも文學を語るものは歌を知らなくてはならぬ。歌は情操を最も容易に會得する無比の機關である。されば歌を知らざるものは其の行爲野鄙にして、決して文化の開進した時世の人でない。高尚なる修養のある人は、宜しく「あはれを知れ」と云ふ風潮となつた。「あはれ」とは森羅萬象が、人間に與へる美的感念である。苟くも人と生れては美を感じることが本能である。然して人々が固有する發作性の精神即ち真情と云へども、常規を逸したものは容すべさるものではない。社會一般が是認する行爲は、即ち常識である。常識に富んだ人は即ち「あはれ」を知つてゐる人であるから、亦社會に是認せらるゝ人である。此のごとき

「あはれ」を知れ

情操物語の先驅

人の歌や文章は、亦世の模範として後世に傳へるに足るものである。此等の歌や、文章を集めたものが情操物語の先驅となることは蓋し自然の趨勢と云ふべきであらう。「伊勢物語」は實にかゝる時代の要求に應じて出現した物語である。

一 伊勢物語

情操物語の模型—在五中將物語—業平の性行—放縱の辯—體貌閑麗—
略無才學善作和歌—渤海客勞問—殿上の角力—忠節—孝養—友愛—審
美眼—信仰

情操物語の模型

在五中將物語

「伊勢物語」二卷は、情操物語の模型である。從來「伊勢物語」は「大和物語」と共に「歌物語」の類として取扱はれてゐた。つらく按ふに「伊勢物語」は業平の歌文に現はれたものに就いて述べられた業平一代の物語である。世に「在五中將物語」と呼ばれたことも其の理由あることである。かくて此の物語は實に情操物語の先鞭を着けたものであるから、單に歌物語と見做すべきものではない。抑物語は是より先に「竹取物語」「宇津保物語」「落窪物語」等のごとき假作物語があり、又「大和物語」のごとき歌物語があつたが、未だ實在の

業平の性行

放縱の辯

體貌閑麗

略無才學善作和歌

人物一人を中心として其の人の審美性、倫理觀、信仰心等を敘述した物語が世に出なかつた。此に忠貞無二の義人で、而も歌文に長じた情操的才人が現はれた。在原業平其人である。業平は平城天皇の御孫で阿保親王アホシの御子、姓を賜はつて「在原」と稱し、臣籍に列せられたとは云へ、正しく皇孫であるから、おのづから世に容される所もあつた。然るに「放縱物に拘はらず」と本傳に記してあるのを早吞込する人もあつて、大に誤解を來してゐる。是は頗る理由のあることであるから詳に辨じて置かう。抑其の「放縱」と云ふのは別に理由があつて殊更に放縱と見せかけたのである。文徳天皇第一の皇子惟喬親王は、御母が藤原氏の出でなく紀名虎の女である上に、業平の夫人も亦名虎の女であつた。惟喬親王は徳望高く、朝野皆推戴を期してゐた。而して又業平は特に親王に心を寄せて、少年の頃から忠實に仕へてゐた。然るに御幼少なる惟仁親王が皇太子に立ち給うたので、惟喬親王は出家して小野山に閑居あらせられたから、業平の失望は譬へようもない。是の後専ら「放縱」を示して藤原氏の忌諱に觸れない覺悟を定めた。又本傳に「體貌閑麗」とあるのに據れば、極めて美貌家であつたから、當時の婦女子は口々に業平業平と言ひ騒いだに相違ない。二條の後や齋宮との交渉のごとき皆是放縱と云はるゝものであらう。「三代實錄」には「略無才學善作和歌」

渤海客勞問

殿上の角力

忠節

と見えてゐるが、當時「才學」と云ふのは、漢學のことであるから、業平は漢學は好まなかつたのであらう。但し善く和歌を作るとあれば、歌に秀でてゐたことは世に認められてゐたのである。其の上に文章も巧妙であつた。異母兄行平は經濟に心を注ぎ、民事に功勞があつたけれど、業平は一朝志を失うてから、放縱を常として權威に屈せず心の欲するに任せて微行して東下りを試みなどしたが、其の公に仕へては清和天皇貞觀十四年鴻臚館に向つて渤海の客を勞問したことがあるのを見れば全く無才では出來ぬことである。又其の力量の勝れてゐたことは宇多天皇の御世に未だ殿上人であつた時、殿上で同官と相撲つて紫檀の御椅子の高欄を折つたことがある。是は放縱と云はゞさも云ふべきであるが、力量のあつたことは窺ひ知れるのである。

以下に此の物語の歌文に據つて業平の本領を發揮する。先づ其の忠節は

わすれてはゆめかとおもふおもひきや

ゆきふみわけて君を見むとは

と詠んだ歌に見よ。之に對して、親王は

夢かとも何か思はむ浮世をば

そむかざりけむ程ぞくやしき

と御返歌があつたと新古今集には見えてゐる。

惟喬親王御出家の後までも其の初志を變へなかつた業平の面目が窺はれるではないか。

又親王の御身邊に面白からぬ事變のあることを花に托して懸念したことは

世の中にたえてさくらのなかりせば

春のこゝろはのどけからまし

と其の懷を述べ、又

枕とて草ひきむすぶこともせじ

秋の夜とだにたのまれなくに

と歎いて、親王が遜位の避け難いことを諷したごときは、生得の放縱者が決して言ひ得べき所のものではない。次に掲げる文をいかに見るか。

昔男ありけり。童より仕うまつりける君御ぐしおろし給うてけり。む月には必ずまうでけり。おほやけのみやつかへしければ常にはえまうでず。されどもとの心うしなはで、まうでけるになむありける。昔つかうまつりし人、俗なる禪師なるあまたまゐりあつた

りて、む月なればことだつとて、大御酒たまひけり。雪こぼすがごとふりて、ひねもすにやまず。皆人酔ひて雪にふりこめられたりといふを題にて歌ありけり。

思へども身を別けねばめがれせぬ

雪のつもるぞわが心なる

とよめりければ、親王いといたらあはれがり給うて、御衣ぬぎて賜へりけり。

業平の誠忠、延喜の昔菅原道真が九月の後朝「秋思」を賦して天覽に供した所、寂威の餘りに御衣を賜はつたのに比して、優るとも決して劣るものとは云へぬ。尙ほ擧げ來れば、親王に對しては積極的な全く犠牲的精神を世人多くは之を知らないことを憾とするものである。

又倫理觀の方面では

昔男ありけり。身はいやしなから母なむ宮なりける。その母長岡と云ふ所に住み給ひけり、子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばくえまうでず、ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに、師走ばかりに、とみのこととて御文あり。おどろきて見れば歌あり。

おいぬればさらぬ別のありといへば

2.
孝養

いよく見まくほしき君かな

かの子いたうちなきてよめる

世の中にさらぬ別のなくもがな

千代もといのる人の子のため

御母伊都内親王から、至急にと云ふ御召で驅け付けて祇候した業平の孝養振、眞情流露たるものがある。又、夫人の兄紀有常が零落して妻を離縁するに當つて何も遺るべきものない由を歎いて歌をおこせたので、同情に富む業平は其の装束は固より夜具の類までを贈つたから

これやこの天の羽衣むべしこそ

君がみけしとたてまつりけれ

又

秋やくる露やまがふと思ふまで

あるは涙のふるにぞありける

と有常が感激したごときは友愛の厚き誠に天晴な行爲ではないか。

3.
友愛

若し審美眼の點に至つては、蓋し當時比類の希なものであらう。僅に二三人の友と打連れ
て遙々と東海道を下つて、我が武藏國隅田川までも逍遙した風流は、實に空前の快舉と云は
ねばならぬ。まして、其の間に詠みと詠んだ歌の中で「唐衣きつゝなれにし」の折句のごと
きは、宿構でも常人には能くし難いものであらう。「名にしおはゞ」の詠は、今に至るまで徧
く人口に膾炙してゐる。尙ほ自然美に對する憧憬は青い苔を刻んで蒔繪の形に石に着けた歌
の意匠の奇抜なることは勿論忠愛の赤誠さへ含蓄してゐることは恐らくは空前絶後のものと
云ふべきであらう。「植ふし植ふば」の一首は古今集中出色の歌と稱せられてゐる。

殊に人情美の把握の點に至つては開卷第一の初冠ウツカヅツリから始めて、思ひ餘つた末には遂には二
條の後や齋宮のごとき關係さへ引起すに至つた。是は人情の至極はかくまでに充進するもの
であると云ふ意を示したので、素より善い事と信じてはゐないのである。

信仰の發露は隨所に見られるが、二條の後との關係に行惱んだので、神佛に向つて此の苦
惱を去らせ給へと祈願したが、却つて増長するばかりであつたので、

こひせじと御手洗川にせしみそぎ

神はうけずもなりにけるかな

5.
審美眼

6.
審美眼

又淳和天皇の皇女崇子タカイコ内親王が御年若くて薨去になつた御葬儀の夜、燈火は全部消してあ
る所で、業平が女車に同乗して御葬儀を拜觀してゐるのを、源ヒナモトノイメ至が女ばかりと思つて、業
平の車の中へ螢を入れたのを消さうとして、

出でて往なば限なるべし燈消ち

年へぬるかと泣くこゑを聞け

と詠んだ歌には法華經序品を典據として詠んである。之を見ると業平が佛教にも涉つてゐた
ればこそ歌にも直に應用することが出来たのであらう。されば其の辭世と傳へられる歌に、
つひにゆく道とはかねてきゝしかど

きのふけふとはおもはざりしを

とあるのは、人間の壽命ばかりは、如何ともすることの出来ぬものと自覺してゐた。是亦佛
教に負ふ所があつたと見られるから、業平の信仰は確實であるといはねばならぬ。

業平は平城天皇の皇子阿保親王の第五子で、皇孫であるが、兄行平と共に在原の氏を賜つ
て臣籍に列したが、藏人から出身して、永く左近衛權中將であつたから、世に「在五中將」
と呼んだ。元慶四年美濃權守で年五十六で卒した。因つて此の物語を「在五中將物語」

と云ふ。世の論者中、業平は當時一流の歌人であるが、其の身は一生不遇であつたから、悶の情を和歌に漏したと云ふものがあるのは甚だ當らない説である。「伊勢物語」は蓋し一篇の業平の傳であり、又業平の歌史と稱して過言ではあるまい。

〇一 源氏物語

日本の至寶——「源氏外傳」の文——「源氏物語」に見えたる物語の本領

「源氏物語」は順徳天皇が「日本の至寶なり」と記し置かせられたるごとく、我が邦の代表的大文章と云ふばかりではない。實に世界的驚異に値する希世の傑作である。かくも世に希なる大文章に對して從來の學者の研究は詳に其の性質を吟味して其の神髓に觸れたものが誠に鮮ない。殊に明治代における學者の研究には「源氏物語は寫實小説なり」とか又は「平和なる戀愛物語なり」とか、或は「一種の理想小説である」など云はれてゐた。近曾山田孝雄博士は「音樂上より見れば、この源氏物語は近松の作品などに用ゐらるゝ術語を借りていはば、これは世話物にあらずして一種の時代物といふべきこととなる」と云はれたのは一頭地を抜いてゐる。

日本の至寶

此等の外は未だ寡聞にして、説あるのを聞かない。余が思ふ所は「源氏物語」は我が邦の小説中最も集大成せられた「情操物語」であると信ずる。我が邦で「情操物語」と稱すべきものは上條に述べたるがごとく「伊勢物語」に其の端を發してゐる。然れども「伊勢物語」は一人一己の業平に就いて敘述したもので、其の規模も亦小さく方面も自から局られてゐる。固に當然である。我が「源氏物語」は總べて五十四帖、年代は前後七十年の長きに涉り、登場人物も無慮三百人の大作である。故に其の規模も範圍も亦廣く大きく結構も頗る雄偉である。殊に當時の社會相に懽焉たらざる作者の大理想と抱負と識見とを縦横に發揮した大論文であるから素より「伊勢物語」の比類でないのは今更に論ないことである。さて其の集大成せられた情操物語の典型と仰がるゝ所以は、あらゆる人物に悉く其の個性を備へてゐないものはなく、従つて其の稟性や修養や倫理的觀念宗教心將又自然界に對する審美性をも窺ふことが出来る。いはゞ多數の列傳を羅列したるがごとく觀があるから、大體之を論ずれば大修史家の敘述した傳記と看做すとも過言ではあるまい。只好色に其の外貌を假るとは云へ、決して寫實小説平和なる戀愛物語理想小説などいふべきものではないのである。「作者の父爲時が國史を書き繼がうとて草稿を作つたのを、作者式部が之を取つて、此の物語に書きなし

『源氏外傳』
の文

たるものである」と云ふ説のあるのも其の謂あることであるかと思ふ。さてこそ「日本紀などはかたそばぞかし」と云つた作者の抱負も亦自から氷解して來るであらう。熊澤蕃山が『源氏外傳』に述べた考説は創見多く、大に參考とするに足るものと思ふ。其の文の大體は、

源氏物語は表に好色のことわりをかけたも實は好色の事にあらず、萬の事世の末になりゆけば、上代の美風衰へて俗に流れん事を思ふに、其のあらはに正しき書は人忌みて近づけず、取る人少なければ、世に徧からず、教をかきたることは多けれども、詞すくみて人厭ふ心あれば其の書久しからず、又有りても見る人なければなきにひとしければ、書きおきても其の詮なき事を思ひはかりて強ひて教へがましき筆法をあらはさず、只好色の戯事になして、其の中に古の上藤の美風心用ひをくはしく記し残せるものなり。もつとも莊周が寓言に類して、彼を此と比し、昔の人の上を今の人の事のやうにいひ、もろこしの事をやまとの事となして書きたる事はあれども、其の實は皆證據ある事どもなり。近代の人の事をかくさん爲に、源氏の君と云ふ好色の人の名を假にたて、作り物語といひなし、古今和漢の故事又はその世の事まで取集めおふせ書たるなるべし。柴式部が父爲時は博學多才の人にて國史をかきつがんとて下がきしおけるを、式部とりて此物語に書なしたりといへ

り。さて此物語をみんには好色淫亂の事を心とせず。作者の奥意に心をつけて書中能事をしるべし。これを知らずして好み見る人は、損多くして益すくなし。夫日本王道長久なることは禮樂文章を失はずして俗に落ざるを以てなり。いにしへの禮樂文章を見るべきものは、此物語にのみ残れり。故に此物語において、第一に心をつくべきは上代の美風也。禮の正しくしてゆるやかに樂の和して優なる體、男女共に上藤しく常に雅樂を翫びていやしからぬころもちひ也。次には書中人情をいへることつまびらか也。人情を知らざれば五倫の化を失ふ事多し、これに戻りては國治まらず。家齊らず、さるにより、此物語にもさまゝの事によせて、人情をつくし知らしめ、且時勢のうつり行きまをよくしるせり。歌を始め詞の末までも、それゝの人の氣かたを繪き出すが如くかきあらはせり。是又此物語に於て人情を得たる所に最も妙也。すべて此物語は風化を體としてかけり。中にも音樂の道をくはしくしるせり。絲竹の遊は君子のわざなり。故に管絃の遊を知らざれば上藤の風俗たえて凡情にながるゝもの也。此物語自然と人の好める好色を釣糸にして普く世の人に翫ばしめ、明君の興り給はん時まで残しとどめんの志也。されば此物語なくばいかでか上世王者の遺風を仰ぎ知らんや。此の故に順徳院も此物語をば日本の至寶としるし置き給

へり。然るに、その至實たる所はすべて禮樂の道に達せざる中人以下の人は、その深意をば知るべからず。
と見えてゐる。

右の要領は好色に名を假りて上代の美風を知らしむること、内外古今の人物に比して述べたものには皆證據あること、作者の父爲時が修史の資料に據つて物語に作つたこと、上代の禮樂文章を觀るべき爲に物語を作つた作者の深意を知るべきこと、又最も留意すべき點は上代の美風を知ること、第二は人情を詳に知るべき爲に作つたこと、中にも雅樂の趣味を知るべきこと等であるといふにあるのである。國文學に従事する専門の人士も未だ言はざる所を詳述してあるのは、能く此の物語の深意を曉つた者と云へるであらう。是の説は遙に後世に出でた學者の考へ及ばない點も少なくない。

余が新に考へ得て「情操物語」と題する理由は、此の物語の中に見えたる作者の言に徴して立てたものである。「螢」の卷に源氏の君が、玉鬘の君に對して物語の本領を物語る言に託して述べた詞には、

この頃をさなき人の○明石の姫君女房などに、時々よまするをたちきけば、物よくいふものゝ世

にあべきかな。そらごとをよくしなれたる口つきよりぞ、いひ出すらむとおぼゆれど、さしもあらじやと宣へば、げにいつはりなれたる人や。○玉鬘の君の詞さま／＼にさも酌み侍らむ。たゞいとまことのことゝこそ思ひ給へられければとて、硯をおしやり給へば、こちなくもきこえおとしてけるかな。神代より世にあることを、しるしおきけるなり。日本紀などはたゞかたそばぞかし。これらにこそみち／＼しくはしきことはあらめ、とて笑ひ給ふ。その人の上とてありのまゝにいひいづることこそなけれ。よきもあしきも世にふる人の有様の、見るにもあかず聞くにもあまることを、後の世にもいひつたへさせまほしきふしぶしを、心にこめがたくて、いひおきはじめたるなり。よきさまにいふとては、よきことのかぎりをえりいで、人に従はむとては、またあしきさまのめづらしきことをとりあつめたる、みなかた／＼につけて、此の世のほかのことならずかし。人のみかどのさへつくりやはかはれる。同じやまとの國のことなれば、昔今のかはるべし。深きこと淺きことのけぢめこそあらめ。ひたぶるにそらごとゝいひはてむも、ことの心たがひてなむありける。佛のいとうるはしき心にて、説き置き給へる、御法も方便といふことありて、さとりなきものは、こゝかしこたがふ疑をおきつべくなむ。方等經の中におほかれど、いひもて

ゆけばひとつむねにあたりて、菩提と煩惱とのへだたりなむ、この人の上のよきあしきばかりのことはかはりける。よくいへば、すべてなにごとも、むなしからずなりぬやと物語をいとわざとのことに宣ひなしつ。

と見えてゐる。中にも「その人の上とて云々から以後の文意と、日本紀などは只かたそぼぞかし」と云ふのと對照すれば是非とも此の物語は「情操物語」と名づくべきものであるといはねばならぬ。而も作者は此の物語とは云はぬが、此の物語のごとき種類のものに比較すれば、勅撰の正史たる日本紀も只一端を記したのみと斷言すると喝破した氣魄のを、しさは實に物語の爲に獅子吼した千古不磨の金言といはなくてはならぬものである。此の物語のごとく人生の機微に徹底したものは即ち社會文化の裏面史で、表面を概括して書いた正史などと日を同じうして論ずべきものではない。

第一節 一部の梗概

源氏物語五十四帖—雲隱—宇治十帖

『源氏物語』
五十四帖

『源氏物語』五十四帖、紫式部の作である事は、其の日記「紫式部日記」に散見する文に據

雲隱

源氏雲隱

宇治十帖

つて露疑ひないものである。さて其の「首卷」桐壺の卷から四十四卷「雲隱」の卷までは、桐壺帝の御子光源氏の君の事歴を中心として述べてある。但し「雲隱」の卷は名ばかりあつて文章はない。蓋し源氏の君の薨去と其の前後七八年の出來事を含めたものであると云はれてゐる。世に「源氏雲隱」と題して六卷の書のあるのは、後世の僞書である事は先賢夙に論ぜられてゐる通りである。さて又四十五卷「橋姫」の卷から最終の「夢の浮橋」まで十卷は、源氏の君の子薫の君の事歴を中心に述べたものである。世に之を「宇治十帖」と呼んでゐる。此の十帖の敘述は宇治を背景として起つた事柄を書いてあり、前の四十四帖は平安京で起つた事柄を記してあるから別けてあるのである。前編とも云ふべき光源氏の君の生涯の事歴は極めて豪華であるから、古代には「光る源氏の物語」と呼ばれ、又「宇治十帖」は頗る凄婉なる情趣に満たされてゐる所は全く前編と正反對である。是畢竟作者の胸中には、當時我が邦の郡縣制度はただ壞れて其の名ばかりで復た世襲の風に立返つて貴賤の懸隔甚だ際立つてゐたから、たとひ帝王の御子であつても歴然たる後見のないものは極めて不遇の一生を送ると云ふ状況であつたことと題材を得て、此に光る源氏の君の異母弟八の宮が優婆塞の宮で宇治に不如意の御生涯を過ごされたと云ふに筆を起して、遂に「宇治十帖」をものして前後對照の妙をなしたものであ

らう。此に源氏物語五十四帖の名目の下に源氏の君と薫の君との年譜を配當して左に示す。

一 前編の名目及び源氏の君年譜

桐壺	誕生から十二迄	帚木	十六の夏
空蟬	同夏	夕顔	同夏から十月迄
若紫	十七の三月から冬迄	末摘花	十七の春から十八の春迄
紅葉賀	十七から十八の十月迄	花宴	十九
葵	廿一から廿二迄	柳	
花散里	廿四の夏	須磨	廿五、廿六
明石	廿六の三月から廿七の七月迄	落標	廿七、廿八
蓬生	廿七、八の夏	關屋	廿八の九月
繪合	三十	松風	三十一
少女	卅二から卅四迄	玉鬘	三十五
初音	卅六の正月	胡蝶	同三、四月

前編の名目
源氏の君の
年譜

宇治十帖の
名目薫の君
年譜

二 宇治十帖の名目及び薫の君年譜

螢	同夏	常夏	同六月
篝火	同秋	野分	同八月
行幸	卅六十二月から卅七二月迄	藤袴	卅七の八九月
横柱	卅九の正月	梅枝	卅九の正二月
藤裏葉	卅九の三月から十月迄	若菜上	卅九、四十、四十一
若菜下	四十一の三月、四十六、七	柏木	四十八
横笛	四十九	鈴蟲	五十
夕霧	五十の八月から各迄	御法	五十一の春から秋迄
幻	五十二の正月から十二月迄	雲隱	有名無レ卷
匂宮	薰元服から十九迄	紅梅	薰十九
竹河	薰十四五から十九迄		

橋姫 十七、十八

椎本 二十

第十一章 情操物語

總角 二十
 浮舟 廿五
 手習 廿六

早蕨 二十二
 蜻蛉 高
 夢浮橋

右の名目は、或は其の毎卷の事柄に據り、或は其の卷中の歌に據つて設けたものが多い。

第二節 一部の主旨

社會改良の大論文—社會の風潮—作者の人格—女子の模範—作者の生活—平安朝極盛時代の大曼茶羅

作者紫式部は、當時天下に跋扈した藤原氏の一門の出身である。然れども、作者は當時の社會改良の大論文を小説に託して發表したものである。當時の社會状態が徒に門地を誇り高位高官を世襲して、宛然上古の氏族政治のごとく、藤原氏は代々政權を擅にして天皇親政の實がない。仕官を望む者は大概勢權ある人に阿附して絶えて獨立の氣概がない。男子既に此のごとし。女子に至つては猶ほ門閥家系と風流才藝と容色とを以て女子の本領のごとく思惟する風潮であつた。故に其の品性修養を問はないから亦貞節の如何は固より問ふ限りではな

社會改良の大論文
 社會の風潮

かつた。此のごとき時代にも希に紫式部のごとき人もあつたから、いよ／＼其の高風を欣慕せらるゝのである。畢竟當時は所謂感情生活の一方に偏倚して絶えて人間の眞價は何か、節義は如何なるものかと論ずる人もない。されば作者は先づ「桐壺」の卷に於て源氏の君の生母桐壺、更衣の人となりを描き出して、女子の本領はかくあるべきものなりといふ模範を示したのである。斯く女子の本領は更衣を假りて表現したとはいへ。自己胸中に鬱勃たる大見識を正面から堂々と論陣を張つて天下の迷夢を覺醒せうと企てゝも、成功すべき時代でない事を達觀した。此に於て作者は露其の鋒芒を露はさず、自身は尋常一様の婦人として生活しつつ、ある一方には天稟の鬼才を揮つて、平安朝極盛時代と仰がる、延喜天曆の最上級社會の時代相を一大曼茶羅に畫き出して、其の絢爛の美に恍惚たらしめた智謀と膽力とは、實に凡人の業とは思ふことの出来ぬものである。故に此の大曼茶羅を觀て其の色彩の美に眩惑せらるゝ者もあらう。又希に一隻眼を有する者は、能く其の深意のある所を觀察して、作者と肝膽相照すものも決してなくはあるまい。梵語に所謂曼茶羅は此に輪圓具足と譯すと聞く。我が源氏物語作者の理想と抱負と識見とを經緯となして、平安朝極盛時代の最上級社會人の間に錯綜して起伏する人事を一部の書に輪圓具足せしめたものと見ることが出来よう。果して

然らば此の物語は集大成せられた「情操物語」であると宣言する。

第三節 作者の時代観

作者時代観の検討—攝政關白の素質—作者の道長観—道長の懸想—女子の人格論—典型的女性—「サブラヒ」の奉公

作者時代観の検討

紫式部が此の物語の準據は何に得たかと云ふことに就いては諸説區々であるが、今や之に先だちて作者が現存の時代即ち一條天皇の御世の時代相をいかに観たかと云ふ検討が最急務であると信ずる。

攝關の素質

惟ふに當時攝政關白と云へば最も最上至極の職であつた。然るに、式部は其の攝政と云ふものも裸一貫で世間に突き出せば一向其の價値のないものである。其の天下に重きをなすのは唯門閥を背景としてゐる爲であると痛論したことは「帚木」の卷に見えてゐる。其の文は、
をのこのおほやけにつかうまつり、はかくしき世のかためとなるべきも、まことのうつはものとなるべきをとりいださむには、かたかるべしかし。
と大喝してある。「まことのうつはもの」とは眞實に攝關となる器量といふことである。一

作者の道長観 道長の懸想

一に人物試験にかけたら合格者はないと宣告した。されば式部の眼中にはたとひ「此の世をばわが世とぞおもふ」と傲語した道長でも、門閥で最上至極の地位に頑張つてゐるので攝關の試験には不合格者であると云はぬばかりの氣魄が窺ひ知られるではないか。道長などがいかに其の權勢や威力で脅かしても懸想してもそんな脅迫にびくともせぬことは紫式部日記に渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けどおそろしさに、おともせであかしたるつとめて

よもすがら水雞よりけに、なくくも

まきの戸口に、たきわびつる

と道長から歌を贈つて來た。式部は直に

たゞならず、とばかりたくく、水雞ゆゑ

あけてはいかに、くやしからまし

と返歌したと記してある。又嘗て『源氏物語』が中宮の御前にあつたのを、道長が見付て戯言に托して梅の枝の下に敷かれてあつた紙に

すきものと、名にしたてれば、見る人の

をらすぐるは、あらじとぞおもふ

と詠んで式部に取らせた。式部は

人にまだ、をられぬものを、誰かこの

すきものぞとは、くちならしけむ

と答へて美事に其の懸想を一蹴し去つた。此の前後二回の勇氣は唯貞節とのみ評し得るものではない。攝關と云つても、虚名を擁する傀儡に過ぎぬと輕蔑してゐるからであると思はれる。

然らば、當時の女子の眞價はいかに觀てゐたかと云ふ問題は、從來の學者間に一向其の沙汰がない。「筈木」の卷の品定には各種各様の人物が擧げられてゐるが、作者の理想に適當する女性はない。で、作者は別に自己が女子として完全なものはかくもあるべきものであると發表した言は「筈木」の卷に

今はたゞ品にもよらじ。かたちをば更にもいはじ。いとくちをしくねちけがましきおぼえだになくば、たゞひとへに、ものまめやかに、靜なる心のおもぶきならむよるべをぞ、つひのたのみどころにはおもひおくべかりける。あまりのゆゑよし、心ばへうちそへたら

女子の人格論

むをば、よろこびに思ひ、すこしおくれたる方あらむをも、あながちにもとめくはへじ。うしろやすく、のどけきところだにつよくば、うはべのなさは、おのづから、もてつけつべきわざをや。

と見えてゐる。此の文は實に當時の女子に對する認識不足を猛烈に論告した大文字である。學者が此の文を閑却するのは何故であらう。右の文意を略言すれば、女子の必要條件は家柄種性の上中下などの等級を選ばず、容貌などは眼中に置かぬは勿論、女子の最も禁物たる嫉妬心とひがみ根性の痕跡を搜してもなく、只専ら忠實で而も溫良貞淑なる性格の持主であれば、人の妻として間然する所はない。若しも此の上に風流才藝に秀で、機智に富んだものがあつたら、案外の拾ひ者と思ひ、風流才藝が劣つてゐても、強ひて女子の必要條件の缺點として擧ぐるに及ばぬと云ふのである。

要するに、後顧の憂なく嫉妬心が毛頭ないと云ふ一點が確乎としてあつたら、風流才藝のごときものは、何時でも習へば身に附ける事の出来るもので、女子の第一條件とするに足らぬと云ふ意であつて、此が式部の人格本位論である。今日から見れば敢て奇とするに足らぬものであらう。然るに九百年前門閥萬能の世、女子は家格容色才藝を主とする時にあつて、

此の論を公表した膽力と理智とは、有聲男子を睦若たらしむるものがあるではないか。さればこそ此の物語中で式部が理想的男子光源氏の君に亦女子の模範的人物葵上と紫上とを配したのも偶然ではない。

尙ほ此の物語中、模範的女性には桐壺更衣がある。感情生活の氣圍中に罩められてあつたに拘はらず、確乎不屈の精神を以て、あらゆる壓迫と暴威とに打勝ちつゝ遂に斃れて止んだ決心は、實に大丈夫の態度であつた。「桐壺」の卷に

いとはしたなきことおほかれど、かたじけなき御心ばへのたくひなきをたのみにてまじらひたまふ。

嫉妬拗戻至らざるなき間に只一人更衣は生命を賭して之に當つた。詢に平安朝三百年間に希に見るの女丈夫であつた。此の他、空蟬、權齋院は特別として明石の上がけ高くて謙遜なる、花散里の嫉妬せぬ、藤壺の君が過を悔いて早く入道したる、玉鬘の君がよく執拗なる懸想を逃れ通したる、總角の君が父入道の遺誡を嚴守して婦徳を全うしたるがごとき類は、亦最も優れたものである。

「サブラヒ」の奉公

節義の獎勵は桐壺の更衣にも固より見ることが出来るが、當時「サブラヒ」と稱して貴人

典型的な女性

に祇候して、誠心誠意主命に服従し、而も微祿に甘んじてゐた犠牲的日本精神を以て黙々の裏に他日の雄飛を期待してあつたかと思はるゝ敘述は、洵に見逃し難い式部の觀察である。源氏の君の股肱と恃まるゝ惟光、玉鬘の君を厄難中から救ひ出して肥前から京都まで無事に送り致した豊後介も其の忠節を認めなくてはなるまい。男女共にかくも人格本位で、我が國家社會に貢獻すべき方針を暗示した式部の頭腦は凡慮の測るべきものではないのである。

第四節 物語の準據

「拙堂文話」の説―「源氏物語之音楽」の説―物語中の因據二條―著作年代考證

「源氏物語」は、作者が現存の時代、即ち一條天皇の御世に全盛であつた御堂關白道長の豪華を敘述したものであると云ふのが一般學者の説である。希には漢學者で其の準據を論じたものもあつた。齋藤拙堂の「拙堂文話」には其の體は莊子に本づき、其の閨情は漢武内傳飛燕外傳及び唐人の長恨歌霍小玉傳の諸篇から得來つた」と論じてゐる。此の説は我が邦の事情に觸れてゐない極めて皮相の見である。近曾山田孝雄博士は「源氏物語之音楽」に於て音

「拙堂文話」の説

樂上の見地から見て、村上天皇の頃の事に據るものと斷ぜられたのは誠に創見である。其の考證を掲げれば、

以上音樂の記事についての著しき三の疑問について更に考ふるに、今様については著者は當時に勃興流行せしものを載録せず、大筆築については著者當時既に廢絶して行はれざりしものを載録せり。次に琴については、當時流行せず知る人殆んどなかりしならむと思はるゝ古きものを自から古きものと認め且ついひつゝ、しかも盛に記述してこれを興味の一中心とせるを見るなり。こゝにこの三點を綜合して、これを統一調和せるものとして考ふる時には、これは今様の未だ行はれず、大筆築のなほ廢絶せず、琴の盛んにもてはやされし三點の合致せる時代の音樂を記述せりとするより外に解釋の方途なきを見る。かくの如き見地に立ちてこれに該當すべき時代を溯り求むれば、著者に最も近き時代としては村上天皇の御代といはざるべからず。これによりて論ずれば音樂上より見れば、この物語の描ける時代は一條天皇の御世の時代相にあらずして少くとも村上天皇の御代を下るべからざるものなりといはざるべからざることゝなるべきなり。

右の考證は頗る新説で、憑證も確實であるから誠に空前の卓見で此の物語を讀むものゝ大

「源氏物語
之音樂」の
説

物語中の因
據其の一

福音と謂ふべきである。然しながら余は別に新説を立てるものであるが、其は「源氏物語」中に散見する所の文に據るもので、一往其の證徴を掲げる。先づ第一は、「明石」の卷の文である。明石入道が箏の琴の名人であるが、其の傳授は醍醐天皇から某親王に傳はつたのを、入道が傳授したといふ文である。其の文は、

入道はあひなくうちゑみて、遊ばすよりなつかしさまざるは、いづこのにか侍らむ。なにかし延喜の御手より彈き傳へたること、三代になむなり侍りぬるを、かう拙き身にて、この世の事は捨て忘れ侍りぬるを、物の切にいぶせき折々は、かきならし侍りぬるを、あやしうまねぶものゝはべるこそ自然にかの前王の御手に通ひて侍れ。山伏のひが耳に松風を聞きわたし侍るにやあらむ。いかでこれ忍びて聞し召させてしがなと、きこゆるまゝにうちわなゝきて涙落すべかめり。

と見えてゐる。「前大王」とは、今は薨ぜられた親王と云ふことである。其の親王と云ふのは何親王にましますか不明であるが、河海抄に箏の相承の事を掲げたるものに據れば、勅子内親王が醍醐天皇から血脈を受けて居られる由が示してある。是は實際の血脈であるが、作者はかゝる例などを思ひ合せて此の物語に織り込んだのであらうか、又一つの證は、「繪合」

の卷に年中恒例節會中の興あるものを昔の繪の名人が書いた繪卷に、醍醐天皇が宸筆を以て詞書を書かせられたのに、朱雀天皇が、當代の御事どもを書かせられた上に梅壺の齋宮が御下りの狀況を繪の名人に命じて畫がせ給ふ所のものを、秋好中宮に獻らるゝと云ふことが記してある。其の文は、

院○朱にもかゝること○繪聞かせ給ひて、梅壺に御繪どもたてまつらせ給へり。年の中の節會どものおもしろく興あるを、昔の上手どもの、とりくくにかけるに、延喜の御手づからことのこゝろかゝせ給へるに、またわが○朱御世のこともかゝせ給へる卷に、かの齋宮の下り給ひし日の大極殿の儀式、御心にしみておぼしければ、かくべきやうくはしくおぼせられて、公望○五が、つかうまつれるがいといみじきを、たてまつらせ給へり。○中院の御繪はきさいの宮○弘殿○後より傳はりて、あの女御○今の○弘の御方にもおほくまゐるべし。内侍のかんの君○臘月○侍も、かやうの御繪このまじさは人にすぐれて、をかしささまに、とりなしつゝあつめ給ふ。

と見えてゐる年中行事繪卷とも云ふべきものを朱雀院が名人の繪師に書かせられたと云ふこと、又弘徽殿女御と妹の臘月夜の内侍とが繪卷を集められると云ふことを併せ考ふれば、

物語中の因
據其の二

此の繪合は村上天皇の御世に擬してあると考へても無理はあるまい。

斯のごとく明かに醍醐朱雀村上三朝の事跡に擬して書いてある上は、固より一條天皇の御世の事を書いたなど云ふ説の湧いて來る理由はない筈である。然るに従來の學者が殆ど異口同音に其の説を主張するのは其の意が解し兼ねるものである。故に余は斷じて延喜天曆の治世に擬して書いたと云ふことを明言すると共に山田博士が大筆築廢絶前の記事に據つて村上天皇の御代を下るべからざるものなりといはざることゝなるべきなり」と、斷言せられた説に左袒する一人である。

著作年代考
證

斯く論じ來るに従つて又一つ疑問が生じて來ることは、作者が此の物語を書いた年代の研究である。近來の學者の説に「式部が此の大作に著手したのは、恐らく夫に先たれた寡婦としての淋しさを、しみくく感じてゐた頃であらうと思はれるが、斯かる大部のものが一朝にして成る筈はないから、宮仕の間も書き續けたのであつて云々」と云ふ説があるが、此の説は根據のない想像説であるから大に検討を要するものである。

熊澤蕃山が

紫式部が父爲時は博學多才の人にて國史をかきつがんとて下がきしておけるを式部とり

て此物がたりに書きなしたりといへり。

と云つたのは何に據つた説か分明せぬから姑く措いて、今は其の自記なる紫式部日記の記する所に據つて考證する。日記の中に、其の夫宣孝卒去の後に作者が讀書するのを、家の女房が見付けて非難したことが見えてゐる。其の文は

風の涼しき夕暮、きよからぬひとり箏をかきならしては、なげきくはゝるとき、知る人やありけむと、ゆゝしくなどおぼえ侍るこそ、をこにもあはれにも侍りけれ。さるはあやしう黒みすゝけたる曹司に箏のことと琴調べながら心につれて雨ふる日、ことぢたふせなどもいひ侍らぬまゝに、塵積りてよせたりし厨子と柱のはざまに、くびさし入れつゝ、琵琶も左右に立て侍り、大きな厨子ひとよるひに、ひまもなく積みて侍るものひとつにはふる歌物語の、えもいはず蟲の集になりたる、むづかしくはひちれば、あけてみる人も侍らず、かたつかたに、ふみどもわざとおきかさねし人も侍らずなりにし後、手觸る人もことになし。それをつれづれせめてあまりぬる時、ひとつふたつひきいでてみ侍るを女房あつまりて、おまへはかくおはすれど、御さひはひはすくなきなり。なでう女がまんなぶみはよむ、昔は經をよむをだに人は制しきと、しりうごちいふをきはべるにも、物

いみける人の行すゑ命長かるめるともみえぬためしなりといはまほしく侍れど、おもひくまなきやうなり。

此の文は作者が中宮奉仕の間、里邸に下りたる時の状況を述べたものであるが、種々の樂器と和漢の書物が堆積してあるが、夫の歿後は手を觸るゝ人もない。が、餘りに無事に苦しむ時には漢籍などを一二冊取出して讀むと、家の女房達が見咎めて、御前には斯のごとく漢籍などを讀まるゝから御不運であるのです。何故に女が漢籍などを讀みますか。昔は女が經を讀むことだけでも悪いと禁じたものであります」と女房が陰口を吐くのを作者が聞いて經文など手にも觸れない人の行末が屹度長命するかと反問したいけれど、餘りに不遠慮のやうであるから止めた」と云ふ意である。漢籍は女が讀むのでないと禁じてあつた當時とは云へ、只拾ひ讀みをするだけでも作者の侍女が八釜しく陰口を吐くやうでは、此の物語など此の頃書いてゐるとも思はれないではないか。又寡居中親しき友などからの消息の返事の文が載せてあるのには、

いかに今は事忌し侍らじ。人といふともかくいふとも、只阿彌陀佛にたゆみなく經を習ひ侍らむ。世のいとほしきことは、すべてつゆばかりの心もとまらずなりにて侍れば、聖

にならむに懈怠すべしも侍らず、たゞひたみちにそむきても雲にのぼらぬ程のたゆたふべきやうなむ侍るべかなる。それにやすらひ侍るなり。年もはたよき程になりもて侍る。いたうこれよりおいぼれて、はためづらにぞ。經讀まず心もいとく、たゆさまさり侍らむものを、心深き人真似のやうに侍れど、今はたゞかゝる方のことをぞおもひ給ふる。それ罪深き人は、またかならずしもかなひ侍らじ。さきの世、知らるゝことのみ多く侍れば、よろづにつけてぞ悲しう侍る。

右の消息は世間の作者に對する風評は一切耳に止めず、只佛道に歸依して精進する覺悟であるが、二人の娘の爲に十分に行ひ澄ますことも出来ぬが、年齢も相當に更けて來たから其の後はますく老耄するであらう。老耄したら道心もたゆむであらうが、精々人真似でも道心堅固に一生を送りたいものである」と云ふ意味である。此の文に據つて考へれば決して寡居して後、物語を書くといふことはないと察せらるゝものである。

因りて按ふに、式部が此の物語を書いたのは何時か。父爲時は文章生で、詩文和歌に長じてゐた。詩は「本朝麗藻」に歌は「後拾遺集」「新古今集」に收められてゐる。又兄惟規も亦詩文和歌に長じてゐた。故に著作に手を著けたのは、父の家にあつた時からで、宣孝の妻

となつてからも相當に彩管を揮つたものであらうと思ふ。未だ其の確證を得ないとは云へ、前後の事情から推測してかくは述べ置くものである。

第五節 作者の傳

紫式部の家系—大日本史紫式部の傳—資性敏慧—閨富精妙—婉順淑嫺—
—物語中に表はれたる婦徳の譬喩

紫式部の家系
大日本史紫式部傳
資性敏慧

紫式部の曾祖父は、左大臣藤原冬嗣の六子良門の孫兼輔である。世に堤中納言と稱して歌を善くするを以て聞えた。其の孫爲時は儒者にして兼ねて歌詩を巧みにしたが、國守を以て終つた。其の詩歌は世に存して集にも收められてゐる。作者紫式部は實に爲時の女である。父祖以來文學者として著はれてゐる。大日本史列女傳に記する所の紫式部の傳に、

紫式部は式部丞爲時○式部丞は誤の女なり。右衛門權佐藤原宣孝に嫁す。式部資性敏慧、幼時人の書を読むを聞いて輒ち能く暗記す。爲時甚だ之を愛し常に之を撫で、曰はく恨むらくは汝をして男たらしめざることを、長じて和歌を善くし、博く和漢の舊記に涉り、兼ねて朝廷の典故に通ず、時に上東門院、方に文詞を好み、婦人の才華あるものを選び、引いて左

閑富精妙

右に置く。式部亦時に候す。上東門院白氏文集を讀まむと欲す。式部之に樂府二卷を授く。上東門院の父道長、其の才色を悦び、之に私せむと欲す。式部拒んで從はず。源氏物語五十四帖を著はす。醍醐朱雀村上三朝の事蹟に假託し、空に架し、虚に憑り、閑富精妙、古今に度起す。後人箋註を下し、疑難を釋し、詞家の宗家となす。一條帝讀んで大に之を賞して曰はく、是善く日本紀を諳熟せるものなりと、人呼んで日本紀の御局と曰ふ。人となり、婉順淑嫺、自から長ずる所を矜らず。其の謹飭、身を持するの大較、著はす所の日記に見ゆ。女賢子亦和歌を善くす。狭衣物語を著はす。太宰大貳高階成章に嫁す。後一條帝の乳母となる。大貳三位是なり。(原漢文)

婉順淑嫺

婦徳の譬喩

大日本史の記する所を見るに、列女傳に收めたが、其の序文に「婉嫺淑順婦女之道也」又「女子事以才稱、其殆徳之衰也歟」と云つて、文學傳には收めてない。作者も「帚木」の卷に於て細工人と繪師と書家とを假りて女子の婦徳と才藝との譬喩を巧妙に述べてゐる。其の文は、よろづの事によそへておぼせ。木の道のたくみのよろづの物を心に任せてつくりいだすも、臨時のもてあそび物の、その物と跡もさだまらぬは、そばつきさればみたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつゝ、さまをかへて、今めかしきに目うつりて、をか

しきもあり。大事としてまことに、うるはしき人の調度の飾とする定まれるやうあるものを、難なくし出づる事なむ、なほまことの物の上手は、さまことに見えわかれ侍る。又繪所に上手おほかれど、墨がきにえらばれてつき／＼に。さらにおとりまざるけちめ、ふとしも見えわかれず。かゝれど人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐國のはげしきけだものゝ形、めに見えぬ鬼の顔などのおどろ／＼しくつくりたるものは、心にまかせてひとときは人の目を驚かして實には似ざらめど、さてありぬべし。よのつねの山のたゞずまひ、水の流れ、目に近き人の家居ありさまげにと見え、なつかしくやわらびたるかたなど、靜にかきませて、すくよかならぬ山の氣色、木深くよばなれてたゞみなし、けちかきまがきの中をば、そのこゝろしらひおきてなどをなむ、上手はいといきほひことに、わるものは及ばぬ所おほかめる。手をかきたるにも、深きことはなくて、こゝかしこ、てんながにはしりかき、そこはかとなく氣色ばめるは、うちみるに、かど／＼しく景色だちたれど、なほまことのすぢをこまやかにかきえたるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今一度とりならべてみれば、なほ實になむよりける。はかなきことだにかくこそ侍れ。まして人の心の時にあたりて景色ばめらむ、みる目のなさをば、えたのむまじく思ふたまへ侍る。

此の要旨はいづれも眞實は凡眼には愚なるやうに見えて、調子よく其の場を繕ふもののみ悦ぶ故に鑑定を誤るものであるといつて、女子の眞實あるものは才藝を巧にするに勝る理を喻へたものである。

第六節 女子の教育

物語に表はれたる女子教育論—女子教育の難—女子教育の標準

作者は夙に女子教育の難いことを所々に述べてゐるが、中にも「若菜」の卷に紫の上に物語する語に托して述べたものが最も事理に通じた論と思はれる。其の文は

なべての世のことにも、はかなく物をいひかはし時々によせて哀をも知り、行方をもすぐさず、よそながらの、むつびかはしつべき人は、齋院とこの君○臘月 夜内侍とこそはのこりありつるを、かくみなそむきはて、齋院はたいみじうつとめて、まざれなく、おこなひにしみたまふにたなり。なほこゝらの人の有様を聞き見る中に、深く思ふさまに、さすがになつかしきことの、かの人の御なずらひにだにもあらざりけるかな。女子をおほしたてむことよ。いとかたかるべきわざなりけり。宿世などいふらむものは、目に見えぬわざに

物語に表はれたる女子教育の難

て、親の心に任せ難し。おひたゝむ程の心づかひは、なほ力あるべかめり。よくこそあまたかたぐゝに、心のみだるまじき契りなりけれ。年深くいたらざりしほどに、さうぐゝしのわざや、さまぐゝに見ましかばとなむ、なげかしきをりぐゝありし。若宮○女を心しておほしたて奉り給へ。女御○明石女御はものゝ心を深く知り給ふほどならで、かくいとまなきまじらひをし給へば、何事も心もとなきかたにてぞ物し給ふらむ。御子たちなむ、なほあくかぎり人に點つかるまじくて、世をのどかにすぐし給はむに、うしろめたかるまじきこゝろばせ、つけまほしきわざなりける。限ありて、とざまかうさまの後見まうくるたゞ人は、おのづからそれにもたすけられぬるをなど聞え給へば、はかぐゝしきさまの御後見ならずとも、世にながらへむかぎりは、見奉らぬやうあらじと思ふを、いかならむとて、なほものを心細げにて、かく心に任せて、おこなひをもとゞこほりなくし給ふ人々を、うらやましく思ひ給へり。

右の要旨は、「多數の女達の心操態度を見聞する中で、深い分別があり、それで愛敬のある點では権齋院の比較になるものはない」と思ふ結果女子教育程難いものはない。其の子の運不運などいふことは目に見えぬ業で親の心に任せ難い。子供の生長する間の親の心配は、矢

張骨の折れるもの、やうである。皇女達こそ矢張飽くまで人に非難されないで世の中をゆつたりと御過ごしなさる爲に、御側の人をはらくせぬ程の氣性を備へさせたいものである。高の知れた身分で、善かれ悪かれ夫を持つ平人は、自然に夫に缺點を補つて貰へるわけである」と云ふ意である。

又女と云ふもの程身の持方も窮屈でかはいさうなものはない」と云ひ出して一生世の日影者となつて何の慰安も出来ない、さらばといつて一向に道理も情趣も分らない無智の者となつて居たら氣樂かも知れぬが、折角教育してくれた親も誠に不本意に思ふだらう。物事の是非を知りながら、心中に秘めておくのも甲斐のない事、畢竟中庸にはどうして身が持てるか」と云ふことを敍しては

女ばかり、身をもてなすべきさまの所せうあはれなるべきものはなし。物のあはれをもをかききことをも、見知らぬさまにひきいり、沈みなどすれば、何につけてか世に經るはえばまじさも、常なき世のつれづれをも慰むべき。そは大方物の心知り分かずいふかひなきものにならひたらむも、生ふしたてけむ親も、いと口惜しかるべきわざにはあらずや。心へのみ籠めて無言太子とか、法師ばらの悲しき物語にする、昔の譬のやうに悪しきこと

女子教育の標準

善きことを思ひ知りながら、埋もれなむも、いふかひなし。わが心ながらも、よき程にはいかでたもつべきぞと、今はたゞ女一の宮の御ためなり。
と右は紫の上が、明石姫の腹なる女一の宮教育のことについて苦心せらるゝことを描いたものである。

第七節 草假字全盛

假字文學—假字全盛—草假字—葉手書

平安朝初期から學問とし云へば漢學であつた。而も其の經史に通じたものを「漢才」と稱して我が固有の「倭魂」に對したと、又文學と云へば「漢詩」であつたのが、延喜の頃から「和歌」が勃興し來つたことも亦上章に述べた。さて此の物語で、學問と云へば、大學に於ける學問の事を指してあるのも當然であるが、只一つ前代に優れたものとして特筆してあるのは「假字文字」の一事である。

「古今和歌集」が勅撰せられて、其の假字序が和文の標準となつてから、此の時代迄約百年である。然るに、此の物語に延喜天曆時代の假字文字の發達が前古に比類ないことを述べて

假字文字

假字全盛

あるのも、此の物語の時代を延喜天曆の時に擬してある證とするに足ると思ふ。其の假字文字が當時空前の發達を遂げたことを、「梅が枝」の卷には次のごとく敘してある。

よろづのこと、昔には劣りざまに、あさくなりゆく世の末なれど、かんなのみなむ、今の世はいときはなくなりたる。ふるきあとはさだまれるやうにはあれど、ひろき心、ゆたかならず。ひとすぢにかよひてなむありける。たへにをかきことは、外よりこそ、かきいづる人々ありけれど、女手をこゝろにつれて、ならひしさかりに、こともなき手本多くつどへたりし中に、中宮秋好の母御息所六條御息所の心にいれず、走りかいたまへりし、一くだりばかり、わざとならぬをえて、きはことにおぼえしはや。さてあるまじき御名もたてきこえてしぞかし。くやしきことにおもひしみ給へりしかど、さしもあらざりけり。宮にかくうしろみつからまつることを、心深うおはせしかば、なき御陰にも、見なほし給ふらむ。宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどやおくれたらむと、うちさゝめきてきこえ給ふ。故入道の宮薄雲女院の御手は、いとけしき深う、なまめきたるすぢはありしかど、よわき所ありて、にほひぞすくなかりし。院の内侍のかみ月夜こそ、今の世の上手におはすれど、あまりそほれて、くせぞそひためる。さはありとも、かのきみと、前齋院

草假字
筆手書

○權上と、こゝ○禁にこそは、かきたまはめと、ゆるしきこえ給へば、このかすには○禁上まばゆくやと、聞え給へば、いとうなすぐし給ひそ○源氏にこやかなるかたのなつかしさは、ことなるものを、まんなのすゝみたるほどに、かんなは、しどけなき文字こそまじるめれとて、まだかゝぬさうしども、つくりくはへ、表紙紐などいみじうせさせ給ふ。

當時今の平假字を「女手」「女文字」と云ひて専ら女子のかくものと定まつてゐたが、本は「草假字」と呼んだ。「草假字」を源氏の君が巧妙に書く事、又當時「筆手書」が流行したのを、夕霧の君が最も得意としたことが、「梅が枝」の卷に見えてゐるのも、當時全盛であつた假字がきの例とすることが出来る。源氏の君の「草假字」は

からのかみの、いとすくみたるに、さうにかき給へる、すぐれてめでたしと見たまふに高麗の紙の、はだこまかに、ながうなつかしきが、色なども、花やかならで、なまめきたるに、おほとかなる女手の、うるはしう、心とめてかきたまへる、たとふべき方なし。見給ふ人の涙さへ水莖に流れそふこちして、あくよあるまじきに、又こゝの紙屋の色紙の色あひ花やかなるに、みだれたるさうのうたを、筆にまかせて、みだれかき給へるさま見所限りなし。しどろもどろに、あいぎやうづき見まほしければ、さらにのこりどもに、

めもみやりたまはず。
又葦手書の巧妙なことは、同じ巻に

葦手の草紙どもに、こゝろくゝに、はかなうをかしき。宰相中將〇タのは、水の勢ひゆたかにかきなし、そゝげたるあしのちひさまなど難波の浦にかよひて、こなたかなた、ゆきまじりて、いたうすみたるころあり。又いとかめしう、ひきかへて、文字やう、石などのたゞずまひ、このみかきたまへるひらもあめり。目もおよばず。これはいとまゐりぬべきものかなと、けうじめてたまふ。何事も物好みしゑんがりおはする御子〇兵部卿にていといみじうめできこえ給ふ。

以上の例に就いて、當時假字文字の全盛であつた状況を窺ひ知るべきである。

第八節 倫理観

倫理上の非難—作者の深意—先哲の評言—あはれを知る—等木の發端—
—全篇の大綱—上層階級の描寫—不用意の過失—源氏對朧月夜内侍—
柏木の心境—柏木自責の詞—物のまぎれ

倫理上の非難

世の論者中「源氏物語」は我が邦の文學書中傑出したものと喧傳するが、只倫理上の問題

作者の深意

に至つては親子兄弟の面前に公然と繕讀し難いものであると非難するものがある。此の論は小説と修身書とを混同する僻見で素より云ふまでもない。唯初學は動もすれば此のごとき説に雷同する傾向がないとも云へぬ。抑、人情の至極に達すれば、往々盲目的行動に出づることがある。所謂「鹿を逐ふ獵師は山を見ず」とか云ふ譬はかゝる類にも適用することが出来るものであらう。此の作者も固より百も承知の上で、彼の源氏の君對藤壺の君、柏木の右衛門督對女三の宮のごとき、又六條御息所に源氏の君が通はれたなどのごときは倫理上善いこととしたのかと云へば、固より善い事とはしない。只人を戀ひ慕ふ志の深さを示したものである。思慮分別のたしかなる人も思ひの外に、かくのごときにも、知らず識らず立ち至るが戀の情である。此が作者の新意匠の存する所であつて、竹取宇津保などの物語には未だ書きも出ださなかつたものである。俚諺にも「戀は思案の外」とも、又世話にも「戀に上下の別ない」とか云ふのも、此の半面を語るものと見られるではないか。此の物語は固より教訓の爲に作つたものではない。教訓の意を最初から考へて作つた物語は眞の小説ではない。只其の讀む人人の感得する所に従つて教訓ともなり、又ならぬこともある。先哲が「世の中を治むるも源氏物語を見るべし、世の中を亂すも源氏物語を見るべし」と云つたのも同意であら

先哲の評言

あはれを知

う。「要する所、此の物語は唯「あはれを知る」と云ふ一點に止まるものである。「帚木」の巻頭に源氏の君は忠實で謹直過ぎると云ふ程の人物であるが、不圖したことで案外な艶聞が持ち上るのは玉に瑾とも云へよう。されど只無暗に婦女に戯れると云ふやうなことは絶対にないが、若し一旦是非此の女を思ひ込んだ時は怪しからぬ舉動も希有にして起つて来る、と云ふことを絮説してある本文は、大に玩味すべきものである。

帚木の發端

光る源氏、名のみことくしういひ消たれ給ふとがおほかなるに、いとくかゝるすきごとどもを末の世にも聞き傳へて、かるびたる名をや流さむと忍びたまひけるかくろへごとをさへ語り傳へけむ人の物いひさがなさま。さるはいといたく世を憚り、まめだち給ひける程に、なよびかにをかしきことはなくて、片野の少將には、笑はれ給ひけむかし。

まだ中將などに物し給ひし時は、内にのみ侍ひようしたまひて、おほい殿には絶えくまかで給ふを、しのぶのみたれやと疑ひ聞ゆることもありしかど、さしもあだめきめなれたるうちつけのすきくしきなどは、このましからぬ御本性にて、まれにはあながちにひきたがへ、心づくしなることを御心におぼしとむるくせなむあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。

全篇の大綱

此の文こそ全篇を一貫する大綱とも見るべきもので、其の主眼は物のあはれを知るの結果案外な事件を惹起するのが人情の窮極であると云ふのである。此の文を見落したものは決して「源氏物語」の闇奥を窮むることは出来ぬものと云はねばならぬ。

尙ほ又往々、此の物語は上流人が自身の衣服は何人が作るものかと云ふ事すら辨へぬ人士の間の事實を敍して少しも下級社會の生活状態が書いてないのは大缺點であると論ずるものもある。此の物語は、上流人の見る爲に作つたものであるから、上流社會の事が多くあるのである。然らざれば、上流人には感興が薄いからである。上流人は生活が單純であるから、従つてめくしく見えることが多い。此の物語は、すべて人の心の誠をありのままに書いたものである。めくしく見えるのが人の心の眞實である。桐壺の帝が更衣の死後悲歎に暮れてめめしく見えることを自から愼まれることが、桐壺の巻に見えてゐるのを見ても知ることが出来るであらう。

上層階級の描寫

不用意の過失
源氏—臘月
夜内侍

さて源氏の君が、臘月夜の内侍に逢ふことゝなる前に弘徽殿の細殿に立寄られた時、三の口が開いて居るのを見て、世間の女が過をすることのあるのもかういふ不用意のことがあるのから起るのであると心を附けられたことを「花の宴」の巻に

上達部各あがれ、后春宮歸らせ給ひぬればのどやかになりぬるに、月いとあかうさしいでてをかしきを、源氏の君酔心地に、見過し難く覺え給ひければ、上の人々も打やすみてかやうに思ひかけぬ程に、もしさりぬべきひまもやあると、藤壺わたりをわりなう忍びて窺ひありけど、かたらふべき戸口もさしてければ、うちなげきて猶ほあらじに、弘徽殿の細殿に立寄り給へれば、三の口あきたり。女御弘徽殿女御は上の御局にやがてまうのぼりたまひにければ、人づくなるけはひなり。奥のくるゝ戸もあきて、人音もせず、かやうにて世の中のあやまちはするぞかしと思ひて、やをらのぼりてのぞきたまふ。人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる聲の、なべての人とは聞えぬおぼる月夜にしくものぞなきと打ずしてこなたさまにはくるものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへ給ふ。女おそろしと思へるけしきにて、あなむくつけ、こはたそと宣へど、何かうとましきとて

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろげならぬ契とぞ思ふ」とてやをらいだきおろして戸はおしたてつ

とある。最初冷靜に思慮の定まつてゐた時には三の口のあいてゐる不用意を咎めた程であつた源氏が一旦愛情の勃發する時は袖を捉へて遂に戸の内にさへ入るに立至つた。前に女が臆

月夜のあはれを知つて「しくものぞなき」と歎美したのと、源氏が圖らずも美人に逢つて熱情の止め難くなつたのも、亦あはれを知る心に相異なる點はないのである。さりとて之を善いことと思ふのではない。情に棹さして流されたのである。

柏木の心境

又藤壺との關係を終生悔んで懊惱する源氏の心中は、三の宮に逢うて後悔する柏木の右衛門督の心境と一致することを「若菜」の卷に、源氏の君が女三宮の御懷妊を察した述懐に

みかどときこゆれど、たゞすなほに、おほやけさまの心ばへばかりにて、宮仕の程も物すさまじきに志深き私のねぎごとに靡き、おのかしじあはれを盡し見過し難き折のいらへをもいひそめ、自然に心通ひ初むらむ仲らひは、同じけしからぬ筋なれどよる方ありや。吾が身ながらもさばかりの人に、心かけ給ふべくは覺えぬをと、いと心づきなけれど、又景色にいだすべきことにもあらずなど、おぼしみだるゝにつけて、故院壺帝の上も、かく御心には、知ろし召してや、知らず顔つくらせ給ひけむ、思へばその世のことこそは、いとあそろしく、あるまじきあやまちなりけれど、近きためしをおぼすにぞ、戀の山路はえもどくましき御心ましける。

と見えてゐる源氏の君の先非後悔を亦同じやうに柏木が自責の詞は、同じ「若菜」の卷に

さてもいみじきあやまちしつる身かな、世にあらむことこそ、まばゆくなりぬれど、おそろしく、そらはづかしき心地して、ありきなどもし給はず、女の御爲は更にも言はず、我が心地にも、いとあるまじきこと、いふ中にも、むくつけくおぼゆれば、思ひのまゝにも、えまぎれありかず、帝のみめとをも、とりあやまちて、このきこえあらむに、かばかりおぼえむことゆゑには、身のいたづらにならむことも苦しくおぼゆまじ。しかいぢじるき罪には當らずとも、この院源氏に目をそばめられ奉らむことは、いとおそろしく、恥かしくおぼゆ。

此の自責の詞と源氏の君の述懐とは全く同一轍であるが、此の兩者とも固より善いこと、考へてゐないことは明白ではないか。兩者がかくなりゆくのも「物のまぎれ」といふ一語に盡きてゐる。さてこそ柏木は幾許もなくして悶死した。良心の呵責に禁へないので、惜むべき若い身を空しくして仕舞つた。

第九節 審美觀

四季の敘述—音樂の鑑賞—南御殿の春遊—童の雪まろばし—源氏が琴

の感想—音樂家の弊

自然界の事物に就いての觀察はあらゆる方面に向つて表はされてゐる。中でも、四季の景色に對する敘述と音樂に關する鑑識は殊に力を用ゐてある。蓋し當時花鳥風月に逢ひて打出づる錦心繡腸は文化發達の頂點に達した時代相の反映で前後に其の比類鮮ないものと謂はなくてはならぬものと考へられる。今數多絶好の文章の中から春の敘景と、月明なる雪の夜の狀況とを掲げて、其の一斑を示す。「胡蝶」の卷に

彌生の廿日餘りの頃ほひ、春の御前紫の上有様、常より殊に盡して匂ふ花の色、鳥の聲外の里には、まだ舊りぬにやと、めづらしう見え聞ゆ。山の木立、中島のわたり、色増る若の景色など、若き人々の、はつかに、心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる船造らせ給ひける。急ぎさうぞかせ給ひて、おろしはじめさせ給ふ日は、雅樂寮ウツリカサの人召して、船の樂せらる。御子達上達部などあまた參り給へり。中宮秋此の頃里におはします。かの春待つ園はと、はげましきこえ給へりし、御かへりも、この頃やおぼし。おと源氏の君も、いかで此の花の折、御覽せさせむとおぼし宣へど、ついでなくてかるゝかに、はひわたり、花をもてあそび給ふべきならねば、若き女房達の物めでしぬべきを船に乗せ給う

て、南の池は、こなたに通しかよはしなさせ給へるを、ちひさき山を隔ての關に、見せたれど、その山のさきより漕ぎ舞ひて、東の釣殿に、こなたの若き人々あつめさせ給ふ。龍頭鶴首を唐のよそひに、ことごとくしく、しつらひて楫取、棹さす童部皆みづら結ひて、もろこしだたせて、さる大きな池の中に、さし出でたれば、まことの知らぬ國にきたらむ心地して、あはれに面白く、中島の入江の岩影に、さしよせて見れば、はかなき石のたゞずまひも、只繪にかいたらむやうなり。こなたかなた霞み合ひたる梢ども、錦をひきわたせるに、御前の方は遙々と見やられて、色を増したる柳、枝を垂れたる花もえもいはぬ匂ひを散らせたり。外は盛り過ぎたる櫻も、今盛りにほゝゑみ、廊をめぐる藤の色も、濃まやかに開けゆきけり。まして、池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれて、いみじきさかりなり。水鳥どもの、つがひをはなれず遊びつゝ、細き枝どもをくひて、飛びちがふ鴛鴦の、波の綾にも、紋をまじへたるなど、物の繪やうにも、書き取らまほしきに、まことに斧の柄も、くだいつべう思ひつゝ、目を暮らす。

風吹けば浪の花さへ色見えてこや名にたてる山吹の花

春の池や井手の川瀬にかよふらむさしの山吹底もこぼへり

龜のうへの山もたつねじ、船のうちに老いせぬ名をばこゝにのこさむ

春の日のうらゝにさして行く舟は棹のしづくも花ぞ散りける

などやうの、はかなきことどもを、心々にいひかはしつゝ、かへらむ里も忘れぬべう、若き人々の心をうつすにことわりなる水の面になむ。暮れかゝる程に、皇麩といふ樂、おもしろく聞ゆるに、心にもあらず、釣殿にさしよせられてありぬ。

物語の中に春の景色を述べたものは初春の景色から始めて暮春に至るまで、皆とりとゝに希らしくないものはないが、只其の規模の大きく而も音楽を織り込んで平安朝の特色とする龍頭鶴首の船を廣い池に泛べて、多数の樂人を乗せて永い春の日も尙ほあき足らぬ風流の様さながら眼前に現はれ出でたるがごとき情趣を見るべきは右の文を推すべきであらう。

又冬に雪の降りたる夕、雪遊の状況をまのあたりに見るがごとく敍したるものは、冬の敍述中に傑出したものであらうと思ふ。「權」の卷に

雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつゝ、松と竹とのけぢめ、をかしう見ゆる夕暮に、人の御かたちも、光まさりて見ゆ。時々につけても、源氏人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に、雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものゝ

童の雪まろ
ばし

身にしみて、この世の外のことまで思ひながされ、おもしろさも、あはれさも、残りぬをりなれ。すさまじきためしにいひおきけむ人の心淺さよとて、御簾まきあげさせたまふ。月は隈なくさしいでて、ひとつ色に見えわたされたるに、しをれたる前裁のかげ心苦しう、遣水も、いといたうむせびて、池の水も、えもいはずすごきに、わらはべおもしろく雪まろばしせさせたまふ。をかしげなる姿、かしらつきども、月にはえて、おほきやかになれたるが、さま／＼のあこめみだれき、帶しどけなき殿居姿、なまめいたるに、こよならあまれる髪の末、白き庭には、ましてもてはやしたる、いとけさやかなり。ちひさきわらはげて、よろこびはしるに、あふきなども落して、打とけがほ、をかしげなり。いとおほうまろばさむとよくつけかれど、えもおしうごかさでわぶめり。雪と月とうつりあひたるひろき庭上に童部を下して雪ころがしをして打興せしむる配合の妙を、而も簡明に敍した筆力は、何人も見逃し難いものであらう。

又音樂に關する鑑識は、源氏の君の詞を假りて敍述してある。「若菜」の卷に源氏の君が夕霧の君に對して琴の由來を説く所は次のやうである。

源氏が琴の感想

心をやはらげ、萬のものゝね、うちにしたがひて、悲しび深きものも、よろこびにかはりいやしく貧しきものも、たかき世に改まり、たからにあづかり、世にゆるさるゝたくひおほかりけり。この國にひきつたふるはじめつかたまで深くこのことを心得たる人は、多くの年を知らぬ國に過し、身をなきになして、このことをまねびとらむとまどひてだに、しうるは難くなむありけるを、げにはた明らかに空の月星を動かし、時ならぬ霜雪を降らせ雲雷を騒がしたるためし、あがりたるよにはありけり。かくかぎりなき物にて、そのまゝにならひとる人の有難く、世の末なればにや、いづこの空の神のかたはしにかはあらむ。されどなほかの鬼神の耳とゞめ、かたふきそめにけるものなればにや、なま／＼にまねびて思ひかなはぬたくびありける。のちこれをひく人よからずとかいふ難をつけて、うるさきまゝにいまはをさ／＼傳ふる人なしとか。いとくちをしきことにこそあれ。琴の音をはなれては、何事をか物をとゝのへ知るしるべとはせむ。げによろづの事衰ふるさまは、やすくなりゆく世の中に、ひとり後いで離れて心をたてもろこしこまど、この世にまどひありき、おやこを離れむことは、世の中にひがめるものになりぬべし。などかなのめにて、なほこの道を通はし知るばかりのはしをば、知り置かざらむ。調べひとつに、手をひ

きつくさむことだに、はかりもなきものなり。いはむや、おほくのしらべ、わづらはしき曲おほかるを、心にいりしさかりには、世にありとあり、こゝに傳はりたる譜といふものゝかぎりを、あまねく見あはせて、後々は師とすべき人もなくてなむ。このみならひしかど、なほあがりての人には、あたるべくもあらじをや。まして、この後といひては、傳はるべき末もなき、いとあはれとなむなど宣へば、大將〇タげにいとくちをしく、はづかしとおぼす。この御子たちの御中に、思ふやうに、おひいで給ひものし給はゞ、そのよになむ、そもさまでながらへとまるやうあらば、いくばくならぬ手のかぎりも、とどめ奉るべき。二宮〇式部卿今より氣色ありて、見え給ふをなど宣へば、明石の君はいとおもたゞしく涙ぐみてきゝゐたまへり。

源氏の君は琴を以て一生を貫いてゐる人であるから、琴に就いて詳細の説明を試みたことは洵に當然のこと、云ひながら、由來についての識見は蓋し作者の鑑識の發表であらう。殊に尙ほ一つ所謂音樂専門家の藝術となれば、其の一流の教練のみを主として優なるものがないと云ふ説も大に留意すべきものであらう。「若菜」の卷の、朱雀院の御賀に源氏の君が柏木に對して童舞の教習を托せらるゝ條に、

大將〇タはおほやけがたは、やう／＼おとなぶめれど、かやうになさげびたるかた〇舞は、もとよりしまぬにやあらむ。かの院〇朱雀院何事も心および給はぬことは、をさ／＼なきうちにも、樂のかたのことは、御心とどめて、いとかしこく知り調へ給へるを、さこそおぼしめてたるやうなれ。静にきこしめしすまむこと、今しもなむ心づかひせらるべき。かの大將〇タともろともみいれて、舞の童への用意、心はべよく加へたまへ。物の師など、いふものはたゞわがたてたることこそあれ、いとくちをしきものなりなど、いとなかしく宣ひつくるを、うれしきものから、苦しくつゝましくて、ことずくなにて、この前をとくたちなむと思へば、例のやうに、こまやかにあらで、やう／＼すべりいでぬ。此は地下の伶人などの音樂にたづさはるものは、只公役のごとく心得て一向に没趣味であることを説破せられたものである。

第十節 神佛の信仰

兩部神道—源氏の願文—神佛と佛神—古神道の名残—天台眞言—顯密
二教—修驗道—宿命論—紫上の法華供養—女三宮の持佛供養—驗者の
祈禱—八宮の失意—八宮の道才—八宮の態度—浮舟落飾—悟道の眞諦

一夢の浮橋の因據—情操物語の本旨

兩部神道

「源氏物語」の中に於て神佛の信仰に關することの敘述は頗る多く見えてゐる。神道の事は固有の古神道は夙に兩部神道と變じて上古の遺風は殆ど跡を絶つたから、此の物語中では、古神道の事は尋ねるに方法がない。所謂本地垂迹説で造り上げられた神道の爲に、例へば祈禱の文も本地垂迹の意が述べてある。かの明石で大暴風雨の鎮靜の爲に源氏の君が祈られた願文のごときは最も其の顯著なものである。

源氏の願文

君は御心を静めて、何ばかりの過ちにてか、この渚に命をば極めむと、強う思しなせどいと物さわがしければ、色々の御幣捧げさせ給ひて、住吉の神近き境を鎮め守り給ふ、まことに跡を垂れ給ふ神ならば、助け給へと多くの大願を立て給ふ。各々自からの命をば、さるものにて、かゝる御身の又なき例に沈み給ひぬべきことの、いみじう悲しきに、心を起して、すこし物おぼゆる限りは、身をかへて、この御身ひとつを救ひ奉らむと、とよみて、諸聲に神佛を念じ奉る。帝王の深き宮に養はれ給ひて、色々の楽しみに驕り給ひしかど、深き御うつくしみ大八洲に遍く、沈めるともがらをこそ多くうかべ給ひしか。今何のむくいにか、こゝら横さまなる波風にはおぼほれ給はむ。天地ことわり給へ。罪なくして

罪に當り、官位をとられ、家を離れ、境を去りて、明け暮れ、安き空なく歎き給ふに、かく悲しきめをさへ見、命盡きなむとするは、前の世の報いか、此の世の犯しか、神佛明らかにましまさば、このうれへやめ給へと、御社の方に向きて、さまざまの願を立て、又海の中の龍王、萬の神達に願立てさせ給ふ。

と見えてゐる。文中に「跡を垂れ給ふ神」と云ひ、又「海の中の龍王」とも云つてゐる。「海の中の龍王」は「瑜伽論記」に龍宮が大海の下にある莊嚴を説いてゐるから固より佛説に由るものである。但し後世は「佛神」と併稱し「寺社」とも稱したが、本文には「神佛明かにましまさば」と云つてあるだけは尙ほ古風を存してゐる。又源氏の君の歌に「海にます神のたすけにかゝらずば汐の八百あひにさすらへなまし」とある「汐の八百あひ」は大祓の「汐の八百路の八汐路の汐の八百會」を本として詠んである所は、我が古神道の名残は未だ滅びないであつたことが、自から窺ひ知ることが出来るであらう。

又佛道は、平安朝の初期天台眞言兩流の勃興から、天台の本旨たる山林佛教も、いつしか官僚佛教となつて「法華八講」のごとき「懺法」のごとき豪華を競ふさまは、實に古今に比類の少ないものであらう。又眞言は内裏の眞言院に於ける後七日の修法のごときに徴しても

神佛と佛神

古神道の名残

天台—眞言